
王子様の恋

来生尚

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王子様の恋

【Nコード】

N1300S

【作者名】

来生尚

【あらすじ】

国王の弟であり、祭祀を司る祭宮まつらのみや

彼の妻は神殿の神官長。

長男は王太子。長女はかつて神殿で巫女をしていた。

複雑な彼の家族の始まりは、まだ彼が王子だった頃の恋だった。

「そこで運命にあうでしょう」

一つのご神託が彼と周りのすべてを巻き込んでいく。

『3 DAYS』『MY SWEET DARLIN'』『CARA
ME』 スピンオフ作品。

上記3作を読まなくても独立した作品としても読めると思います。

乗ってきた馬を降り、部下の一人に手綱を手渡す。

ここに来る時はいつも胸が躍る。昔は近付きたくも無いとさえ思っていたのだが。人の心持ち一つで風景とはこんな風に見え方が変わるんだな。

「顔を引き締めてください」

横に立つギーが外套の立てた襟の間から重低音で囁いてくる。

「ああ。気をつける。お前も来るか」

問いかけにギーは静かに首を左右に振る。

「外でお待ち致しております。本日はお二人もご同行されておりますので、私は控え室でお二人とお待ちしております」

「すまないな」

「いえ」

ギーに連れの二人を託し、外套に薄く積もった雪を手で払い、建物の前で微動だにせずにこちらを見つめている神官に目を向ける。

相変わらず、いつ来てもここは何も変わらない。

何年経っても。何十年経っても。

石畳を踏みしめ、他の参拝者たちが遠巻きに見守る中、王族だけが、いや正確には祭宮一行だけが入る事を許されている門へと近づく。互いの顔が認識出来る程度の距離に近付くと、神官がゆつくりと頭を下げる。

「ようこそお越し下さいました」

いつ来ても同じ文言だが、彼女がこの中に入ってからこの言葉に変わった。それまでは「お勤め御苦労様です」という慇懃無礼なものだった。

「いつもより連れが多いのだが、構わないかな」

「はい。神官長様よりご連絡を頂いております。どうぞ皆様お入り下さい」

振り返りギーに合図を送り、門兵を兼ねている神官に声を掛ける。

「あれとあと二人だ。よろしく頼む」

「畏まりました」

もつとも、俺が何も言わなくとも二人の事は全力で守るだろうが。この神官のみならず、他の神官たちも総出で。

ゆつくりと馬車から降りて準備している二人の子供たちの、子供というには十二分に大きくなったいる二人を置いて、さっさと門を潜って建物の中に入る。

建物の入り口の扉には別の神官たちが立っているが、その神官たちも目礼するだけでその場を離れない。

代わりによく見知った能面のような顔つきの神官が、ゆつくりと腰を曲げるように深く頭を下げる。

「ご案内致します」

「頼みます」

わざわざ案内して貰わなくとも辿り着けるが、あくまでもここは神殿。神官たちの流儀に従うのが礼儀だ。

王宮でもそうだが、不要だと思われるような慣例でも、それが必要なものであったりする。

例えばこの案内にしてもそうだ。

祭宮に成りすました別の人間が神殿に入り込もうとしているのかもしれない。それを事前に神官たちが判断し、神殿に仇なす者であれば排除する為に、この幾重もの人の壁は作られている。

例えば王宮で自分が外部の人間に会う時もそうだ。

腹心の部下であるうと、外戚だろうと、必ず警備の者たちが確認作業を行ってからでないと会う事は出来ない。それが面倒だと思うこともある。しかしそれは警備上必要な事なのだからしょうがない。もう一つの神殿に比べたら迷路とは言えないが、それでも曲がりくねった回廊を歩いていくと、その先によく知った人物が立っている。

目が合うと、その人物もぺこりと頭を下げる。

ここまで出てきたという事は、中では聞かれたくない話があるということだろう。

「お久しぶりです。祭宮様」

「ああ。元気そうで何よりだよ。今は、助手と呼んだほうがいいのか」

「ええ、まあ。一応助手から先生に格は上がっているんですけど、昔なじみの連中が助手呼ばわりするので」

昔なじみの一人である能面の神官は、少し口角を上げた程度で、基本的にはにこりもしない。視線が助手から送られているにも関わらず。

「立ち話ですみません。神官長様の件でお話が」

「助手と俺の間でそれ以外に話すことは無いだろう？」

「まあ、そうですね。給料交渉とかしたほうが宜しければ、今致しますけれど」

ふつと鼻で笑うと、助手の顔から少し強張りが解ける。

神殿中に重く圧し掛かる緊張感は、入り口から感じずにはいられなかった。俺のみならず、二人の子供たちまで呼ばれるなんて。理由は一つしかない。

「給料は神殿から貰っているだろう。俺からも貰って何に使う気だ」
核心には触れず、敢えて冗談の応酬をする。それでもしなければ、上手く表情が作れなくなる。

ここに来るのは嬉しい。楽しい。

ほんの少しの時間でも彼女と共有できるのだから、これ以上の幸せはない。だから遠くからこの建物を見るだけで、心が躍る。

なのに、今日はその時間は心とむ時間とは言いがたいようだ。でなくては、わざわざこの天候の中子供連れで訪れる事など無かっただろう。

「何に使って決まってるじゃないですか。医療費ですよ」

「それは早急に必要なら幾らでも用意するが」

「……そうですね。王都と同じ設備をこちらにも用意したほうがい

いかもしれません。人員ももつと割きたいです」

「そんなに悪いのか」

仮面を被ることも忘れ、助手に問いかける。

傍目には酷く余裕が無いように見えるかもしれない。が、ここには助手と執事と呼ばれる二人の神官しかない。

執事は彼女に今も昔も仕え続ける「御付神官」

そして助手は彼女が一度ここを去った時、医療技術と知識の向上の為にという名目の元、王都に留学して彼女の主治医という立場までもぎ取った筋金入りの「お嬢教」いや「お嬢狂」である。

その二人よりも彼女の傍にいる者はいない。

そんな二人が、一人は元々能面なので感情を推し量る事は難しいが、ともに何やら胸に秘めたかのような暗い表情を浮かべている。

「……良い、とは言えません」

搾り出すかのような助手の言葉は擦れている。

ああ、来るべき時が来てしまったか。

言葉に出来ない絶望感に視界が真っ暗になる。文字通り、真っ暗になり、ぐらりと体が揺れる。

「大丈夫ですか」

支えるように執事が俺の腕に触れる。

「すまない」

目眩を押し止め、再び助手の話に耳を傾ける。

「ここ最近、寒さのせいもあるのでしょうけれど咳が止まらなくて微熱も続いています。健康な人間なら大したことのない風邪だと笑い飛ばせるのですが、神官長様は……」

「ああ、そうだな」

溜息が言葉と共に漏れる。

元来は超がつくほど健康（本人曰く）なのだが、生死を彷徨った事件、二頭の竜に喰われまくった時期、二度の出産。それが彼女の体には深いダメージを与えている。

あまり長くこの職務が続かない方がいいと、俺以外の誰もが思っ

ているのだが、彼女を解放する日はなかなか訪れない。

「代打が必要そうなら、その手配はするが」

今度は助手が深く溜息を吐く。

「先の方も決して健康とは言えませんから、ここでご無理をしていただくのは難しいのでは？」

「しかし命に関わる状態であれば、無理を聞いて貰わなくてはならないだろう。今更そのことで揉めるような神殿ではあるまい」

「おっしゃるとおりです。しかし先の方にお戻り頂くことに、神官長様が同意なさると思えません。我々も正直手詰まりで、祭宮様のお力をお借りしたくお呼び立て致しました。ご足労頂き、ありがとうございます」

「それは構わないが」

話題に加わった執事が申し訳なさそうに頭を下げるので、片手を上げて制する。

「場合によつては、やはり紅姫様に」

助手の提案に下唇を噛む。そのほうが余計に彼女は納得しなさそうだ。

娘には同じ道を歩ませたくは無い。彼女自身がそれを強く願っている。願いに反して、既に半分は同じ道に来てしまったが。

「神殿の中ではそれで意見がまとまっているのか」

同意せず、二人の神殿内権力者に問いかける。

「……紅姫様以外に、適任はおられないかと」

言いにくそうに執事が口を開く。

紅の竜と同じ色の瞳を持つこの世でたった一人の娘。彼女が生んだ、大切な娘。その娘に彼女と同じ苦悩を味合わせることになるかは。

三人三様の溜息を吐く。

しかし心中は一つ。彼女が少しでも長くこの世に留まっていられることだ。

「まあいい。会おう。彼女に」

この神殿の中では彼女の名を呼ぶことは禁じられている。

通り名である「神官長様」や「お嬢」と呼ぶことは、彼女が遠い存在に思えるので口にはしたくなかった。だから敢えて「彼女」と呼ぶ。

二人の神官は顔を見合わせ、そして同じ速度で同じ角度に頭を下げる。

「畏まりました。神官長様は祭宮様のお越しを心待ちにしておられます。指折りこの日を数えておられました。ですのでどうか」

「ああ。わかつているよ」

執事の言葉を最後まで聞かず、湿った髪を撫でつけ、曇った顔を取り除くべく口角を上げる。

「行こうか」

二人の神官の先導で、彼女と会う時に使う部屋へと案内される。扉の前には片目しか見えない人相の悪い神官が立っている。

ちらりとこちらに視線を向けると、拳を握り、重厚な扉を叩く。

「祭宮様がお見えです」

片目が投げかけた言葉で、情けないが鼓動はこの上なく激しくなった。

開けられた扉の向こう側で微笑む彼女を見たら、言葉に詰まってしまった。

こみ上げてくる様々な感情はあまりにも複雑すぎて、ただ泣き笑いのような情けない顔を彼女に向けてしまった。

「ウイズ」

囁くような彼女の言葉に、一気に理性が瓦解した。

青褪めた顔で微笑む彼女に、俺は何て言葉を掛ければいいのだろう。

ただ一つだけ判るのは、愛している。ただそれだけだ。

情けなくも彼女の横たわる寝台の横に膝を折る俺に、彼女の細い指が伸び、俺の髪を梳いていく。

「濡れてる。雨、それとも雪？」

「ゆ……」

ぐっと喉が詰まって言葉が出てこなくなった。熱くて重たい塊が、あと一言でも口にしたら全部あふれ出してきてしまいそうだ。

「ウイズ？」

優しい瞳が俺を見つめる。瞳の中に映った俺は、酷く情けない顔をしている。

先日会った時よりも幾分か痩せた二本の腕が首に絡みついてくる。出来る限り優しく、包み込むように彼女の背に腕を回す。

「おいおい。お前仕事忘れすぎだろ」

冗談でも言わなければ、ここでみっともなく泣き崩れてしまうかもしれない。

一応王家の権威だとかつてのもあるし、神殿史上において偉大な存在である彼女の夫という立場もあるし。

それなのに彼女は俺の耳元でクスクス笑い声を上げるだけだ。

「いいの。ウイズに会いたかったの。だから、いいの」

そう囁くように言う彼女の呼吸は荒い。抱きとめた体も体温が高いのがわかる。

「無理しなくて良いから。俺はここにいます。だから少し寝ろ。な？」
「ウイズまで口煩くなるのね。もうっ」

お互いいい年なのに、何だその言い草は。お前は自分の娘の年齢と自分の年齢を履き違えていないか。

でも、甘えてんだろ？ 甘えたいんだろ？

それでも今は彼女の体が最優先なので、ゆっくりと腕を解き、彼女を寝台に横たえる。

「ずっとここにいますから。安心して寝てろ」

「絶対？ 起きた時にいなくなったりしないでくれる？」

ちらつと神官たちのほうを見るけれど、誰一人口を挟もうとはしないということは、彼女のことを最優先にすることだろう。

祭宮が長逗留をするなど神殿の歴史に前例は無いと思うが。まあ、彼女には前例などというものは通用するわけもないな。

「ああ。いるから。大丈夫だ」

そう言うのと安心したのだろう。微笑んでそのままゆっくりと目を閉じる。

じつと彼女の横顔を眺め、少しでも穏やかにこの時間が続くようにと心の中で二頭の竜に祈りを捧げる。

二頭の竜。

それこそが彼女と俺を繋いだもの。そして引き裂くものになるのだろう。

出会いはもう二十年以上も前の事になるのだろう。

小さな村で、彼女と出会った。

小汚い村だな。せめて道路の舗装くらいすればいいのに。

まだ明けきらぬ夜道を歩きながら、心の中で悪態を吐きまくっている。

国王である父の第三王子として生まれ、陸軍で指揮を執る次兄に倣い、海軍に席を置いていたのだが、叔父の死により名誉職があてがわれた。

祭祀を司る宮「まつりのみや祭宮」

すつごい重要な役割を担うとか肩書きは大したものなくせに、実際には伝書鳩の代わりのような仕事をしている。

今回は伝書鳩の仕事の中でも最重要項目である「巫女誕生」に立ち会っただ。

確かにさ、重要な事だよ。国にとっては。けど、正直俺にとってはどうでもいい。

水竜の巫女つてヤツは、俺にとっては鬼門に等しい。

まず、婚約者を水竜の巫女に奪われた。いや、正確には水竜に奪われたが正しいか。

恋愛なんてものはした事が無いので、婚約者に対して特別な感情を抱いていたかと聞かれると、微妙。

あれは恋なんてものでもなく、愛なんてものでもないだろう。

一緒になるのが当たり前。そう決められていたからそうするっただけで、沢山の贈り物も詩人のような愛の台詞も心からそうしたいと思っで行った事は一度も無い。そうするのが世の常だから、しただけだ。

婚約者である従妹の姫君にも粗相が無いように。

俺から何にも愛の告白一つ無く、贈り物も全く無いというのは、彼女の名誉に傷がつく。

その程度だ。

だが、人から奪われると非常に腹立たしいのは何故だろう。それは俺のだ、返せ。

水竜の神殿に行くたびにその思いに駆られる。

奪われたから執着しているのか。それとも本当は執着するほどの強い感情があつたのか。自分でもまだ上手くそれが整理出来ないようだ。

それなのに当の本人は俺のことなど既に過去の存在とでも言わんばかりに、水竜様水竜様とまるで恋する乙女のように。

実体の無い化け物なんかはどうして恋心を抱けるのか。全く女とこののはわからない。

それを少しでも解明したいという思いと、お役目をしつかりやり遂げないと王宮で何を言われるかわかったものではないという危機感が、珍しく意欲的に祭宮をやるという原動力になっているようだ。ああ、それだけではない。

謎のご神託「そこで運命に会うでしょう」が、俺を突き動かしているのかもしれない。

このどこにでもあるような村に、俺の運命があるというのか。それは一体どんなものなのか。非常に興味をそそられる。

運命に出会うでしょうって言っても、人とは限らない。

まあこの場合は人だと考えるのが一番妥当だが、何か俺の人生を左右するような出来事に出会うって事かもしれないしな。

どこに落ちてるんだか、俺の運命。

運命的な出会い。運命的な……。酒飲みながらもそのことばかり考えて酔えなかったのは、意外にわくわくしているのかもしれない。新しい「何か」に。俺を変えてくれる「何か」に出会う事を。

もう不遇に追いやられるのは真つ平だ。

確かに次兄に比べたら能力的に落ちるのは判っている。だからそれは認めている。

あの人に魅了されない人なんていないだろう。人を動かす為の飴と鞭をあれほど上手く使える人間に、俺は出会ったことが無い。軍属になり、同じ立場になって余計に感じた。

だがどうして俺ばかりが日陰に追いやられ、せせら笑われ続けなくてはならないのだ。

少なくとも長兄よりは優れているはずなのに。あのような顯示欲だけ強い男よりも俺が劣っているから、祭宮にさせられたのか。

モヤモヤとした晴れない気持ちはずっと、心の中に滞留している。

この醜い嫉妬も、運命が払拭してくれるのだろうか。さすがにそれは他力本願すぎか。

徐々に空が白んでいき、村の中は朝靄に覆われる。どこにいるんだい、俺の運命さん。靄なんかに隠れず、恥ずかしがらずに出ておいで。

やばいな、まだ酒が残っているようだ。どこか井戸か泉で顔でも洗っとくか。ならばいつそ水竜の祠で顔洗って清めればいいか。

こんな商店街のど真ん中には無いだろう。村の入り口のほうにもそれらしいものは無かった。ならば奥か。

土地勘の無い村の中を歩いていくと、何故か人影が一つ。

こんな時間に人が歩いているとは思わなかったな。しかし丁度良い。祠の場所を聞か。

「この村の人？」

恐らく同じ年か少し下くらいに見える少女から女性へと脱皮を始めてかけているような野暮ったい女に声を掛ける。

「はい。あなたは？」

そう切り返されるとは思わなかった。しかし本来の身分を名乗るわけにもいかない。

「ああ、俺？ 祭りの手伝いで呼ばれた。こんな朝早くでも歩いてる人いるんだな」

そう切り出した俺に対し、彼女は明らかに警戒心丸出しの顔でめんどくさそうに受け答えをする。

もしかしたら朝から仕事があつたりするのもかもしれない。

それに会話をしているうちに俺の身分に思い当たつたりするかもしれない。昨日は村を上げての大歓迎だったし。もしバレると面倒な事になるな。

「そうなんですか。それでは私はこれで」

横をすり抜けていく彼女の横顔を見守り、そのまま通りすぎようかと思った。なのに口から吐いて出てきたのは全く異なった言葉だった。

「待つて。初めて会った人をお願いするのも悪いかなって思うんだけれど、この村を案内して欲しいんだ。巫女が生まれ育った村というのを、見てみたいから」

後に思い起こしてみれば、どうしてもあの時引き止めたのか明確な答えが出ない。

彼女に興味があつたわけでは無い。どうしても水竜の祠に行きたかつたわけでもない。

大体、巫女が生まれ育った村を見てみたいなんていうのも方便みたいなものだつた。ある時から非常にその事に興味が生まれたが、恐らくイヤイヤ水竜の祠まで案内してくれる事になった彼女は、饒舌とは言いがたい感じを受ける。

どちらかというと、生真面目で理屈っぽいというのが最初の印象。

水竜が巫女を選ぶ理由は何かと話していた時、悩みすぎて迷宮入りしたような雰囲気を感じたせいでもあるんだけれど。

水竜にとって特別だから、ある一人を巫女に選ぶに決まっている。その理由なんてわかるわけもない。

ただ何か縁があるんじゃないかなと軽く考えていた俺に、彼女は難しい顔をして特別な何かがあれば水竜には選ばれないのかと俺に尋ねてきた。

聞かれても答えられるわけがないんだけど、彼女には大問題のようだった。

もしかして、巫女に他の誰かが選ばれたのが不満だったのかなと思つた。まるでそれが自分が抱いている鬱屈とした気持ちに重なるような気さえする。

「名前、聞いてもいい？」

黙り込んでしまった彼女の心を和らげたくて、そんな風に切り出した。

「本当はちょっと長い名前だけれど、人にはウィズと呼ばれているから、ウィズって呼んで。俺はあなたを何って呼べばいい？」

眉を寄せ、彼女は困ったような顔をしてしょうがなくその名を名乗る。

「ササ、です。友達や親にはササって呼ばれています。だからササって呼んで下さい」

水竜の祠に行くという目的を無事果たし彼女と別れる。

昼前には祭宮として、本日一つ目のお仕事がある。

身支度を整え、祭宮として、村長の家へと向かう。俺たち一行を見つめる人の中にササがいないのか、思わず探してしまう。

祭宮が早朝からうろろしていたなんて流布された日には、また煩いのに色々言われることになる。

幸いいないようなので、安心して村長の家での儀式に望む。

薄暗い部屋、次期巫女承認の席に招きいれられたのがササだと気付いた時、一瞬顔を作るのを忘れてしまった。

どうしてササがここに……？

トントンと至極控え目なノックの音に、はっとして意識を戻す。随分昔の事を鮮明に思い出すものだと思う。それが最悪の事態が近付いているからではないと信じたい。

部屋に控えている二人の神官のうち、彼女の御付神官である執事が扉を出来る限り音を立てないように静かに開く。

内側に開いた扉の隙間から、娘と息子がひよっこりと顔を覗かせる。

アンジェリンという本名の他に紅姫という異名を持つ娘の後ろには、娘が巫女であった時の御付神官が神妙な面持ちで付き従い、兄の養子になった息子フレッドの傍には片目と呼ばれる神官が付き従っている。

「どうやら神殿は今後についての腹積もりがあるようだな。」

「お父様。お母様のお加減はいかが？」

ふんわりとした王族らしい華やかなドレスを翻しながらアンジェリンが部屋に入ってくる。

フレッドは育ちの良さからあからさまに顔を巡らせることはしないが、視線をきよきよと彷徨わせながら妹の後に続く。

二人が彼女の傍に寄りたいたろうと思っただけで立ち上がるうたとすると、アンジェリンが制するように俺の肩を押し留める。

「傍にいてあげて。お母様はお父様に傍にいて欲しいと思うの。」

娘の配慮に頬が緩む。

執事と娘の御付神官が椅子を持ってきて、二人に座るように促す。慣れ親しんだ場所とでも言わんばかりに傳われている娘とは対照的に、息子は少し落着かない様子でいまだに視線を巡らせてあれこれ考えているようだ。

次代の王である息子がこの場所の踏み入れるなんて、これもまた慣例破りだな。彼女の計り知れない影響力が子供たちにも受け継が

れているのかもしれない。本当にすごいな、彼女は。

規則正しい寝息を立てる彼女を見つめると、自然に笑みが零れてくる。

いつもお前は俺の想像以上の事をしてくれる。相変わらずびっくり箱健在だ。

「ねえお父様」

娘の目がじーっと俺の顔を見ているので、やに下がった面を父親らしいものに変える。

「何だ」

「お父様はお母様のどこが好きなの？」

その発言に何故かぶつと助手が噴き出し、ふつと片目が鼻で笑う。一応確認したが執事の能面は変わらないようだ。

なんだかなあ、この緊張感の無さ。ったく。

「そんなの勿体無くて教えられるか」

「え、そうなんですか。僕も聞いてみたかったのに」

意外にもフレッドが食いついてくる。品行方正でお利口で自分の意思をあまり表さないところが逆に欠点と言われるフレッドが、自分の意思を明確に告げることに驚く。そんなに面白いことじゃないぞ。寧ろ父としては恥ずかしいのだが。

困ったな。

そう思いつつ視線を巡らせると神官たちが一人ずつ順に視線を外していく。

「……聞きたいのか。お前たちまで」

問い掛けに答えたのは一番容赦の無い片目だ。

「ぜひともお聞かせ頂きたい」

またブブつと助手が噴き出すと、くくくつと片目が笑みを漏らす。こいつら二人とも、こつちの内情をよく知るから面白がっているな。普段こき使っている腹いせか。

子供たちも助手や片目にはよく会っているので、そもそも緊張感が無い。

「ええ？ 片目も知らないの？ じゃあ絶対聞いておきたいわ」
目を輝かせるな、アンジェリン。

「助手や片目でも知らないことがあるんだ。お父様とお母様の事ならどんな事でも知っていると思っただよ」

どれだけ買いかぶっているんだ、フレッド。

はあと息を吐いて、頭を抱えなくなるのを何とか堪えつつ、ちらつと彼女の方を見つめる。

起きないと良いんだけどな。あまり聞かれたくもないし。

大体なんで二人の子持ちの親父の恋愛話なんて聞きたがるんだ、子供たちは。

期待に胸を躍らせている子供たちと、対照的に面白がっているのがありありとわかる神官。能面変わらずの執事と戸惑う御付神官を一人一人に視線を送る。

「じゃあ、逆になんでお母さんが俺を選んだのか知ってるのか？」

んー？ つとアンジェリンが小首を傾げる。

「お兄様は聞いた事ある？」

「随分子供の頃、何で結婚したのって聞いた事はあるだろうけれど覚えてないよ。それにお父様はいつだってお母様が最優先だったから、そんなものだろうとしか思わなかったよ」

そんなことを思われていたのか。

「仲がいいのは悪い事じゃないと思うわ、私は。ただ二人の世界っていう感じで入り込めなかったのよね。だからそこまでの熱愛の理由を聞いてみたかったの」

「……何故それを今する必要がある」

「だってお父様すぐにはぐらかすんだもの」

「だからって今ここでなくてもいいだろう。少なくとも神官たちまで必要じゃないんじゃないのか」

んー？ つとまたアンジェリンが今度は眉に皺を寄せて首を傾げる。

「お父様、神殿の中でのお父様の評価って最悪だって知ってます？」

特に古参神官の中では」

まあそういう雰囲気は感じるよ、確かに。それでも彼女の夫で祭宮だから無下にはされてはいないが。

返事もせずにいると、アンジェリンが同意と思ったのか勢いづく。「だからね、お母様の御付たちの誤解から解けばいいんですよ。神殿の中核を担う彼らの意識が変われば、お父様を取り巻く環境も変わるはずですよ。これからまだまだお父様は祭宮として神殿と王宮を支えていかなければならないのですもの」

それと馴れ初めは繋がらないだろう。強引すぎやしないか。

それに彼女が辞めた後まで祭宮を続けるつもりは無い。

俺が祭宮に固執したのは、彼女が巫女だったから。彼女が神官長だったから。

「別に私の中での祭宮様の評価は最悪といったものではありませんが」

思わぬところから助け舟が出される。その相手は意外にも執事だ。そんな執事の様子に、片目は溜息を吐く。何を言いたいんだと言わんばかりに。

「もしも神殿内でまことしやかに信じられているような事が現実なら、神官長様は祭宮様に好意を抱く事は無かったでしょうし、お二人のお子様を御生みになられることも無かったかと思います」

「そりゃそうだが、あれを事故で済ませるのは」

「……片目」

執事の言葉に片目が反発し、諫めるように助手が口を開く。

助手の呼びかけに肩を竦めて、片目が盛大に溜息を吐く。どうやら言葉以上に態度で語るという手法に出たようだ。

「そのことを今更蒸し返す必要はないと思うけど。黙んなよ、いい加減。紅姫様や王太子殿下、そして神官長様の御前だよ。王宮の奥で密談を交わしているのとは訳が違うんだ。弁えるってこと覚えたら」

飼い犬のクセに。

音は発せず、助手が口を動かすと、片目の見えるほうの目は釣りあがる。

どうもこの二人の仲は昔から良いとは言えず、いつもこう一触即発状態になる。

パンパンと控え目に手を叩く音がし、二人の間の緊張が和らぐ。

「僕はお父様の話が聞きたいんだ。僕に時間をくれるかな」

につこりと兄に似た穏やかな笑みを浮かべ、フレッドがこの場を治めると、神官たちはフレッドに向かって頭を垂れる。

神殿を手中にという兄の思惑通りといえはそうなのだが、彼女が王家に嫁いだ事によって王家に携わる神官が増え、その忠誠はフレッドにも向けられている。

フレッドの持っている資質もあるだろし、神官長として古くは巫女として神殿を統べる彼女の息子だという事も影響しているだろう。何にせよ、フレッドやアンジェリンの一言は王宮でも神殿でも強い影響力を持つ。

静まり返った室内で、俺にだけ視線が向けられる。

「お父様」

「あー、もう。わかったよ。運命だからだよ。それで満足か？」

フレッドの促すような言葉に投げやりに答えると、ぎゅっと袖口を掴まれる。

掴んだ相手は眠っている彼女で、話を聞かれていたのかと思いきよっとして振り返る。彼女が横たわる寝台の奥の窓からは紅竜の姿が見え、紅竜もまたこの話に興味を持っているらしいことが伝わってくる。

「運命？」

アンジェリンの問い掛けに応えず、寝返りを打って俺の指に自分の指を絡めた彼女の頬を撫で、髪を撫でる。

暫くそうしていると、また寝息が深くなる。

「そこで運命に会うでしょう。そのご神託が全ての始まりだよ」
寝入ったのを見守って、聴衆たちに告げる。

「ご神託があつたのですか」

驚いたような顔をして片目が目を見開く。

「そう。水竜のね」

すべてはここに紡がれるのがわかっていただろうか、水竜には彼女を愛おしく思うことも、こうやって二人の子を得る事も、お前にはすべてわかつていたのか。この気持ちは天の配剤なのか。

竜に背こうとして背けず、結局歩みを共にする事しか出来なかった。

俺にも彼女にも、他の誰かを選び取る権利は無かつたのだろうか。そう思う時、いつも心の中に嵐が吹き荒れる。

決められていた事で、決められていた通りに俺たちは過ごしていただけなのだろうか。

教えてくれ、水竜。紅竜。

俺は、俺たちは自分たちの意思でお互いを選んだはずなんだ。なのにどうしてこうも心が痛む。

「お父様？」

控え目なアンジェリンの問い掛けに、父の顔を作り直す。

「すまないが、少し二人きりにして貰えないか」

「え？」

不思議そうな顔をしたアンジェリンの腕をフレッドが引つ張る。

「行くよ。お父様にお母様との時間を過ごさせてあげよう」

神官たちの承諾も得ずに、フレッドがアンジェリンを引き摺るように部屋を横断していき、神官たちも二人に従って俺たちのいる場所から遠ざかる。

何か言いたげなアンジェリンが何度も振り返って口を開きかけるけれど、フレッドは一切無視しているようだ。

パタンと静かに扉が開く。中には静寂だけが広がっていく。

「ササ、これでお前は良かったのか？」

寝ている彼女に問いかける。当然答えなんか返ってきやしない。それを期待して口にしたわけじゃない。

苦々しい思いが広がっていく中、じつと彼女を見つめていると、
ゆつくりとその瞳が俺を映していく。

「私は私が一番好きな人と一緒にいたい。そう、言ったよ。何十年経っても信じられないの」

静かに詰問する彼女に対して首を横に振る。

「そうじゃないんだ。ただ、もし運命じゃなかったらどうなっていたんだろうって思ったただけだ。どうせなら運命じゃないほうが良かったな」

苦笑する俺の手を握る彼女の指に力が入る。

「それでも私はあなたを選んだわ。きつと巫女じゃなくてもあなたに出会ったら恋をしたと思うの。だって王子様じゃないウィズを好きになったんだもの」

「俺も巫女じゃないササのが好きだな。もういつそ全部投げ捨てて隠居するか」

「それもいいね」

ふふつと彼女が笑う。

残りの時間が短いのなら、彼女と二人きりでしがらみに捕らわれずに生きていきたい。

それが本当に出来る事ならば。

事実、あの頃の俺は運命なんてものを信じていなかった。

ありふれた村のありふれた村娘だったササという名の巫女候補。

彼女が俺の心の琴線に触れ、恋に落ちたのはあの日のいつなんだろう。

「ねえウィズ。あなたは覚えているかしら」

「ん？」

横たわったままの彼女のほうへと体を傾け、そして彼女の頬を撫でる。

くすぐったそうに頬を緩める彼女の表情に自然とオレの頬も緩んでいく。

「あの日、あなたが言ったこと。私は今でも覚えているわ」

「あの日っていつのことだよ」

クスクスと彼女が声を上げて笑う。ああ、まだ大丈夫だ。そう思っ
てほっとせずにはいられない。まだ笑える。まだここにいてくれる。

「やっぱりウィズは覚えてないんだ。残念。あの言葉をずっと大切に
してたのは私だけだったみたい」

全然残念そうにも見えないような穏やかな笑みを向ける彼女が、
すっと掛け布団で自分の顔を覆うようにして目から下を隠してしま
う。

「何だよ。気になるだろ。言えよ」

覆いかぶさるように布団に隠れた彼女の顔を伺う。無理に布団を
引き剥がしたりはしないが。

ちらつとこちらを見る目が見えたかと思うと、また彼女は隠れて
しまう。

いい年こいたオバサンが何やってるんだか。

そう思う反面、恋人としても夫婦としても同じ時間をあまり共有
することの無かった俺たちは、顔を合わせればいつだって恋人の延
長のような関係だったように思う。

「本当はウィズが思うよりもずっとずっとウィズのことを好きだっ
て事、知らないんでしょ」

「ん？」

問いに対する答えとは全く異なるものが返ってきたが、それはそれで非常に興味をそそる発言だ。努めて冷静を装いつつ、続く言葉を待つ。

「あの日、ウイズは私に言ったでしょ。巫女になってもならなくて、思い通りの人生を歩めるように、俺が守るから。だから周りの事は気にするなって」

「……そんなこと言ったか、俺」

「ほら。やっぱり忘れてる。真に受けてドキドキして損したわ。しかも成長して戻って来いなんて言うんだもの。あの日からずっとウイズは私にとって特別だったのよ」

ははっと笑い声を出して誤魔化する。

前者はともかく、後者については良く覚えている。

「殺し文句にやられたか。経験少なそうなお嬢ちゃんだったから仕方ないか」

冗談で誤魔化すと、彼女もまたクスクスと声を上げて笑う。

「殺し文句だったんだ。それ、他にも通用したの？」

「さあ。他の女に言ったことないからわかんないな」

「そうなの？　じゃあとっておきだったってことね」

言った言葉をまっすぐに受け取り、こっちが恥ずかしくなる。でも月日の流れた今なら冗談にも出来るし、逆に月日が経っているからこそ恥ずかしくもある。

「ねえウイズ。お願いがあるの」

「何だ。叶えられることなら聞いてやるよ」

そう応えたとふふつと彼女が頬を緩ませる。

「簡単よ。あの日あなたに教えた私の名前を呼んで。もう誰も私の名前を呼んでくれないのよ」

「……ササ」

切なそうに眉をひそめる彼女に、封印していた彼女の名前で呼びかける。

「ねえ、もういいかな？」

「何がだ」

「私、もう頑張らなくてもいいかな。泣き言言ってもいいかな。ササに戻ってもいいかな」

思いもよらない言葉に絶句してしまうと、彼女が縋るように俺の腕を掴む。

そんな風に思っていたなんて、一度たりとも思っていなかった。

彼女は俺の傍よりもここぞ輝くのだと思っていた。そしてそれを彼女自身が望んでいたのだと。俺というよりも竜たちに寄り添って生きて生きたいと、彼女自身が思っているのだと思っていた。

「私をササに戻して。人生のほんの少しの間だけでいいから、わがママを言わせて」

「どうしたんだ、一体」

突然の変化についていけず、思わず彼女の両肩を両手で押さえてその顔を正面から覗き込む。その目はまっすぐに俺を見つめ、瞳には動揺を隠し切れない俺の顔が映っている。

「最後くらい、我俣聞いてよウイズ」

「ササ？」

「一緒にいたい。一緒にいて。もう一人は嫌」

そう言っただけ涙を見せる彼女の震える肩を抱き寄せて、腕の中に閉じ込める。

何を彼女が抱え込んでいるのかわからないが、それでもこんな風に言い出すことは今まで俺の知る限り無かった。

いつもまっすぐに前だけを見つめ道を切り開いていき、誰にも成し遂げられない事をし、それを誇りにしているように思っていた。

凜として、時として烈しいとも言える厳しさで自他ともに律してきた彼女の何が崩れてしまったのだろう。それともずっと自分を押し殺して無理をしてきたのだろうか。

ならばそれに気付かなかったのならば、俺の落ち度と言えるだろう。

最愛の彼女の心に抱える間に、俺は気付いていなかったのだから。
「どうした。俺は今ここにいるじゃないか」

ぶんぶんと腕の中で彼女が首を横に振る。

「そうじゃない。そうじゃないの。朝起きたらおはようって言いたいし、眠る時にはおやすみって言いたいし、一緒にご飯だって食べたい。たまには喧嘩したっていい。そういう家族になりたかったのよ」

不意に触れた彼女の心の一端に、言葉さえも失ってしまう。

「私が巫女じゃなかったら、ウイズが祭宮じゃなかったら、そういう風になれたのになって思うと、もっと一緒にいたかったって苦しくなるの。物分りのいいフリなんてしなければ良かった」

「おま、いや、ササは後悔しているのか。自分で選んだ巫女を宮妃を神官長を」

その問いにまた首を横に振る。

「……してない。してないけど、もっとウイズと同じ時間を過ごしたかったの。だから無理を言って呼んでもらったの。ウイズにどうしても会いたくなって」

まるでそれが別れの時を予期しているかのような気がして、ぐつと喉のあたりに込み上げてくる。

ゆっくりとそれを飲み込んで、腕の中で涙を流している彼女の髪を撫でる。

その髪には白いものが混じるようになった。あの頃の野暮ったい少女はどこにもいない。神々しいばかりの巫女もいない。優雅な宮妃もそこにはいない。神官たちを束ねる支配者もいない。

「帰ろう。雪が解けて暖かくなったら」

俺の言葉に顔を上げた彼女の顔にも老いの影が忍び寄ってきている。そして……。

答えずに瞳に涙を湛えたままの彼女の頬の涙の跡を撫で、もう一度腕の中に抱きすくめる。

「戻って来い、俺のところに。そう約束したじゃないか。十分に頑

張ったよ。もうこれ以上頑張らなくていい。成長しすぎてびっくりしたくらいだ」

冗談めかしに言うと、彼女の肩がまた震えて涙声が零れてくる。

「もういいよ。よく頑張ったね、ササ」

隠し切れない泣き声が、広い神官長の居室の中に広がっていった。彼女を抱きしめながら思う。

もしかしたら俺以上に、彼女は「運命」に翻弄されていたのだろうか。本当にあの日、彼女を巫女にしてしまつて良かったのだろうか。

運命に抗つて彼女の背を押さなければ、人並みの幸せを彼女は掴んでいたのだろう。

幼馴染の男と結婚して、子供を生んで。

そうしたら俺と人生が変わることは無かつたのだろうが。

こつやつて悩むこと自体がくだらなすぎるが、いつもどこかで「もしも」が頭をもたげる。

もしも巫女になっていなかったら。もしもあの時彼女の命を天秤に掛けなければ。もしも彼女を諦めていたのならば。

沢山の「もしも」が頭の中に浮かんてくる。

ただそれでも一つだけ言えることがある。「もしも」彼女が巫女にならなかつたとしても、彼女を諦める事は出来なかつただろう。

あの日、彼女が俺の腕を掴んだあの瞬間、それを無かつたことは出来ないから。

泣きつかれたのか再び眠りについた彼女の横顔を眺めながら、あの日のことを思い出す。

巫女候補が巫女になるまでには、王家側の儀式と神殿側の儀式の二種類がある。

その中でも出身地で行う儀式は両方の側面を備えているものなので、必然的に巫女候補と祭宮は絡む機会が増える。

出身地で行う一つ目の儀式は、使者による次代の巫女との宣告と、

王家の代表である祭宮の承認。

決して広くは無い村長の屋敷の中の一部屋に通された俺は、巫女候補がどんな女なのか興味津々だった。

あの絶世の美女と名高い婚約者の後釜だ。それなりの美少女に違いない。そういう俗物的な興味も併せ持っていた。

しかし薄暗い部屋の中に入ってきたのは、予想外の人物だった。早朝に出会った、これといった特徴も無いササという村娘。まさか彼女が次代の巫女だったとは。

新鮮な驚きと同時に、疑念が生まれた。彼女は何を迷っているのだ、と。

自分が巫女に選ばれなかったから不満なのだと思っていたけれど、巫女に選ばれたのが彼女自身なのだから、俺の思惑は外れたということになる。

何を悩んでいる。何を迷っている。

その答えを解き明かしたくて、また「辞退」という言葉に瞳を不安げに揺らせた彼女に俺自身も不安を覚え、不必要だとわかっていながらも関わらず彼女と接触することを選んだ。

「女だったら誰でも口説く癖はどうにかなりませんかね」

そう嫌味を言った部下のことなど無視して。

口説こうなんてこれっぽっちも思っていなかった。寧ろ何とか説得して巫女になってもらわなくてはやばいと直感的に思った。

「俺はね、ササとちゃんと向き合いたいんだ。ササと同じ高さで、ササの決断の手伝いがしたい」

他人行儀に振舞う彼女の心を解きほぐして真実が知りたくて告げると、彼女が困ったような顔をする。

いきなり王族と対等に話せと言っても難しいことはわかっている。それでも、彼女の隠した本心を知る為には対等にならなくてはならないと思った。

儀式の時の彼女の態度に迷いを感じたことを素直に口にし、世間話を織り交ぜながら確信へと近づいていく。

迷いの正体。

それは「巫女らしい立ち居振る舞いが出来ないこと」だった。くだらない。そんな程度のことです巫女を辞退するだと。

彼女の可愛らしい悩みに、心の中で笑みが漏れる。

誰だって最初から立場に相応しい振る舞いが出来るわけじゃない。俺や彼女の前の巫女である姫は、生まれた時から立場に見合った振る舞いをするように教育されている。

そんな十年以上掛けて培ってきたものを数ヶ月で出来るようになるわけがない。出来るようになるほうがおかしい。

神官たちだって、徐々に巫女らしくなればいいと思っているだろう。その為の基礎を叩き込んでいただけで。

しかしそんな理由で巫女を辞退されては、こっちの立場としてはたまったもんじゃない。

一応立場上口出ししてはいけないことになっているが、暗に巫女へと押し出すように誘導をしつつ話を進める。

彼女を前向きに巫女にする為にと思って口にした言葉が、何故か俺自身へと返ってくる。

祭宮としての仕事の意義。どうやって祭宮になるか。祭宮らしくなるか。

真剣に悩む彼女と共に考えるうちに、自分の中で燻っていたものの答えが見えてきたような気さえしてくる。

俺は、こうやって悩む巫女候補たちが答えを導き出していけるように手助けしていく為にいるのかもしれないと。

人を動かす、国を動かす。それが国王なのだと思う。

祭宮とは人心を動かす、ひいては国を動かしていく存在なのかもしれない。巫女を作り上げることによって。

そう結論付けつつあった俺にとって、予想外の人間が行く手を阻んでくれた。

彼女の幼馴染で恋人。そして俺の部下。

夕方からの儀式を行うにあたって、警護上の問題もあり彼女に行

動を共にするように提案した後、服装を気にするので神官に話を付けて衣装を手配してもらい、そのついでだから気が紛れればと思つて部下と顔合わせをさせたら……とんでもない相手だった。

まさか巫女候補に求婚する馬鹿がいるとは思つていなかった。

しかし見たところ彼女にその気が無いように見えたので、あつさり玉砕して貰おうと思つて席をはずそうとした瞬間、彼女が俺の腕を掴んだ。

ぎよつとして彼女を見ると、必死に訴えてくる。「行かないで」と。

何で俺？ どうして俺に言うんだ？

疑問で頭の中が真っ白になっていると、指先に籠つた力が抜け、するりと腕から彼女の手が離れていく。疑問とは裏腹に、その手を引き止めたくなる衝動が湧き上がってくる。けれどそれは押さえ込んだ。

運命に会うでしょうというご神託の続き、「ただし決して触れてはなりません」という言葉が続いていた事を思い出したせいだろうか。

だけれど自分の感情を止められなかった。

彼女を部屋の中に残して扉の外で様子を伺っていると、しゃくりあげる声が微かに聞こえてくる。

何か言いたげな部下と、求婚したと告げた下っ端を放置し、再び部屋の中へと足を踏み込むとその手を掴んでいた。

「そんなに苦しいなら辞めていいんだよ」

本当に言いたい言葉はそれだったのに、言えなかった。言つてしまえば彼女が巫女を諦めてしまう気がして。

どうしてそんな風に泣くのかさえわからなかったけれど、泣く彼女を守りたいという思いだけが育つていった。

同時に、幼馴染への恋心から泣くのかと思つたら、胸が苦しくなった。

夕方の儀式を彼女と並んで見ている間、その横顔を見つめていた

ら秘めておくことさえ出来なくなった。

「どんな決断をしようとも、人の世では何も出来ない水竜に代わり、俺がお前を守るよ」

今まで婚約者の姫に告げたどんな愛の言葉よりも、ずっとずっと俺にとっては価値のある言葉だった。彼女の心にどのように届いていたのかは定かではないが。

でもきつと、届いていたのだろう。

彼女自身が言っていた。あの日から特別だったのだと。

彼女と俺の人生が重なることが運命付けられた日。

運命って言葉は大嫌いだけれど、そういうのが一番しっくりくるのがまた腹立たしい。

彼女の生まれ育った村を出る日、彼女以上に迷っていたのはもしかしたら俺なのかもしれない。

「そこで運命に会うでしょう」

平凡な、どこにでもいそうな実直だけが取り柄の不器用な巫女候補。

これが俺の運命だというのか。

考えれば考えるほど答えは闇の中へと姿を消す。

前夜の儀式が終わった後、何度も彼女を訪ねようという気持ちが高まっていった。彼女の顔を見たら、彼女の声を聞いたら、運命の正体がわかるような気がしたんだ。だけれど、自分からもう何も言わないと宣言した後だ。与えられた部屋で酒を傾けて夜を過ごした。

ただ、今になって思う。

本当は「俺の運命」なんかじゃなかったんだ。

悔しいけれど、フレッドに受け継がれた蒼を持つ水竜にとっても「運命」であり、アンジェリンと同じ紅を持つ紅竜にとっても「運命」であり、この国にとってもまた「運命」だったのだろう。

この国の全ての人々にとつての歴史的ターニングポイントを作り出す「運命」を握っていたんだ。

その時の俺はそんな事に気付くわけもないが。

生母のとの別れの時を迎え、彼女はやっぱり普通の女の子の一面を見せる。胸を張って晴れ晴れしい表情で旅立った婚約者とは正反對だ。笑みを見せていた婚約者に対し、彼女は涙で顔をぐちゃぐちゃにしていた。

別れの時を遠めに眺めていた俺のところに、腫らした目を隠そうともしない彼女がやってくる。

どんな覚悟を胸に秘めているのだろう。答えはちゃんと出たんだろうか。

こうやって別れを惜しむということは、きちんと巫女になると決めたのだろう。

普通の女の子ではない巫女候補としての彼女に敬意を払って、接する。なるべく自分の感情は表に出さずに。

だからこそなのか、それとも俺の心の一端が漏れ出たのか、彼女の泣き顔を晒さないように顔を隠してやる。ポンっと一つ頭を撫でると彼女の声がまた震える。

頑張り。

心の中で囁いた。ちゃんと決めたんだからその足で歩け、と。

残る儀式に立ち会う為に彼女が出立した後、村長に挨拶をしてから水竜の神殿へと向かう。

普段なら馬に乗れば十分なのだが、こちらも式典用祭宮として粗相の無い態度で臨まなくてはならないので、馬車で大勢の部下を引き連れて、さながら行列のような様相で向かう。

警護という名目の元、馬車の正面には腹心の部下のギーが座る。することないので外を眺めていると、ギーが突然口を開く。

「案外普通ですね」

「ん？」

ぼーっとしていたので、ギーの言わんとすることが咄嗟に理解できなかった。

「あの巫女候補ですよ。片田舎にも美少女がいるのかと期待していたのですが、どこからどうみても普通の村娘でしたね。さすがの殿下の食指も動きませんでしたか」

ふんつと鼻で笑って返す。

「くだらない。次代の巫女に手を出すわけないだろう」

「そうですね。お兄様方を出し抜くには、手っ取り早く巫女に手をつけてしまったほうが良いかと思っただのですが」

ガタガタと揺れる音で外にこの物騒な発言が漏れ出る事はないだろうが、一瞬ぎよつとしてしまったのをギーがニヤリと笑う。

いくら王冠争奪戦を早期離脱させられたからといって、そんな離れ業という汚い手を使ってまで王冠に手を伸ばしたいと思っていないぞ、さすがに。

弁明するように言った俺を、ギーはせせら笑う。

「姫が戻って来られるのですから、そんな事する必要は無いですしね」

「……戻ってこない。姫は神官長になるのだそうだよ。俺のところに戻ってくるよりも神殿がいーらしい」

くくつとギーが笑い声を上げる。

「ついにふられましたか。おめでとうございます」

「何で嬉しそうに笑うんだよ」

「初黒星じゃないですか。いやー、殿下でも黒星付けられることもあるんだとほつとしましたよ」

「それはさほど重要じゃないだろう」

そう言っただけ黙りこんでしまった俺を見て、ギーが慌てたような顔をする。

「も、もしかして、本気でしたか？」

「何が」

「姫のことです。まさか殿下がそこまで落ち込むほど姫に熱を上げていたとは思いません」

「ばーか。そういうんじゃないよ」

年下の姫が生まれたその日から、記憶に残らない頃から、姫は俺の婚約者だった。建国王の血筋とやらを重要視する熱狂的な連中たちによって、この結婚はとても意味のあるものだったし。

ただ、それだけだった。

胸がときめくだけだとかっていう吟遊詩人が詠うような甘ったるいも

のは、俺たちの間には存在しなかったな。そして今も存在しない。共に歩むことを必然と決め付けられていた関係でしかない。

もし姫が巫女になってもならなくても、それは覆るものではない。「何があっても姫は俺の婚約者だ」

そう返すとギーは深く溜息を吐いて眉間に皺を刻む。

不満がありありと見える、近衛連隊長らしくない顔だ。

「一つお伺いしておきますけれど、殿下って姫にドキドキしたり胸がキュンとなったりすることあります？」

「キュンって。お前」

笑いが噴き出した俺とは対照的に、ギーはまじめ腐った顔をしている。眉間の皺はますます深くなる一方だ。

「一般的な表現で言うときュンで間違っていないと思いますが。もしかして恋も愛もしたことないっていう絶滅危惧種ですか」

「言いたい放題だな」

「言いたい放題です。女遊びの数は多いのに、まさか恋の何たるかも知らないとは驚きでした」

「決め付けるな。そこで」

「決め付けますよ。あなたは姫が恋しい訳じゃないんでしょう。ついでにどの遊び女も貴族の娘たちにも興味が無い。欲望のはけ口程度にしか考えていらつしやらない」

言葉はやたら丁寧だけれど、態度はまるで違う。

どこか哀れむように言われているような気さえしてくるのは、俺の考えすぎか。

「別に恋だの愛だの必要だと思っていない。王族としての義務を果たせばそれで十分だろ」

「殿下……」

「俺の恋愛談義なんてどうだっていいだろ。姫とはそのうち結婚する。それが決定事項だ。それに今は次代の巫女の儀式のほうが重要だ」

これ以上ギーの話を聞く気にもならず、何か言いたげなギーを無

視して話を切り上げる。

そしてまた馬車の外を流れる風景に目を向ける。

今、彼女もこの風景を眺めているのだろうか。一体どんな面持ちで神殿への道のりを見つめているのだろうか。

もう泣いていなければいいけれど。

「いつか恋をしたら教えて下さい。その時には一杯奢ります。ついでにその恋を全力で応援します」

しつこく蒸し返すギーを横目で睨みつけると、これ見よがしに溜息を吐かれる。けれどそれを咎める気にもならなかった。

真面目な巫女候補に感化されたせいか、今は自分のすべき事をキチンと成す事のほうが重要で、恋愛なんてどうだっていい事でしかないのだから。

いい加減馬車に飽きてきた頃目的地の神殿に着き、揺れになれてふらつく体を気取られないようにしつつ神殿の門をくぐる。

すると慌てた様子で、先に神殿に着いていた彼女と共に村を出た神官が小走りで近寄ってくる。

部下たちを下がらせて門の外で待機させ、こちらからも神官へと歩み寄る。ただならぬ様子に、彼女に何かがあったのかと不安が過ぎる。

「祭宮様っ。少々お時間を頂きたいのですが、よろしいでしょうか」肩で息をする神官の様子に眉をひそめ、神官が息を整えて言葉を紡ぎ出すのを待つ。

はあっと一度大きく息を吐いた神官は声を潜め、囁くように想像していなかった事実を告げる。

「次代様が、祭宮様にお会いしたいとおっしゃっております」ササが？

咄嗟に頭に浮かんだのが次代様という彼女を形容する言葉ではなく、ササという彼女の名前だった。

「一体何があった」

疑問をそのまま投げかけると、神官が頭を垂れる。

「申し訳ございません。わたくしの口から申し上げるのは憚られます。もしお許しいただけるのでしたら次代様のお話を聞いて差し上げてはいただけないでしょうか」

「……それは、構わないが」

「ありがとうございます。ただあまり時間がございません」

「わかった。手短に話してこよう。彼女はどこだ」

神殿の中にいるのであろうと思って切り出すと、神官が木と木の間を指し示す。

外だと。一体どういうことだ。

しかしこの神官を問いただしても何の解決にもならないだろう。恐らくこの神官も手詰まりだからこそ、俺に声を掛けたのであろうし。

なかなか一筋縄ではいかないな。祭宮業務も。

腹をくくり、彼女に会う為に木々のトンネルを潜りぬける。トンネルの突き当たりには、小さな広場が見えてくる。

その中で彼女は小さくうずくまる様に座っている。何があったんだと性急に問いただすのは得策じゃないだろう。

顔を上げた彼女に微笑みかけ、道化のように、出来るだけ軽く、彼女の心の負担にならないようにと注意を払いながら声を掛ける。

「次代様、お呼びですか」

心遣いは意味が無かったようで、俺の顔を見た瞬間にササの顔が一気に歪んで大粒の涙が零れ落ちてくる。

「何で俺の顔見て泣くんだよ」

「泣いてる？」

全く泣いていることにも気付いていなかったようで、彼女は不思議そうに頬に流れる涙を指で拭う。

その目で確認してもまだ、泣いているという事実を受け入れがたいように思える。

彼女の泣き顔を見て、辞めることにしたのだと直感的に思った。

元々辞退される可能性も考慮に入れて、仮に巫女候補が辞退した時に対処できるような手筈も整えてある。

その辺りは先の祭宮であつた方の残した文書から、言い方は悪いかも知れないが、どのように誤魔化すのかまで数年単位で計算してある。

巫女に関しては今巫女である姫に継続していただき、水竜には次の巫女を選びなおして貰えばいい。過去に、そういった事例が何例もある。

盛大に送り出した村には、数年経ってからさも巫女の任期が終わつたかのようなフリをして戻せばいい。

全ては予定調和の中だ。こういうこともあると、予測していたはずだ。それなのに、心に何かが引っかかる。

悩む俺に、彼女は話を切り出した。

「私、巫女に相応しいとはどうしても思えない。だって、私には何にも無くって、巫女らしく振舞うことも出来なくって、なりたいたいという強い気持ちもないんだもの。こんな私が巫女になってもいいの？」

「ササ……」

「何にもないの。空っぽなの。自分で選びたいのに、選べないの。いつそ全部ゼロに出来たらいいのにつて思うのに、それも怖くて選べないの。ねえ、ウイズどうしたらいいの。私、どうしたらいいの？」

今更それかよ。

正直にそう思う気持ちが無いわけではない。しかし必死に縋りつくように俺を見つめるササを突き放すことなんて出来ない。

そんなに難しく考えなくたっていいのに。考えすぎるから結局迷宮入りしているだけなのに。

第三者として立ち会っている俺にはその事が良くわかる。

恐らく、本心では「巫女になりたい」のだと思う。ただ自信が無いだけで。

自信なんて無くたって、水竜が巫女に選んだってだけで十分なのだから、胸を張っていればいい。

それが出来ないからササなんだな、きっと。そんなササだから手助けして守ってやらなきゃって俺は思うのだろうか。

可能な限りわかりやすく、さりげなく、巫女を選ぶという方向に導くように話を進めると、ササの瞳に力が宿る。

「私は、巫女になりたい」

その言葉を聞いたとき、心から笑みが漏れた。

良かったな。自分でちゃんと選べて。

本音を言えば、ササが巫女になってくれないと困る。

王宮で役立たずの祭宮の烙印を押されるのは嫌だ。これ以上愚弄されたくない。伝書鳩さえ碌に出来ないのかと後ろ指を指されるのは御免だ。

だけどそれだけじゃない。

二日に満たないわずかな時間だったけれど、ササという人物の人となりに触れ、彼女の助けになりたいと思った。彼女の望むように生きられるように。

だから悩んでもちゃんと自分自身で答えを見つけてくれて良かったと思う。

初めて、祭宮の仕事において「充足感」が得られた。

「今度会う時は、巫女様だな」

この目の前の野暮ったい少女が巫女としてどう変わるのか、それもまた一つの楽しみだ。

「そっか。そうなんだね。そうしたら、こうやって話したりするのも最後だね」

「ま、一応そういうことになるな。二人きりで話している時はともかく」

何気なく切り出した言葉に、ササの頬が染まる。

あわあわとし出したササがおかしくて、笑みが漏れる。

ポンポンと頭を撫で、いつでも助けになるからと告げると、ササ

が嬉しそうに微笑んだ。

「成長して戻ってこいよ」

あの姫みたいになれっていうんじゃないで、ササがなりたい巫女になれるように。ササしかねない巫女になれ。

もしも辛くなったら、俺のところに戻ってきたらいい。

どうせくだらないことでこれからも悩んだりするんだろう。だけれど「巫女」に押しつぶされて、そんな事口に出したり出来ないんだろうから。

「頑張るよ。成長したでしよって胸張って言えるように」

笑顔で言えるようになった彼女に安心した。

そして「巫女になった」彼女と神殿で会う。

その瞳は自信に満ち溢れていた。俺と彼女で出した結論は間違っていないと確信した。それなのに。

「ボクの言いつけを守らなかったから、当分返す気は無いよと、水竜が」

言いつけていうのは「触れるな」ってヤツの事なのか。確かに彼女の頭に触れたりしたが、別に抱きしめたりした事は一度も無いぞ。

で、返さないってのは何のことだよ。姫の事なら、返せ。あれは元々俺のものだ。

しかし、ちよつと待て。

何故、彼女に触れたら姫を返さないんだ？ 何かがおかしい。何かが引つかかる。一体何のことだ。

その答えを知るまで、俺はどれだけの時間を無駄にしてしまったのだろう。何十年も続く後悔がこの瞬間から始まっていたなんて、能天気な俺は気付いていなかった。

「お父様」

そつと部屋の中に入ってきたアンジェリンに声を掛けられる。

「フレッドは」

「帰りました。やるべき事をやらずにお母様の傍にいたら、それこそお母様に笑われるからつて。こんな時くらい、お母様のお傍にいて差し上げればいいのに」

不満そうに眉間に皺を寄せるアンジェリンの様子に頬が緩む。

アンジェリンは母としての彼女の記憶は無いに等しい。フレッドと共に国王夫妻に育てられている。

だから巫女として選ばれた時など、かなりの反発を見せた。実際にここに着てからササともぶつかった事があると聞く。

だが、今のアンジェリンは彼女を母として認め、慕っているように思える。

俺の関与できない数年間の神殿生活が、二人の仲を変えたのだらう。

「お父様、聞いてます？」

「ああ、すまない。聞いているよ」

ブンつと怒り顔で、それでも眠っている彼女を起こさないように囁き声で話を続ける。

「お兄様は冷たいです。お母様はお兄様の傍にもいたいと思ってるはずなのに。どうして帰っちゃうんだらう」

ポンつとかつて彼女にしていたように、頭に軽く手を乗せて撫でる。

「フレッドは優しいよ。彼女が元気になって王都に戻ってくると信じている。その為の布石を打つ為に戻ったのだらう。また彼女を信じていると言外に伝える為に、ここに留まらないのが最適だと思っただらう」

「わかりにくいです」

不満そうに口を尖らすアンジェリンの姿に、かつての彼女の姿が重なる。

「詩はもういい。いらない。奇跡の巫女の詩なんて、大げさで嘘ばかりじゃない」

そう言って唇を尖らせた彼女の姿が。あの時着ていたのは紅の衣だったか。

「ねえ、お父様」

「なんだ」

「ここには今、私とお父様しかないわ。だから教えて。お母様ってどんな巫女だったの」

真面目な顔に戻ったアンジェリンが身を乗り出して聞いてくる。

ちらつと眠る彼女に目を向けるけれど、寝息は深く起きる気配は無い。

「それは一番詳しいのは執事だ。片目や助手でも快く教えてくれると思うが」

「そうではないの。お父様から見たお母様ってどんな感じだったのか知りたいの」

「……随分そこに拘るな」

「だってね」

そう言っただけアンジェリンは窓の外を眺める。

巫女を経験した者たちは例外なくこうやって窓を眺めては竜の声を聴こうとする。

竜とは巫女にとって、どんな存在なのだろう。

「アンジェリン。巫女にとって竜とは何なんだ」

「え？」

「ずっと思っていた。竜は何故巫女を魅了して離さないのだろう。人ではない、化け物といってもいいような存在なのに。どうして巫女たちは竜に心を捕らわれてしまうのだろう」

クスクスとアンジェリンが笑い声を上げる。

その笑い方がアンジェリンの育ての親である王妃と、かつて姫とこの神殿で呼ばれていた今はアンジェリンの教育係である女性と重なる。彼女の血が流れているのに、実母である彼女のそれとは重ならない。

「お父様、竜に嫉妬しているの？」

「は？ 何を言っているんだ」
クスッともう一度アンジェリンが笑い声を上げる。

「竜はね、巫女がいなかったら孤独なの。たった一人で仲間もいないの。だから巫女はこの世界でただ一人だけの竜の味方なのよ。だから一生懸命守るのよ、巫女たちは竜を」

それは彼女も昔そんな事を言っていたが、それだけでここまで愛情を化け物に注げるものなのか。

「それに『特別』って素敵じゃない。私だけが竜の声を聴く事が出来る。それってすごく魅力的な事よ。で、それよりもお父様、お母様の事よ」

思考を巡らせる余裕も与えてはくれないらしい。

ずいっと体を寄せ、全身で話してくれと訴えてくる。

「執事にでも聞いて来い」

「もうっ。お父様ってば」

腕を組み、窓の外に目を向ける。そこに紅色の竜がいる。

最近はある山には帰っていないようで、いつも彼女の部屋から見える場所にいる。

彼女がその命を終えた時、紅色の竜が彼女を食べにやってくるといふ。その時を虎視眈々と狙っているのか。

そういえば、竜の愛情表現は血肉を喰らって自らの血肉にする事だと彼女自身が言っていたな。忌々しい。例えば髪の毛一本だろうと奴等には渡したく無い。

ふいに紅色の竜と目が合う。

じーっと見つめるその瞳が語ろうとしているものは伝わっては来ない。残念ながら、俺には竜の声など聴こえない。

それなのに、まるで哀れまれているような気がしてならない。

俺は竜にさえ哀れまれなくてはならないような、そんな惨めな生涯だったとも言っのだろうか。

彼女の心は永遠に竜に捕らわれていて、結局は俺の一人相撲だったのだろうか。

「私が他の誰にもあなたを渡したくないの。だからどこにも行かないで」

記憶の中の彼女が囁く。一人相撲じゃないと言っかのごとく。

それでもずっと、胸の中にぽっかりと開いた空洞が埋まらない。

俺は、竜には敵わない。

「お父様？」

「あ。ああ」

アンジェリンの問いかけで紅竜から目を逸らす。

そして再び眠る彼女に目を向ける。助手の薬が効いているのか、よく眠っている。

「別にこんなに無理しなくたって良かったのに」

そっと眠る彼女の乱れた髪を撫でる。命を削ってまで竜に寄り添う事など無かったのに。

なのにいつも無理をさせてしまう。俺が彼女を望んでしまったから。

彼女が最も嫌う二つ名を利用して神殿に縛りつけてしまった。それは俺を彼女が選んでしまったからだ。俺がみつともなく彼女を諦めきれなかったからだ。

「いつだって無理をして無茶をして周りを驚かせる。そんな巫女だったよ、お母さんは」

「お父様」

神妙な面持ちでアンジェリンが俺を腕を掴む。

「私、昔お母様に聞いた事があるの。どうして私やお兄様やお父様を捨てて神官長になったのって」

子供ならではの無邪気な問いかけだったのか。それとも年頃の娘

の難しさから出た言葉だったのか。ただ、俺を絶句させるには十分過ぎるほどの衝撃があった。

目を見開いた俺のことなど気にする様子もなく、アンジェリンが続ける。

「お母様は何も言わなかったわ。でも、今ならわかる。他に誰もいなくて仕方なくここに來たのだろうって事も。それでもお母様はここで幸せそうだったの」

打ちのめされたように、もう何も発する事も出来なくなってしまう。

俺たちというよりも、やはり彼女にとってはこの神殿にいる事のほうが幸せだったのだろう。彼女の居場所は俺の隣なんかじゃない。神官たちに囲まれたこの神殿という場所だったんだ。

言いようのない絶望感に唇を噛む。

彼女の顔、紅竜の顔、そしてアンジェリンの顔を順番に見つめていき、娘アンジェリンと目が合う。

「でもね、お母様は執事たちに泣いて頼んだの。お父様に会いたいつて」

「……え？」

「執事が言ってた。お父様はお母様の運命なんだって。表裏一体の存在なんだって」

「え？」

「随分前に執事も聞いたことがあるんだって。本当に神官長になっていいんですかって。そうしたらお母様はね、こう言ったの」

「なんて」

声が掠れ、裏返った。

「立派にやり遂げなければ、お父様の傍にはいられないからって。お母様は本当にお父様のことが好きなのね。いつだってお父様が基準なんですもの、悔しいけれど」

わけも無く、涙がこみ上げてくる。

こんな風に身を削ってまで神官長をやり遂げる必要なんて無かつ

たのに。無理をしないで良かったのに。

「もつと早く知っていたら」

頭を垂れ、両手で頭を抱える。

どこですれ違ってきたのだろう。何故彼女を信じきれなかったのだろう。

そんな風に想ってくれていたなどとは思っていなかった。ただ一方的に彼女を追い求めているのは自分だと思っていた。

手を伸ばせば、いつでもそこにいたのに。

「返して欲しいんだ」

窓の外、こちらを見つめたままの紅竜に声を掛ける。

例え窓が閉まっていたても、俺の声が紅竜には聴こえるだろう。

「もう十分だろう。残り僅かな彼女の時間を俺にくれないうか。頼む」

無反応かと思いきや、にたりと紅竜が口角を上げる。やはり聴こえているのだろう。

その表情にほっとして、大きく息を吐き出す。

「春になったら、いいか」

アンジェリンに問いかけると、満面の笑みが返ってくる。

「いいわ。その代わりお母様がどんな巫女で、お父様との間にどんな恋物語があったのか教えてくれたら」

ふつと鼻で笑うと、アンジェリンは嬉しそうに目を細める。

「結局そこか。別に面白い話なんか無いと思うが」

「あら、面白いかどうか決めるのは聞き手側よ。それにね、例の毒殺疑惑とかお父様に直接聞いてみたいことが沢山あるの」

そういう直球なところは彼女に似なくてもいいと思うのだが。

「わかったわかった。ただし長いぞ。覚悟しとけ」

「じゃあお茶頼む。お父様もいる？」

「お茶はいるが、傍聴者はいらないぞ」

「……察しがいいわね、お父様」

「当たり前だ」

クスクス笑うアンジェリンが立ち上がって部屋の外へと姿を消す。静まりかえる部屋の中、そつと彼女の頬へと手を伸ばす。

眠る彼女の額に口付けすると、首には銀色の鎖が見えている。この先にあるのは俺と彼女を繋ぐ青い石。二つで一つ。俺の願いが込められた石。

「具合悪いときくらい外せばいいのに」

そつ口に出したものの、頬が緩んでしまつのは止められない。

恋焦がれたのはいつからだつたのだろう。それが恋だと気付いたのは思いがけない瞬間だつた。

この石を彼女に贈るきっかけになつたのは、非常に醜い嫉妬と独占欲だつた。

腕を組んで、煩い酒場の中を眺める。

身分がわからないように、一般の海軍兵の制服に身を包み、待ち合わせ相手を待つ。

人を誘っておいて遅れるとは。

昼間の兄の事を思い出して、またもやもやとした気持ちが湧き上がってくる。

水竜の神殿での大祭や巫女交代の儀式について父である国王に報告を終え、祭宮の正装の上着を脱ぎ、ポンっと執務用の机の上に投げる。

図らずも溜息が零れ落ちる。

祭宮になった時にあてがわれた部屋は広く、以前海軍に属していた時に使用していた部屋よりもずっと豪華だ。

しかしそれが「祭宮」を飾り立てる演出の一つとしか思えない。

事実、檣の木の本棚の中は古臭い歴史書ばかりで、今現在この国に必要なものなど一つも無い。

窓辺に寄って外を眺めると、幾重にも重なる王宮の塔や建物の向こう側に大河が見える。王都の端の船着場には使われる事のない軍艦が係留されている。

二度と動く事のない、二度と乗る事のない俺の船。

海軍の將軍であつた俺の持ち物。

決して楽しいとは言いがたい時間であつたはずなのに、海へ戻りたいと思う。軍属であつた時にはこんな閉塞感は無かつた。状況を打破すべく、努力する事が可能だつた。

だけれど、祭宮に何が出来る。何も出来やしない。

祭事を司る宮、祭宮。王宮の中のお飾りでしかない。例え巫女を産み育てる事が出来たとしても。

高い塔の一室であるこの場所から外を見つめると、眼下に広がる王宮も王都も領土も、この手の中に掴めそうな錯覚を覚えるというのに。

「祭宮」

静かに声を掛けられ、全く気配を消していた相手に驚いたことを悟られないよう振り返る。

「あ……將軍殿、いかがなさいましたか」

兄上と口をついて出てきそうになり、慌てて言い換える。

穏やかな笑みを浮かべ、次兄であり現在は全軍の総司令官でもある兄は、片手を挙げて室内にいる者たちに退出を促す。

「いつ、お戻りになられたのですか」

確か海軍の演習に参加する為、また隣国の視察の為に数ヶ月前から出かけていて国を留守にしていた。

「情報に疎いね、祭宮。いくら自分に関わりのない事とはいえ、ありとあらゆる情報を手中に収めておく事は必要ではないかな」

「……昨日水竜の神殿から戻ったばかりで。申し訳ありません」

「それは理由にならないね。たとどこにいても国の全てを把握しておくようにするといいいよ。カイ・ウィズラール」

最後の一人が部屋を出たのと同時に、兄は俺の名を口にする。

日に焼けた肌、筋肉質な体。それなのにどこか線の細さを残したままの兄の視線は鋭い。

「お前は馬鹿だね。父上の真意を読み取ろうともしない」

「兄上。お説教しにわざわざいらしたんですか。こんな王宮の外れまで」

挑発的な長兄とは違い、次兄はいつも落ち着いて穏やかなのに、俺に対しては容赦なく厳しい。出来の悪い弟の教育をせねばとばかりに。

軍にいた時もそうだった。兄がそういう態度を俺に取るからか、軍では部下たちに大將軍と呼ばれる兄に対し、小將軍などと蔑称を付けられていた。実際に俺自身に足りないものがあることはわかつ

ていた。兄には到底及ばない事も。

「ああ。他にお前に言ってやれる人間などいないだろう?」

「確かにそうかもしれませんが」

「だろう」

につこりと笑うのに、目が笑ってはいない。表面的は穏やかさの裏に冷酷さが同居しているように思えるのは、部下たちへの厳しさを知っているからだろうか。

「お前の事だからどうせ拗ねているのだろうと思って来てみたら、思ったとおりだ。お前は父にも臣下の者たちにも甘やかされて育てられているから」

「そんな事はないですよ。甘やかされているのは兄貴のほうです」

「ああ、まあ、お前の言わんとすることはわかるが、あれとは違う事もわからないのか」

眉をひそめる俺の頬を、ぴしゃんと痛くはない強さで兄が叩く。

「誰かが何かをしてくれないじゃなく、自分で何かをしる。自分で何が出来なのか。何を求められているのか。きちんとその頭で考えれば答えはおのずと出てくる。事実、父上はお前に『カイ』を捨てさせていないだろう」

「どういう意味ですか」

「俺はお前と王位を争う気は無い。欲しければそんなものはくれてやる。まずは自分に課せられたものの意味を考えて、自分なりの答えを見つけ出すんだ」

至近距離で伝えられる言葉に返答さえ忘れ、兄の瞳を見つめ返す。ふわりと微笑んだかと思うと、兄がふうつと溜息を吐く。

「いつになったらお前は大人になるんだろうね」

馬鹿にされたはずなのに腹は立たない。

兄に比べたら、俺は器も小さいし、子供っぽいところを残したままなのは間違いない。

「本当は巫女姫との結婚の祝いにと思っていたのだけれど、祭宮就任祝いに遅くなったがこれをやる」

目の前に大きな青い石を差し出される。

「隣国の鉱山でしか取れない貴重な石らしいよ。原石を切り出したままだから、加工は自分でやってくれ」

かなりの値の張るものだということは一目でわかる。

「どうしたんですか、これ」

「隣国で買ってきた。祭宮に相応しい宝石を贈りたくてね。それを二つに割って姫に贈ってもいいし、宝飾品の一つとして加工してもいいし、好きにしたらいいよ」

王都の中で今流行りの、一つの宝石を二つに割って装飾品に加工して恋人同士で持つと、互いの石が一つに戻ろうとして惹かれあい続けて離れないとかいうあれか。

「いや、そこまでは……」

咄嗟にそれは無いと否定すると、兄がクスクスと声を上げて笑う。

「お前の好きにしたらいいよ。祭宮の正装の色合いとも合うだろうしと思つて買ってきたから、好きに使ってくれれば」

「ありがたく頂戴します」

「堅苦しいんだよ」

ポンつと背中を叩かれ痛みに顔をゆがめると、兄が楽しそうに頬を緩ませる。

多くを語ろうとはしないが、兄が伝えようとしている事はわかる。他家に養子に出されたけれど、直系王族であるという事には変わらない。今でもまだ玉座を狙える場所にいるのだと。

父もなんらかの意図があつて俺を祭宮にしたのだと言いたいのだろう。そして兄はそれが俺にとって最善だと思つているのだらうという事も。

あの時は兄の雰囲気になまけてしまったが、まるで子供のように扱われ、拗ねているだのなんだのと。思い返すと釈然としない気持ちで、自分のことを反芻せざるを得なくなる。

どうしてそんな言い方を兄がしたのか。何を本当は伝えようとし

ていたのか。どうしたら子供扱いされなくなるのか。

そんな風に考える事すらも、兄の計算のうちなのだろう。一手二手どころかその先も考えて戦術を組み立てる人なんだから。

あーあ。

それでも悔しいとは思えないんだよな。これがクソ馬鹿兄貴だったら腹が立つけれどさ。

目の前の泡を立てている液体を口の中に流し込み、貰ったあの石の事に頭を巡らせる。

半分に割って姫に渡してもいいけれど、どうせ結婚するのは決まっているし、今は水竜に夢中だから俺のことなんか眼中にないだろうし、贈るだけ無駄だよな。やっぱり正装用の装飾品に仕立てるかな。

「お待たせしました」

結論が出たところで、ちょうど良く飲み相手がやってくる。

「遅かったな」

「すみません。会合が長引きました」

幼少の頃から友人兼部下として付き合っているギーが、目の前の席に座ってふーっと溜息を吐く。

「やっとゆつくり飲める時間が出来ましたね」

「そうだな。こここのところ禁酒生活だったからな」

「水竜の大祭で酒の一つも振舞われなかったとは思ってもいけませんでした」

「それはお前、あそこは俗世とは隔離されている世界なんだから、酒を振舞うなんて事ないだろう」

「昔から祝い酒というすばらしい言葉があるというのに。残念です」
そんなに残念だったのだろうか。芝居がかった態度に笑みが漏れる。

運ばれてきた酒をぐいぐいと半分くらい一気に飲み干したところを見ると、本当に酒に飢えていたのかもしれない。

「それにしても、新しい方は地味な、まあ姫と比較するのは可哀想

ですけど、これといって特徴もない普通の人でしたね」

「……ああ。そうだな」

頭の中には、必死に俺の腕を掴んで「行かないで」と言っただけのことが頭に浮かぶ。同時に、すがすがしい笑顔で「巫女になる」と告げたササも。

「本当に普通の女の子だよなあ。選ぶ基準が全くわからない。あれでこれから先大丈夫なんだろうか」

ちゃんとやっていけているだろうか。神殿の中で泣いたりしていないだろうか。

いつもいつも、と言ってもほんの数日しか接してはいないが、いつも泣き出す一歩手前の顔が泣き顔ばかり俺に見せていた。

傍にいたら、守ってやれるのに。

頼杖について思考を巡らせる。

あの誰も入り込めない迷宮のような神殿の中で、ごく普通の村娘はどうやって巫女になるのだろうか。

声が聴こえるようになるか不安だと漏らしていた彼女も、儀式を終えた後にはきちんと水竜の声を聴いてご神託を伝えてきた。

その姿には自信が見え隠れしているようにも思えたが、どこ तक おどおどとした感じは拭えず、彼女の本来の姿を彷彿とさせる。

神殿は姫を中心とした組織として出来上がっているのだから、居心地は悪くないだろうか。

「何を考えていらっしやるんです」

「……いや。別に」

意識を現実に戻し、残り少なくなった酒を煽るように飲み干す。

脳裏に浮かぶ「ごきげんよう。祭宮様」と微笑んだ新しい巫女の姿を打ち消すように。

「その新しい方に部下が面倒をおかけしたので、事情聴取をお願いします」

「ああ、あの若い」

「すみません。まさかあのような暴挙に出るとは思ってもおらず。

本人には口外する事の無いよう指導しておきました」

「手間を掛けたな。しかしまあ、真相を知らずに連れて行ったのだから、あまり本人を責めても仕方ないだろう。こういう事も想定していなかったこちらの落ち度だ」

ギーは目礼をして臣下としての態度を示したかと思いきや、あっさりと態度を豹変させる。

「給料を貯めて宝飾品を持って行ったとか、どんな付き合いをしていたとか、いらん事まで聞かされて食傷気味です。今日はとことん飲みましょう」

ふつと鼻で笑うのを、ギーがギロリと睨む。

「他人の恋愛談義を聞くほど不毛な時間はありませんね。これも気まぐれにあなたが新しい方にあの部下を会わせようなんて思ったからですよ。何であんなに構ったんです。ほつといても良かったでしょうに」

「え？ 構ったつもりはないが」

「……無意識に口説いてたんですか？ いくら姫に結婚先延ばしにされたからといって、ところ構わず誰でも手を出すのは止めてください。面倒が増えるだけです」

「そういつつもりはなかったが。手を出す対象にはならないだろう」
巫女なんだからと声を潜めて付け足すのを、ギーが腹の底から湧き上がってきたかのような溜息で打ち消す。

「だといいですけれどね。後々面倒なことになっても困りますからね」

「ならないだろ」

笑って否定するけれど、どこか居心地の悪い思いが同居する。それに付ける名前を、俺はまだ見つけられてはいない。

あの大祭の日以来、胸につかえる「何か」が取れない。

その重石のように引っかかるモノは、ササの事を思い出す度に重みを増す。

もしも巫女にならなかつたら、彼女の事を俺はどうするつもりだ

つたんだ。あの用意していた家に住まわせて、それから……？
だけれど、巫女にならなかったら俺が……。

「二つに分けた石が一つになれるように、なんて誰が考えたんでしようね。あの部下もその例に漏れず贈ろうとしていたようですし」
思考の中にギーの声が流れ込んできて、再び意識を現実に戻す。

「ふーん。石をね」

「そんな迷信に縋りつきたい気持ちっていつのが理解出来ませんね。なるようにしかならないでしょうに、男女の仲なんて」

「でも俺は好きなんですよ！」

何かを続けようとしたギーが声のしたほうを振り返る。

今日は安酒場ではなく、そこそこの張るほうの酒場を選んだつもりだが、そんな場所でこんな大声を出す奴がいるとは思わなかった。

ギー同様に、声の主を何気なく探すと、噂の若造くんだった。

「振られてなんかいませんっ。まだ答えは貰ってないですから。俺はこの石をササに渡すまで、絶対諦めたりしないんだあああつ」
額を押さえてギーが肩を落とす。

どうやら指導はあまり効果が無かったようだ。まあ今彼女の名を口にしたところで、その名と巫女が結びついたりする事は無いだろうが。

「必ず迎えに行くんだあああああああつ」

誰が貴様にくれてやるか。

酔いに任せて叫びまくる男に呆れるやら、腹立たしいやら。

「すみません、きちんと黙らせてきます」

腰を浮かしたギーを手で制する。

「構わないよ。何も機密に触れるような事は口にしていない。寧ろお前が動けば奴と彼女の接点に気付かれる確立が上がるだけだ。放っておけ」

「しかし非常に顔色が悪いですよ。気付いてらっしゃいます？」
「あ？」

声に怒気が含まれているのに、発声してから気が付いた。

「ああ。気にするな。あれは関係ない」

と言いつつも、頬がピクリと動くのを感じた。この言いようのない憤りのような感情は一体何なんだ。とりあえず深呼吸して少し落ち着く事にしよう。

「最近やけに仕事熱心ですね」

「やるべき事をやっているだけだ」

「大体月平均2回つてとこですか。水竜の神殿通い」

「煩い。世代交代が上手くいっているかどうか、確認しているだけだ」

部下であるギーに嫌味を言われるのを交わし、極力顔色を変えず、手元の書類へと目を通す。

兄上に言われたからだというわけではないが、内政に関する資料の写しの幾つかで祭宮の決裁が必要な物を水竜の神殿へ行く道中読めるようにと持ってきた。

軍属であつたからというのはい訳に過ぎないと言う事は自分でもわかつているが、この国の内政に目を向ける事が無かつたのは紛れもない事実。

まずは自分の基盤をキチンと整えるところから始めよう。

手に入れられなかつたものを嘆くよりも、いつか必要な時に動けるように。

祭宮はその名のとおり祭事を司る。

祭事というと漠然としてつかみ所がないが、早い話が全領土の精神的な支柱である水竜への信仰の取りまとめをするというのが祭宮の成すべき仕事の一つだ。

だからどこそこの街で祭りを行うだとか、どこぞの村の祠を修復するのに金銭的負担を王家に求めているだとか。些末な事ではそういったものも含まれる。

一番煌びやかで重要とされる仕事が信仰の中心である水竜の巫女と王家の橋渡しであるが。

どんな小さな村の祭にも、王家は必ず干渉する。寄付という形で金を出す事によって。

どういう基準でその金額を決めるかはそれぞれの領主が決裁を求めてやってくるが、最終的には判を俺が押さない限りその金額は出ない。

本当にその金額が適正か、不正はないのか。そういったものを見据えるのも俺の仕事の一つだろう。

以前に將軍だった時にも金を動かす仕事をしていたが、どこにでも金額に色を付けてくれと言ってくる輩はいる。

たまたま捲っていたのは、西方の海沿いの集落から上がってきた書類だが、どこにも不備は無いように見える。

不備が無さすぎというのは穿った見方だろうか。

「ギー」

「はっ」

「この集落の人口及び、直近五年の交付金の額を王都に戻ったら調べておいてくれ」

「畏まりました」

真面目くさった顔のギーに書類を渡し、馬車の外を流れる風景に目を向ける。

水竜の大祭以来だが、ちゃんとやってるか心配だな。

頭に浮かぶのはたった一人の顔ばかり。

はたとその事実に気付き、溜息について足を組み直す。

そしてまた腹の底から沸きあがってくるイライラとは違うモヤモヤと漂うものに溜息を吐く。

これは一体何なんだ。

それは水竜の神殿が近づけば近づくほど、大きく膨らんでいくように思える。

「祭宮様。お久しぶりです」

水竜の巫女になったササが、神官長である姫の執務室で俺に笑顔を向ける。

その笑顔に自然と頬がほころぶ。

「巫女様もお元気そうで何よりです。何もお変わりございませんか」
「はい。お気に留めて頂きありがとうございます」

緊張しているのだろう。少し言葉にたどしたが残っているが、それでも一生懸命巫女をやっているのが伝わってくる。

ちゃんと巫女、やれているじゃないか。あの時辞めなくて良かっただろう。

言いたくても言えない言葉を微笑みで隠し、彼女に座るようにと促す。

神官長になった先の巫女であり、俺の婚約者である姫君は、いつものようにニコニコと花の様な笑顔で俺や巫女を見つめている。

造花のような笑顔と、野に咲く花のような笑顔。

二人を見比べ、そんな風に思う。

「今日はどうなさいましたの？ お越しになられたと言う事は、何かご神託を必要とされていらつしやるのかしら」

切り出してきた神官長に、笑みを浮かべたまま首を左右に軽く振る。

「いいえ。巫女様と神官長様のお顔を拝見しに参りました。お二人とも慣れないお立場でご苦労されているのではないかと思います」

「まあ。ご心配頂きありがとうございます。わたくしも巫女もこのとおり元気にやっておりますわ。どうぞご心配なさらないで」

おほほと声を上げて笑う神官長に軽く会釈をし、巫女である彼女へと目を移す。

少し困ったように視線を動かす彼女は、まるで言葉を搜しているようにも見える。

美辞麗句だらけの感情の籠らない会話に引き込むのは可哀想だな。
「そういえば神官長様。先日こちらから送りました書状に書かせていただきましたが、個人的に神官の教本をお借りしたいのですがよろしいでしょうか」

「ええ。構いませんけれど。何にお使いになられるのかしら」

「少々神殿の祭祀と外の祭りとで整合性が取れない部分がありまし

て、確認をしたい点が数点あるのですが」

「構いませんわ。今、用意させますわね」

神官長が立ち上がり、壁際で待機している二人の神官のうちの一人に声を掛ける。

あれは以前から見た事がある神官だから、神官長付の神官の「下僕」か。

ということは、もう一人の神官が巫女付の「執事」だな。あの顔は見た事があるが、どこでだったか。ああ、大祭の日に彼女の話を聞いてくれとやってきた神官か。

記憶の糸を手繰りよせ、書面で確認していた神官と実際の神官とを一致させる。

神官たちから目を離して目の前に座る彼女に目を向けると、緊張しているのだろうか、こわばった顔で俯いている。

「元気だったか」

彼女以外には聞き取れない小声で話しかけると、驚いたように目を見開いて彼女が顔を上げる。

「もう慣れた？」

声を上げること無く、彼女は小さく首を横に振りかけてから縦に振る。

誤魔化そうとしても誤魔化しきれない様子が可愛らしく、思わず笑みが漏れる。

目を細めて彼女を見つめると、彼女は頬を染めて恥らうように俯いてしまう。

「あんまり頑張りすぎんなよ。弱音吐きたくなったら言えよ」

両手をそれぞれ膝の上で握り締めている姿は、ものすごく頑張っているんだらなっているのが伝わってくる。

一生懸命、彼女の望む「巫女らしく」なろうとしているのだろう。力の入った肩の力が抜ければと思って告げると、ゆっくりと彼女が顔を上げて口を開きかける。

ど
何かを言おうと口を軽く開いた瞬間、弾かれたように彼女が『奥^{おく}

殿』と呼ばれる水竜の座す場所が見える窓のほうへと目を向ける。
最初横目で見ていたのを、徐々にそちらに顔ごと向けて、幾度か瞬きをする。

先の巫女である神官長もやっていた仕草だ。きっと、水竜と何やら話をしているのだろう。

しばらくそうしているのを見ると、徐々に彼女の手のこわばりが解けていき、最後にはふわりと零れるような笑みを浮かべる。

ちくり。胸が痛む。

「大丈夫ですから」

小声で告げる彼女の表情は、先ほどまでとはうって変わって明るいものに変わっている。

溜息を飲み込み、安心したと言外に伝えるために笑みを返すと、彼女もにっこりと笑う。

「ご心配頂きありがとうございます」

そう言った彼女の顔は巫女の顔をしている。水竜に守られ、支えられている水竜の巫女の顔を。

教本を受け取って神殿を後にし、領地の城へと足を向ける。

このまますぐに王宮に戻っても良かったのだが、連れてきた兵士たちも疲れているように思えたので、神殿周囲の祭宮直轄領の視察という名目の元数日間滞在する事にする。

ごく稀にしか使う事はないが、それでも城の中は心地よく、手入れが行き届いている。

正装を脱ぎ捨て、王宮よりもずっと狭い自室に籠り、暗闇の向こう側を見つめる。

宵の闇の中に薪で照らされて浮かび上がる水竜の神殿が見える。

あの中に、水竜と水竜の巫女はいる。この距離感が、祭宮との距離感なんだろうな。

そう思った瞬間、またちくりと何かが胸を刺す。

窓辺に寄りかかり、腕組みをしたまま外を眺め続ける。

ここは王宮の中とは違い、監視の目も無い。

眼下には喧騒も広がってはいない。逆に盛大に虫たちが合唱をしているのが聞こえるくらいだ。

だけれど、一人で考え事するにはちょうど良いように思う。

僅かな部屋の灯りだけで、あとは月明かりが景色を照らしている。何がしたいのか、何が出来なのか。祭宮として、カイ・ウィズラールとして。

手近なところにあった酒瓶を開け、グラスに酒を入れて傾ける。

「そこで運命にあうでしょう」

頭の中にふいにあの神託が浮かぶ。

運命、ね。

本当にササが俺の運命だというのだろうか。あの呆れるほど不器用で生真面目な巫女が、俺の運命？

運命って、何だよ。あらかじめ出会う事を大いなる何か、この場合は水竜にか？ 決められていたと言うのか。

遡れば俺が祭宮になることも、ササが巫女になる事も。

全てが決定事項で、それ通りに俺は動いているというのだろうか。もしくはササを巫女に仕立て上げるのが俺の成すべき事だったというのか？

じわりじわりと憤りが湧き上がってくる。誰かに決められた人生なんて御免だ。

「守りたいと思ったんだけどな」

コンッと音を立ててグラスをテーブルに置いて、また水竜の神殿を眺める。

それさえも仕立て上げられた感情なんだろうか。だとしたら、こんな感情捨て去ったほうがいい。

「どうせ水竜が守ってくれるんだから」

昼間に自信に満ちた目で俺に微笑みかけた彼女を思い出すと、苦々しい思いが広がっていく。

俺が守りたいのに。

湧き上がってきた言葉に、はたと現実を引きずり戻される。
何でそんな事……ああ、そういうことだったのか。
くくくつと笑みが漏れ出た。

こんな単純なことに気付いていなかったのか、俺は馬鹿か。

「それでお父様はお母様に恋していることに気付いたの？」

「結論を急ぎすぎだ」

目をキラキラと輝かせるアンジェリンに呆れ顔を向けたけれど、
アンジェリンの瞳は更に輝きを増す。

「それで、それで？」

「王都に戻る前に一度神殿に行つて、自分の考察と実際の感情が伴
っているかを確認した。それで行動に移すことにした」

「何したの？」

問いかけるアンジェリンに、手首のところで昔と同じ輝きを放つ
石を見せる。

「一つの石を二つに分けたんだよ。運命じゃなくて自分の手で引き
寄せたくて。まじないに頼るなんて情けないだろう」

「うっん。すごく素敵。そういうの憧れちゃう」

王宮に戻り、すぐに王都一の彫金師に二つの装飾品の作成を依頼
し、兄上から頂いた石を預けた。

水と竜との意匠をこらしたものと、注文をつけて。

それと時期を同じくして、ギーより例の若い近衛兵が俺への面会
を求めていると聞いた。

あの男が俺に何か言いたいことがあるというのは、彼女のこと以外
ありえないだろう。

王宮では外部の目もあるので、領地の城で夜の闇に紛れて応接間
で話を聞く。同席しているのはギーだけで、最低限の機密は守れる
ようにと配慮して。

「申し訳ありません。祭宮殿下」

がちがちになっている兵士に、座るように促して極力近い距離で話をするように配慮する。

いかに自分の城とはいえ、どこに目も耳もあるかはわからない。

「単刀直入に聞くが、話と言うのは」

「はい。あの、俺の、あ、えっと、自分の幼馴染のことなんですけれど」

一呼吸おき、兵士の顔を見据える。

敬語もうまく操れない。さえない村娘ならば釣り合いが取れそうな男だなと思った。

「ああ。彼女のことで何か？」

極力確信に触れないようにしつつ、男の出方を待つ。

しばらくの空白の後、意を決したように男は顔を上げる。

「これを、彼女に渡して下さい。俺、隊長に言われて気付いたんです。独りよがりでは彼女に迷惑を掛けるだけだって」

ちらりとギーを横目で見つめると、ギーの視線が外れる。一体どんな話をしたんだか。後で問い詰めてみよう。

「それから、こんな事を言うのは失礼ですけど、もし出来るならですが……」

言い淀んだきり何も言おうともしない男をあえて促したりもせずにいると、上目遣いで俺の事を恨めしそうに見つめてくる。

一体なんなんだ。俺が何かしたか？

「絶対に俺なんかには弱いところを見せないサ……彼女が、殿下には見せてたんです。もしこの先彼女が困ることがあったら助けてやってください」

「肝に銘じておこう」

極力感情を排して返事をする、男はふうつと息を吐き出す。

緊張しているのか、それとも何か回答に不満があるのか。おおよそ出世とは無縁そうな男だな。

恐らく彼女と対面した時に、俺の腕に彼女が縋りついた事のことを言っているのだろうが、彼女はあの時迷っていたから俺を頼りに

していたに過ぎない。

そこで色恋沙汰と単純に結び付けられても、彼女も困るだろうに。「彼女に何か伝えることはあるか？　あるのならばこの手紙と共に伝えるが」

「ないです。それに全部書きましたから」

「わかった。では預かるう。話は以上か？」

「はい。よろしく願います」

直角に頭を下げて出て行く男には目もくれず、手渡された手紙を見つめる。

まあ、触った感じでは絶対に渡すと喚いていた宝石は入っていないようだから、水竜の神殿に持っていても害は無いだろう。

これを受け取った彼女はどうするのだろうか。

なんにしても自分の腹積もりは決まっている。これを受け取った彼女がどうでるのはかは、彼女の自由だ。

「巫女がいつまでも強くいられるように、私からのプレゼントです」男からの手紙を渡したついでのような形で、真実を隠したまま彼女へ二つに分けた宝石のうちの一つを手渡す。

二つで一つであると言った瞬間、彼女が驚きの表情を浮かべたのは気のせいではない。

一瞬、あの村での彼女との距離感が戻ってきたかのような錯覚がしたのに、あっという間に水竜によって現実に引き戻される。

更に足繁く水竜の神殿に通っていることを咎められ、来るなど釘を刺される。

水竜め……。

触るなどとか、来るなどとか。本当に邪魔くさい化け物だな。ほんの少し彼女の本心を覗き見ようとすれば横槍を入れてくる。

嫉妬か？　化け物でも嫉妬なんかするのか？

なんにしても、うだつのあがらない一兵士よりも、よっぽど面倒な相手だ。対人間なら負ける気はしないが、化け物はどう対処した

らいいんだ。現状明らかに負けてるし。

気付いてしまえば、それは何の障壁にもならない。

モヤモヤもイライラも、全部同じところから生まれ出ているのだから。

自分の中に生まれた新たな感情に蓋をし、日常では今までと変わらないように振舞う。

彼女の事が気にならないわけではないが、来るなと釘を刺された以上、水竜の神殿に出向くわけにもいかない。

以前より放っていた影からの報告と、意外に筆まめな神官長から送られる情報から彼女の日頃の様子を窺い知ることも出来るので、じたばたせずに王宮に籠っている。

王宮ではそれなりにやる事もある。

一年中で最も祭りの多い時期である夏を前にし、決裁書類が山積みになっているからだ。

真面目に一つ一つを精査しようとすると、膨大な量の資料を読んでも多角的に判断しなくてはならない。

どの村にも街にも公平になると、全ての資料が出揃ってから比較検討しなくてはならない。人口、祭りの規模など、報告書から漏れている信仰心の程度なども。

淡々と祭宮の仕事をこなす一方、養子に出されたとはいえ未だ直系王族の証である『カイ』を持っているので、第三王子としての仕事も舞い込んでくる。

早い話が晩餐会やら何やら面倒な、父王の私的行事に借り出されては花を添えなくてはならない。

しかも今回は唯一両親を同じくする妹の誕生会なので、適当に顔を出して終わるというわけにもいかない。

壁の花でいたいものだが、どんなに閑職に追いやられても第三王子。しかもまだ父は後継者を正式決定していないだけに、ご令嬢方

やそのお父上たちが群がってくる。

貴族の子弟でもあるギーが警備を兼ねて傍にいるが、周囲の人間はまるでギーがいないかのごとく振る舞い続ける。もっともギーはギーで幾重ものご令嬢の輪に囲まれているのだが。

鬱陶しいこと限りない。

付けすぎた香水の匂いも鼻につくだけだし、これ見よがしにご令嬢の豊満な肉体をさりげなくアピールされても興味をそそることは無い。

俺の腕に手を回し体を押し付けてくる娘を止めると、ニタニタ笑う父親に言いたくなるが、下手な事を言うと余計な面倒が起こるので放置しておく。

どいつもこいつも代わり映えない「貴族のご令嬢」に過ぎない。心が動かされる事は全く無い。

別にササがどうこうというのではなく、この下心丸出しのお嬢様方とお父様方に嫌気がさすだけだ。しかし長兄であるクソ兄貴は、何でこんなものに引かかったんだか。

どこの馬の骨かもわからない街の娼婦を妃に迎えた長兄の姿が視界に入る。

俺同様お嬢様方を回りに侍らせ、しかしだらしなく目尻を下げて鼻の下を伸ばしている姿は、我が兄ながら情けない。

対照的にもう一人の兄、次兄である兄上は陸海の將軍たちの筋肉の壁が囲んでいる。女っ気など微塵も無い。それでもご令嬢方の兄上に対する評価は概ね良好だ。お近づきになりたくてたまらないというのが真相だろう。

そんな二人の兄の姿を横目で見つつ、当たり障りのない会話に終始する。

あー、つまんねえ。

水竜に釘を刺されなかったら、こんな宴なんか欠席して水竜の神殿でササの顔見にいけたのにな。

こんな時にまでそんなことを思う自分がおかしくて、フンと鼻で

笑う。

本当に恋ってヤツは厄介なものだな。

どこか客観視している自分がいて、今までに感じたことの無かった感情が自分の物では無いようにも思え、新鮮な発見に興味を覚える。

例え傍にいたくとも、手の届くところにはいなくても、こんな風に心を奪われるものなのか。

まさか俺が恋なんてものをするとはね。

思わず笑みが零れると、何やら懸命に話していたご令嬢の顔が桃色に染まり目を輝かせる。

「では今度わたくしと一度ゆっくりとお話する機会を設けて頂けますでしょうか」

そという話をしていたのか？ 全く聞いていなかったが。

心からの笑みが口元だけの笑みに変わる。

「それは我が婚約者の姫君に申し訳ありませんので、辞退させて頂きます。姫にあらぬ誤解をさせてしまいたくありませんからね」

少し残念そうに眉を寄せるが、ご令嬢はそれでも笑顔を絶やさない。

「殿下は情の深い方でいらっしゃいますのね。大切に大切に巫女姫様のことを想っていらっしゃるんですね」

否定も肯定もせず、曖昧に微笑みを浮かべて返し、手に持ったままだったグラスに口を付ける。

カラン、と氷がグラスを叩く音がし、ご令嬢の視線がグラスへと移り、それからゆっくりと手元へと視線が動く。

目を凝らすような視線を感じるが、全く心当たりが無い。何か袖口に汚れでも付いているのだろうか。

ご令嬢の視線の先にあるものを確認するために心持ち上にグラスを持ち上げると、手元に戻ってきたばかりの青い石が姿を現す。これ、か。

しばらく何かを考えるかのように小首を傾げて考えるようにして

から、ご令嬢が意を決したかのように俺へと視線を移す。

「殿下、以前からこういったものを身に着けていらつしやいました？」

その言葉に近くにいる他のご令嬢方の視線が一斉に俺の方へと向けられる。

言葉の真意を探ろうとするかのようなご令嬢方の視線から逸らさべく、グラスを下げて宝石を袖の中へと隠す。

しかし不躰だろうとわかつているだろうに、質問をしてきたご令嬢の追及の手は緩まない。

「とても素敵なものですから、もしよろしかったらもう一度お見せただけませんか。それともお隠しになりたいようなものなのか」

さすがに王宮に巢食うの古狸の娘。どういえばこちらが不利になるか、わかつて切り出してくれる。

ま、詰めが甘いけどな。

「これですか。これは將軍である兄から贈られた祭宮就任祝いの贈り物ですよ。何でも隣国でしか取れない貴重なものだそうですよ」

見せながら石を受け取った経緯を説明する。上辺だけの嘘を吐くよりも、裏を取るべく動かれた時に真実を告げておいたほうが問題が生じない。

二つに分けたものの、一つでも十分な大きさを保持しているそれは、単体の装飾品としても見劣りのしない優れたものだ。

他のご令嬢も手首で光る石をまじまじと見つめる。

「素敵なものですわね、殿下によくお似合いですわ」

ご令嬢の中の一人が感嘆交じりに呟くと、同調の色が広がっていく。

それを俺はただ笑顔で見つめ、そつと青い石を反対の手の指先で触れ、ゆつくりと腕を下ろす。

「兄上のお心に恥じないような祭宮になりたいと思っておりますが、まだまだ精進が足りない若輩者です」

「そんなことはございませんわっ」

それから始まる俺を湛える素晴らしい言葉の数々を、張り付いた微笑みのまま聞き続け、適当に相槌を打ち続ける。

あっさりと誤魔化されるご令嬢方に、失笑を禁じえないが。

水竜の大祭に向けて、祭宮業務は忙しい。が、これを片付けなくては水竜の神殿には行けない。

滑稽だとわかりつつも、張り切って仕事をしているのが自分でも十二分にわかる。

去年に比べてこのやる気。誰かに突っ込んで笑って欲しいくらいだ。

精力的に動き回り、余計な横槍が入らないように根回しもしっかりとしてから水竜の神殿へと向かう。

去年の今頃は嫌々やっていたというのに、俺って結構単純だな。クスクスと馬上で笑みが漏れたのを、白い目でギーが見つめて呆れたように溜息を吐く。

「ルンルンうきうき、非常に見苦しいのでおやめ下さい」

ぷつと声を出して噴き出す。

「誰がルンルンうきうきだ。キュンに引き続き、お前の語録は妹姫と変わらん」

斜め後ろのギーと歩調を合わせるべく馬の手綱を引き一旦立ち止まり、それからまたゆっくりと馬上で肩を並べる。

比較的軽装な俺と比べ、ギーは馬が闊歩するたびにガチャガチャと腰のあたりの剣が鳴る。

そんなギーからルンルンうきうきという単語が飛び出すとは。意外性がありすぎる。

「キュンを未だ覚えていただけ이었다ようでありがとうございます。殿下の記憶力の良さは、もっと別の所に生かしていただきたいものです」

「能力は無駄と思える部分でも使わなくては錆びるからね。有益に

使っているつもりだ」

「さようで。ではもう一つ覚えて下さい。その浮かれた顔はおやめ下さい」

「浮かれている？」

「ええ。数ヶ月ぶりに神殿にお出向きになられるのが嬉しいのはわかりますが」

何かと勘繰る輩もいるし、下の者にも示しがつかないか。

「わかった。覚えておこう」

余計な言葉は付け足さず、それだけ口にして会話を打ち切る。

恋というヤツは厄介だ。

今まで持ち得なかった弱みをいとも簡単に作り出してしまふ。それは俺だけなのだろうか。それとも恋とはそういう愚かなものなのか。

……やめた。

考えたってどうしようもない。

ササじゃないんだから、頭で考えまくったって俺が上手く答えなんか出せるわけない。

なるようにしかない。今までだったそうだった。これからだつて同じだ。

恋だつて。

ササがどんな風に巫女をやっているのかを見たくて、大祭の初日から顔を出す事にした。

去年は巫女になるという事で神殿も神官も彼女も手一杯だっただろうが、今年は万全の準備をして迎えたはずだ。

礼拝堂の中の祭宮用に誂えられた最前列の席で、祭壇に立つ彼女を見上げるように見つめる。

俺が手配させた青色の布で作られた衣を身に纏い、きらびやかな宝石を身に着けて祝詞を奏上する姿は、神々しい巫女そのものだ。

どんな時間帯でも祭壇には外からの陽の光が天窓から入るように

なっており、天然のスポットライトが彼女の姿をよりいつそう照らす。

先の巫女である婚約者の姫も同じようにしていたはずなのに、こんな風に心が震えることは無かった。

神である水竜は確かにここにいる。

そう思わせるような、神秘的な巫女がそこにはいた。

だから、その日の夜に神官長の執務室に彼女が姿を現したとき、ギャップに思わず目を見開いてしまった。

あの巫女と同一人物だとは思えないほど、煌びやかな巫女の正装を身に着けているのに、そこにいる彼女は一年前の彼女と同じ等身大の彼女だった。

「……巫女様」

ササと彼女の名を口にしようとして、咄嗟に「失礼致しました。

巫女様だとは思いませんでしたので」と言葉を付け足して誤魔化す。

ひょっこりと、まるで覗き込むように顔を出すのは反則だろう。

そんな動作とは対照的に一生懸命巫女を取り繕っているのがまた、可愛すぎる。

王宮で作っているのと同じような笑顔を貼り付けて、顔がにやけそうになるのを気付かれないようにする。

しかしまあ、これが祭壇の上にいた巫女と同じだなんてな。

目の前の椅子にちょこんと腰掛けて所在無げに頼りなさそうに視線を巡らせる彼女は、一年前にどうしようかと揺れていた自信の無いササと重なる。

「お似合いですね」

でも、立派な巫女に成長しているとも思う。

それが嬉しくもあり、巫女の正装が似合うと褒めると、ベールで表情はよくわからないが声に動揺が現れている。

褒められ慣れていなくて、ちよつとの事で動揺して。俺の周りにいるご令嬢方や姫君たちとは全く違う。いまや彼女こそこの国で最も高貴な女性だというのに。そんなの片鱗を全く感じない。

だけれど去年と同じ彼女ではなく、一年間で成長したのだなど、彼女が巫女になったことは間違い無かったと改めて思う。

率直に彼女の成長を褒め、彼女の努力を湛えようと、彼女から思いもかけない言葉が零れ落ちる。

「あの日、ウイ……いえ、祭宮様にお会いできて、本当に良かったと思っています」

ぼろりと俺が教えた俺の名を零した彼女に、笑みが漏れる。

「そんな風に感謝される事は、一つもしておりませんよ。すべては水竜の御心のままに」

名前を言いかけた事を聞き流そうかなとも思っただけけれど、彼女の出方が見たくなった。

一体どんな顔をするのか、知りたくなった。

祭宮然とした態度を改めて、あの日初めて会った時と同じように話しかける。

「だけど、あの日、俺もササに会えて良かったと思っているよ」

運命なんか信じないけど、確かに彼女が俺を変えたのも事実。

兄上にもう少しちゃんとやれと言われただけじゃない。

前向きにひたむきに頑張る彼女が、俺に教えてくれた事がある。

「巫女がササで良かった。ササだったから、俺もいっぱい色んなことを考えさせられた」

「それってどういう……」

「今だから言うけどさ、俺は巫女の意義だとか、水竜の意味だとかつてものは、一切考えた事も無かったわけ。だけどササは、俺から見たら、そこまで考えなくてもいいだろうってくらい悩んでいたわけだ」

「……普通悩むでしょ、突然巫女だなんて言われたら」

「それは比較対象がないから、わかんないね。たださ、俺はなんとなく祭宮っていうのは、神託を国王陛下に伝えるだけの仕事って思ってたからさ、色々考えているササを見て、俺もまた色々考えたわけだよ」

誰にも話した事もないような話を何で俺はしてるんだろう。

どうして彼女にはこんな話をしてしまうのだろう。

けどちゃんと伝えておきたかった。一緒に悩んだから、ササが巫女になったから、俺は今ここにあると言う事を。

「簡単に要約すると、悩みまくった結果、真面目に祭宮やるかなっていう気になったっていう、そういう話」

お前が俺を変えたんだと伝えたつもりなのだが、何故か怒り出す。

一体怒りの導火線はどこにあったんだ。

「あー、そういうことなんだ。それじゃ、色々言ってみたのも、口からでまかせ？ その場しのぎ？」

「何でいきなり怒り出すんだよ。わけわかんないなあ、お前」

「お前とか言わないで下さい。真剣に話してくれてると思っていて私がバカでした」

「はあ？ 何言ってるの？」

ぜんぜんわかんねえ。何だよ。

一体何を突然怒り出して、何に突っかかってきてんだよ。

ペースに巻き込まれてもしようが無いとわかっているのに、ムカつくのは抑えられない。

「だってそうでしょ。私は真剣にウィズに感謝してたのに、あの時全然真面目に考えて無かったってことでしょ。もう、ウィズなんて嫌い！」

真剣に考えてただろうが。あんなに真面目に考えた事はめったに無い。

どうしたら一番ササのためになるかって、どうしたらちゃんと望むように生きられるようにしてやれるかって。本気で俺だって悩んだんぞ。

なのに、嫌いってどの口が言うかつ。

「嫌いって、お前子供かよ」

「だから、お前って言わないでってば」

お前って言われるのが気に入らなかつたわけね。

はいはい。言い直しますよ。悪かったですよ。お前って言わなければいいんだな。

「わかったから。じゃあ、なーに。何で怒ってるの」

「ほらまた聞き流してた。もういい!」

……女ってめんどくせえ。さっぱりわかんねえ。

「王都に戻りますが、何かご伝言等ございましたら承りますが」
白髪は混ざつても屈強という言葉が相変わらず似合うギーが、堅
苦しく頭を垂れる。

「お前にすべて任せる」

「畏まりました。陛下には何かご伝言はございますか」

「兄のことはフレッドに任せる。いや、一つだけ」

表情は変えず、ギーは顔をゆつくりと上げる。

「何でしょうか」

「愚弟がご迷惑をお掛けして申し訳ないと」

口元を緩やかに上げ、穏やかな表情でギーが「畏まりました」と
のみ答える。

紅竜の神殿の目に付きにくいところにある祭宮専用の入口での会
話ではあるが、細心の注意を払い、余計な言葉は付け加えない。

「春には戻る。雪も深くなってきている。道中無理せず気をつけて
帰れよ」

「温かいお言葉ありがとうございます。では、妃殿下によろしくお
伝え下さい」

「……ああ」

決して神官長と彼女を呼ばない辺りに、ギーの心中が窺い知れる。
自分は神殿に仕えているわけではなく、王家に仕えているのだと。
そして彼女は王家の者なのだと思っている事を明確にするために。

「では御前失礼致します」

分厚い防寒着を頭からすっぽり被り、雪の中、近衛兵たちは王宮
へと帰っていく。

ここに残しても良かったが、全ての者を神殿の中に滞在させるわ
けにはいけない。彼女の身内であるギーはともかく、他の兵たちは
野営する事になってしまう。

そうになると、これから冬の本番になり、かなりの者たちに我慢を強いることになってしまう。

兵の健康の為というよりは、今後の士氣の為にも兵たちを返す事が得策だろう。神殿側もそのほうが身構えずにいられるだろうし。

白い雪の向こうに兵たちが消えていくのを眺め、踵を返して神殿の中へと戻る。

警備の神官に目礼し、そのまま彼女のいる神官長の私室まで歩いていく。

彼女はいつも、どんな気持ちでこの通路を歩いていたのだろう。

祭宮用の入口のすぐ脇には彼女といつも会う部屋がある。ここでもしか本来なら彼女と会うことは出来ない。

その部屋の横を通り抜け、案内がいなくとも容易に辿りつける彼女の眠る部屋へと歩き続ける。

あの部屋で、会う前、別れた後、彼女はこの決して短いとは言えない距離の間、何を考えていたのだろう。

彼女が許してくれている事とはいえ、彼女の命を奪おうとした俺の事をどうして愛し続けてくれるのだろう。この長い回廊を歩く間に迷いは生まれなかったのだろうか。

今更ながらに、責めるような神官たちの視線に、あの過去の日への贖罪をという衝動がこみ上げてくる。

俺があの日あんな事をしなければ、今彼女は寝込むことなんて無かったのに。

大祭から戻り、暢気に王都の酒場でギーと飲んでいると、血相を変えて昔から片腕として仕えている文官ルデアが血相を変えて飛び込んできた。

文字通り、血相を変えて。

それまで「宝石の人」についてを肴にしてニヤニヤ飲んでいたギ―も、ルデアのただならぬ様子に眉間に深く皺を刻みこむ。

しかし大衆居酒屋で飲んでいる手前、険しい表情を一瞬にして消

しさつて、ゲラゲラ笑い声を上げる。

「遅かったな。割り勘の飲みに遅れたからってそんなに慌ててこな
くても、まだそんなに飲んでないから安心しろよ」

いかにも何事がありましたという表情だったルデアも、取り繕う
ように表情を変える。

「そんなにつて、何本空けたんだか。仕方ないからここから挽回し
ますよ」

ペロつと舌を出して、ルデアが腕まくりをしながら席に着く。

大半の客は慌てて飛び込んできたルデアから視線を逸らし、思い
思い酒を呑み始めたようだ。

しかし周囲の注意を浴びやすい状態ではあるので、とりあえずど
うでもいい話を始めて本題を後回しにする。

「腹、減つてない？」

「あー。確かに。気が付けば酒ばかり飲んで食べてませんね」

「何で先に食べないんですか。だから胃の具合が悪くなるんですよ。
いつも言っているじゃないですか」

ギーと同じ年だが家の格がいくつか下がるルデアは、ギーに対し
ても敬語で話すのが常だ。更にこういう場で上手く取り繕える男で
もない。

もっとも、この貧弱な男は年齢以上に若く見られるので、第三者
が見聞きしていても不信感を抱かれる事はまず無いが。

「そういえばこうやって三人で飲むのって久しぶりだよな。最近そ
ういう機会が全く無かったな」

注文をしてから、二人の部下に顔を眺めつつ呟くと、二人同時に
頷き返す。

「甲板の上のように自由には生きられませんからね」

さらりと言いのけて、ルデアが分厚い眼鏡を押し上げる。

書物の読みすぎで目を悪くしたルデアは、剣の腕はさっぱりだが、
その知略を買われて俺と共に海軍に席を置いていた。

ギー、ルデア、スージ、ライ。

俺が生まれて暫くすると遊び相手件傍付きとして、この四人が付けられた。

ルデアとスージとライは文官として、ギーは武官としてそれぞれの適性にあつた仕事をこなしている。

「僕以外の二人も街の中を探し回っているはずですから、後で合流すると思いますよ」

「お前ら総出なんて珍しいな。どうしたんだ」

ルデアは現在祭宮付補佐官。スージは内務大臣配下、ライは法務大臣配下と、それぞれ異なつた仕事をしている。業務を超えて飲む事などが無いわけではないが、宮廷内権力闘争の真つ只中で表立つて顔を揃えることは数えるほどしかない。

それぞれの直属上司の意向もある。機嫌を損なつては、それぞれ名家の子息だが家の立場を危うくする事に繋がる。特にスージは長兄であるクソ兄貴一派筆頭の内務大臣配下だけに目立つた動きはしにくいはずだが。

スージやライまでもが俺を探し回っているなら、何かあつたな。確実に。

「あなたがどこに飲みに行くと伝言一つしないからです。行きそんなところは一通りあたってでしようね」

真顔でルデアがコンッと一度テーブルを叩く。

責めるような口調に、あえておどけて返す。

「たまには自由にのんびり飲みたいんだよ。伝言なんかしたら、俺と飲みたい連中で溢れ返るだろう？」

「……人気者で羨ましい限りだ」

溜息交じりにギーが嫌味を呟くのを、不機嫌そうにルデアが鼻でフンッと笑う。

珍しいな。ルデアがこういう態度に出るのは。

普段は雄弁なくらいなルデアが一言も発することなく、黙々と食事と酒を飲む事にだけ口を使っている。

祭宮業務で何かミスったか？ いや、それならばギー顔負けの嫌

味の連発攻撃を受けるだけのはずだ。何がそんなにルデアを不機嫌にさせている。

疑問に思ったところで、ルデアが切り出す気にならない限りはこっちが何を言っても無駄だろうな。

目を吊り上げたままのルデアを放置し、ギーのほうに目を向けてみると、こちらもまた神妙な顔つきをしている。予め何か情報を掴んでいたと見える。財務大臣である父から何か聞いているのかもしれない。

しばらくしてライが、それからまた数十分おいてスージが同じテーブルに着くと、とりあえずグラスを持ち上げる。

「乾杯でもしとく？」

「何にですか」

厳しい顔付きのルデアに笑みを返す。

「幼馴染の再会に」

はーっと溜息を吐いたライに、スージがポンッと肩を叩く。

「こういう人だとわかってるだろう。俺たちは永遠に報われないんだよ」

苦笑を浮かべる面々を他所に、穏やかな笑みを湛えたままグラスを掲げる。意味深な部下たちのことをここで掘り下げても得策とは言えない。

「今更だろうに」

ふんつと鼻で笑ってギーがグラスとカチンとぶつけて鳴らす。それに倣うように他の面々もグラスを鳴らしていく。

ルデア以外は眉間の皺を消し、表面上は和やかさを演出している。「そうだ。せつかく幼馴染に会ったんだから聞いておきたいんだだけだよ」

ぐいっと酒を飲んだ後に、ニヤッと笑ってスージが切り出す。どうやら矛先は俺のようだ。

「んー？」

「あのさ『宝石の人』ってどこの女？」

ブブーっとギーが勢いよく酒を噴き出す。

「きったねえな。袖が汚れただろ」

ハンカチを取り出して、丁寧に袖口を拭きながらスージがギーを睨みつける。無骨と評される事もあるギーとは対極にいるスージは身だしなみには人一倍煩い。優男という異名がこいつ程似合う奴はいない。

「すまんすまん。だが、それを正面きつて聞けるお前の神経がわからん」

「会ったら聞こうと思っていたんだよね。裏では色々な説が流れているが、どれも信憑性にかけるから本人から聞くのが一番でしょ」

「勢ぞろいなのはその話絡みか？ 縁談ならお断りだよ」

内務大臣、法務大臣、外務大臣。どこにも娘はいなかったはずだが、三人が結託してどこぞのご令嬢をと縁談を持ちかけてこないとも言えない。

もつともそれぞれ支持勢力が異なるから、三者が結託することは考えにくい。

「おおつ。そこまで熱愛しているとはつ。超美人？」

一口で酒に酔えるスージが砕けまくった口調で、身を乗り出してくる。

「引く手あまたなのに、敢えて秘密の恋人つてのが興味をそそるんだよね。そんないい女なら見てみたい。紹介して」

「……おい、スージ」

見かねたのかギーが声を掛けるけれど、スージはどこ吹く風といった調子でぐびぐび酒を飲み干す。

「紹介してくれたら、俺がちゃんと匿ってやるから。例え何が起こつても、幼馴染の大事な女だからね、俺が何とかしてやるよ」

「スージ。そのくらいにしとけて」

今度はライがストップを掛けるけれど、その手を払ってスージが机に身を乗り出して俺のすぐ目の前に顔を寄せる。

「……狙われてるよ、その女。気をつけな」

言いたい事を言い切ったのか、ドンッと派手に音を立ててスージは椅子にどっかりと座り込む。

スージの言葉が聞こえていたであろう面々は、互いに目線で何やら話し合っている。

狙われている、か。

ふーっと溜息が零れ落ちる。

まあ、あそこにいる分には誰も手が出せないだろうから、この件は現状放っておいても大丈夫だな。それとなくギーに視線を送ると、伝わってのか伝わっていないのか、こくんと首を縦に振る。

「で、どこの女なんです」

…… 伝わってねえ。全くもって。

「秘密は共有する人間が多いほど漏れるんだよ。誰かなんて教えたくもないね」

にやりと笑うと、ふふんとルデアが笑う。

「誰も何も知らないと思ったら大間違いですよ。俺の仕事が何なのかお忘れじゃないですよね」

思わぬところからの反撃に、ぎょつとしてルデアに視線を送る。

ルデアの仕事は祭宮付補佐官。

表向きには書類の処理など、実際に俺が目を通さないような雑多なものを片付けるのがルデアの仕事。内情は各地に影を送り、情報収集を行っている。当然、水竜の神殿内部にも。

「余計な事を口にするな」

上司という立場を利用して圧力を掛けると、ルデアが肩を竦める。

「言うわけないでしょう。それに確証を得ているわけではありませんからね」

「ルデアでもわからないなら、知りようがないなあ」

鷹揚とした口調でライがこの話題を切り上げるかのように、結論を出す。

ありがたいと思いつつも、この面々には遠からずこの話をしなくてはならないだろうなと思う。

彼女がその任を終えた時に、俺の元に迎え入れる為にはこの優秀な臣下たちの協力は必須となるだろう。

その前に彼女を口説き落とさなくてはいけないわけだが、現状好意はもたれているだろうけれど、それが恋愛と結びつくようなものには思えないんだよな。こればかりは、時間を掛けるしかないか。巫女と祭宮という距離感がそう思わせるのか、心を開いてくれる事は殆ど無いに等しいし、偶に感情の一縷を目にする事があっても怒ってるし。

「それに余計な手回しをしなくとも、好き勝手やっていけると思うよ」

街中探し回っていると言っていたルデアの言葉とは対照的にも思えるようなのんびりとした口調で、ライがふわりと笑みを浮かべる。ぽによぽによした体格のせいなのか毒なんて全く無さそうに見える外見だし、口調もおっとりとしているのに、言葉の端々に棘が見え隠れしている。

「ずっと思っていたんだ。頂に登りたいと思っているのになって。もしそう思っているならそれなりの事をするつもりではいたんだ。もう何をしても遅いけれど」

王位に就きたいかという事か。しかしそれは願ってももう手遅れだとライは言う。

「何故」

短い問いに、ライは目を細めて口角を上げる。まるで笑っているかのように。

「決まったからだよ。だからもう何をしても意味が無いんだ」

そこまで言うとは、ライの様子が一変して蔑むように、哀れむように俺を見つめる。

「頂を制する者は一番年長の者が良いそうだよ。もつとも内々にお偉方に漏らされただけのようで、表に出るのは一週間後くらいかな」
次の王は長兄にということか。

あの人間性に少々問題がある兄を王にすると父が決めたということ

とか。

「ふーん」

努めて興味の無いフリをして、それぞれの目を見つめる。誰も目を逸らそうとはしない。まっすぐに俺の答えを聞こうとしている。

世間的には第三王子である俺の一派と見られている面子で、異なる場所で異なる上司に仕える全員が同じ情報を掴んでいるということとは、真実である事は間違いないだろう。

誰かが情報を操作しているとも思えない。

異なった情報源からそれぞれがこの結論に辿りついて、俺を探して、俺の答えを求めている。

「篡奪者になるつもりは無い。俺は俺の運命のままに」

「……運命。なるようになるとも言うつもりなのかな」
ライの問いかけに頷き返す。

「積極的に求めはしない。自ら混乱を招くようなことはしたくはない」

「腰抜けと呼ばれても？」

「ああ。構わないよ」

挑発的なスージの問いかけにも、両肘をテーブルの上に乗せて顎の下で両手を組んだまま答える。

何故だろうか、拘っていたはずの次期王位、即ち皇太子の地位が自分以外のところにいくとわかってても、不思議と穏やかな気持ちでいられる。

一時は王位争奪戦から強制離脱させられた事に、憤りすら感じていたのに。

ただ納得できない。何故、次兄ではなく長兄なのか、と。

「難しい顔してる」

ベッドの中の彼女が俺へと手を伸ばす。

「そうか？」

その指を繋ぎとめ、知らず知らず頬が緩む表情をそのままに、彼女へと微笑みかける。

俺の顔を見て、ふふふと彼女が小さく笑い声を上げる。

「どうした」

ぎゅっと握りとめた手に力が入り、体を起こそうとする彼女を支える為に少し前のめりになって反対の腕を彼女の背へと回す。

抱きとめるような格好になってしまったが、外野は口を挟もうともしない。

本当に治外法権だな、この部屋の中だけ。自分でしている事なのに、苦笑が漏れる。

神官長である彼女の願いを叶えるという一点だけの為に、俺が逗留する事を許され、尚且つ普段なら触れる事さえ許されない彼女を抱きしめても誰も咎めようともしない。

本当にそれでいいのか？ 神殿の秩序はどうなっているんだ。そんな事俺が心配するような事でもないだろうが、気になってしまつのは祭宮としての立場からか。

視線を彼女から外して、長椅子に腰掛けている娘に目を向けても、壁際に控えている神官たちに向けても、全くもって動揺は見られない。

「ウイズ、あのね」

耳元に口を寄せ、内緒話をするようにコソコソと彼女が両手で俺の耳元を覆う。

外野に聞かれたくない話でもあるのか。

視線を彼女へと向けると、彼女の瞳が優しく緩む。

「幸せだね。一緒にいられるって」

「ばーか」

片手で彼女の額を押しつけ、少し離れた彼女の頭をぐしゃぐしゃと掻き混ぜるように撫でる。撫でられた彼女の口角は上がりっぱなしだ。

こんな風に素直に自分の感情をぶつけてくる事なんてここ何年も無かったな。本当にずっとずっと、お互いの立場ばかり気にしてたんだな。

今更そんな事に気付いてどうする。

幸せだねと笑う彼女とは対照的に、俺は泣きたい気分になった。

どうしてだと聞かれてもわからない。ただ、どうしようもなく泣きたい気分になった。

今ここにいるんだ。手を伸ばせば届くところに彼女はいる。それだけで十分だったはずなのに、どこで見失ったのだろう。何が俺たちを遠回りさせたのだろう。

「もっと。傍にいれば良かったな」

こんな事になる前に。

「そうだね。でも悔やんでもしょうがないから」

割り切った顔で彼女が言い切る。そこには俺に会いたいと泣いたという彼女の片鱗は全く見えない。

見せないから気付かなかったって言ったら、言い訳だって責められるんだろうな。それでも言わずにはられない。

「悔やむよ。俺とお前の間にあったはずの沢山の時間を無駄にしてきた。ごめんな」

彼女は静かに首を横に振り、うつむいてしまう。口元だけの笑みを浮かべて。

何を考えているのだろう。何を思っているのだろう。人の心の中なんて容易くわかるなんて事は無いんだけど、彼女の心の中を覗いてみたかった。

うつすらと笑みを浮かべたまま顔を上げたかと思うと、彼女が壁

際に立つ執事に視線を投げかける。

その視線に気が付いた執事が目礼をして周囲の神官たちに目配せしたかと思うと、波が一斉に引いていくかのように、執事を先頭に神官たちが部屋の外へと姿を消していく。その最後に娘が続く。

「何か用があつたら呼んでね」

俺になのか彼女になのかわからない言葉を残し、パタンという音と共に部屋の中には静けさが広がっていく。

人払いをした彼女の意図は何なんだろう。だがしかし、ここで動揺を見せるわけにもいくまい。

「どうした」

極力穏やかに彼女に問いかけると、彼女の真っ直ぐな瞳が俺を射抜く。

一本気。

何故か昔から彼女を見ているとそんな言葉が頭に浮かぶ。

「謝ってなんか欲しくない」

口を尖らせ、じーっと睨むように俺を見つめる彼女の頭を撫でる。俺のそんな振る舞いなど、彼女は全く気に止めた様子も無く、視線すら動かさない。

「私、後悔してないよ。神官長になった事。ちゃんと自分で決めたことだもの」

そこか。そんな事か。お前が怒り出した理由は。

後悔していると思われたくない。神官長が嫌だったなんて思われたくない。自分が流されて生きてきたなんて思いたくない。そういう事が言いたいのだろう。

だけど、昔ならわからなかったことが今ならわかる。

「知ってる。過去を否定なんかしない。それでも俺はお前の傍で、お前に寄り添って年を重ねたかったと思う。当たり前すぎて幸せだななんて思わなくなっただかもしれないけれど、それでも傍にいたかった。そう思うことが間違ってるか？」

睨むような視線が揺らぎ、唇を噛み締めた彼女が首をゆっくりと

横に振る。

俯いてしまった彼女の頭をポンッと撫でる。

「だから残りの時間は傍にしよう。紅竜のお許しも頂いたしな。手始めに何をしようか、考える時間は幾らでもあるぞ。まだ冬は始まったばかりだからな」

「ありがとう」

消え去りそうな彼女の言葉を、彼女の体ごと受け止める。ぎゅつと腕の中に閉じ込めて、もうここから出したりしない。もう、間違えない。

「ばーか。ありがとうはこっちの台詞だ」

俺を選んでくれて、ありがとう。一度は諦めた恋だったのに。

軍靴を鳴らしながら、次兄が玉座の間に入ってくる。

將軍と呼ばれるに相応しい軍服で身を包み、腰に帯剣したままで戦場など無いこの国において、そのような格好を目にする事すら珍しいというのに、敢えて次兄は玉座に軍人としてのいでたちのまま入ってくる。

それは全軍を統括しているのが自分であるという主張にすら思える。

居並ぶ大臣たちの間を通り抜け、王である父の前に軍服の裾が床に付く事も気にせず、膝を折り軍隊式の礼をする。

その様子はあまりにも勇ましく、美しく、父の横でふんぞり返って座る長兄よりも威厳に満ちているように思えるのは、俺の鼻屑目か。

「本日戻りました」

短い言葉だけで、後は膝を折ったまま父の顔を見つめる。まるで次兄には長兄が見えていないかのよう。

その事がどういう事なのか俺にはわかったが、父を挟んだ反対側に座る長兄には伝わっているのだろうか。ちらっと横目で見た感じ

では、次兄の意図などまるで気付いていないようだ。ただ膝を折ったという事実には満足しているかのようにニヤニヤ笑っている。どうしようもねーな。

口には出さないものの、心の中では悪態を吐かずにはいられなかった。

何故この目の前の雄雄しく王者の風格さえ漂わせる兄ではなく、俗物としか表現しようのない長兄を父は選んだんだ。

「よく戻った。これでワシの息子たちが全員揃ったな」

満足げに胸を張る父に違和感を感じる。その違和感の正体はわからないが。

玉座を降り、父が次兄の手を取り、長兄とそして俺を手招きする。立ち上がり父の元へと行くと、父が俺の手も握る。そして更に長兄の手も重ねる。

何を始めるつもりなのだろう。無表情は次兄と、ニタニタしている長兄には父の意図がわかっていらい。

居並ぶ重臣たちは神妙な面持ちでこちらを見つめている。これから始まる「何か」が、先日発表された事と関係している事であろうことは、容易に想像出来るからだろう。

「ワシの三人の息子たちだ。長男カイ・ティティズには玉座を、次男カイ・ジリアンには軍を、三男カイ・ウィズラールには祭事を託す」

茶番、か。

冷めた目で、熱っぽく語る父を見つめる。父の向こう側の次兄と一瞬だけ視線が合うが、表情を変えずに次兄は父へと視線を戻す。

「わが国の三本の柱である息子たちの事を今後も頼む。お前たちも三人協力してこの国を導いていくのだぞ」

「はい。父上」

計らずも重なった言葉に、誰かが盛大に拍手を鳴らし、それに続いて拍手が沸きあがる。

何なんだ、このどうでもいいような安っぽい芝居は。三文芝居だ

って、もつとましなものを見せるだろうよ。二カ二カと笑っている兄貴も父王にも反吐が出る。

居心地の悪さを感じつつも、微笑を絶やさずに臣下の者たちへと視線を送り続けるしかなかった。

「兄上っ」

次兄の私室を訪れると、軍服を脱いでいる最中の兄が苦笑しながら振り返る。

「来ると思っていたよ。祭宮」

女官に軍服を手渡し何かを告げると、兄が俺のほうへと歩み寄ってくる。軍服を脱ぐと筋肉質な体格が余計に露に見える。俺が軍にいた頃よりもずっと筋肉が増えているように見える。

筋肉が隆々とした太い腕で、俺の頭をポンと撫でていくと、ソファにどかっと思決して上品とは言えない座り方で腰を下ろす。

その兄の前に背筋を伸ばして立つと、兄はくくつと笑い声を上げる。

「別に今はお前の上官じゃないんだから、そんな軍隊式の礼はいらないよ。そっちに座るといい」

兄の言葉に従い木の椅子に腰掛けると、兄は膝の上で手を組んで俺をじーつと見る。

まるで値踏みするようだ。

いつだって兄上はこうやって俺のことを見ている。いつも、いつも。

先を見通す力、人心を掴む魅力。

ただ目の前に座っているだけなのに、俺はこの人には敵わないのだと思い知らされる。俺が兄のような人間なら、祭宮に追いやられる事も無かったのだろうか。

ふうつと兄が息を吐き、目を細めて俺を見つめる。視線が重なる、その瞳を兄はゆっくりと閉じる。

「思慮の足りない者、情味の足りない者、覚悟の足りない者。聞い

た事があるだろう、お前も」

「はい。俺が覚悟の足りない者だというのも、兄上が情味の足りない者だという事も、王太子殿下が思慮の足りない者だという事も」

兄とは呼びたくない、かといって王太子と呼ぶのも不本意だけれど、あいつと兄上は俺にとって違うのだという事を敢えて表現したかった。

それはどう伝わったのか、王太子という言葉に兄の表情が一瞬だけ険しくなる。

「その中で思慮の足りない者を次王に選んだのは父王だ。その決定に口出しする気は無い。明日にはまた軍に戻る」

「……何故この中で思慮の足りない者を選んだのでしょうか」

「それは父王にしかわからない。それを今更覆したりするつもりも無い。どうしても欲しい冠ではないしな」

それでも俺は兄上のほうが王に相応しいと思う。

軍での信頼度や兵の忠誠心を見ていれば、誰でも兄上のほうがあの兄貴よりも玉座に相応しいとわかるはずなのに。長男だから、兄貴を選んだっていうのなら間違っている。

「お前の『運命』は一体どんなものなのだろうな」

沸々と湧く怒りに似た感情に奥歯を噛み締めていると、兄が飄々とした口調のまま呟く。

「たった一人、竜のご神託を持つ王子。お前の『運命』がこの国の未来を握っているのかもしれないぞ」

「そんな事、ありませんよ。たまたま祭宮だからご神託なんて大層なものを言われただけで、もし兄上が祭宮になってたらきつと兄上が言われましたよ」

「そうかな。俺はそうは思わないよ」

くくつと笑って兄が俺を見る。

「お前は本当に何も見えていないんだな」

何が見えていないというのだろう。俺に見えていないものなんてあるのだろうか。

部下たちに情報収集もさせているし、各陣営に信用の置ける人間を送ったりもしている。一方的にならないよう、多角的に情報は仕入れている。それでも俺に見えていないものがある？

以前に比べたらこの国のことには精通しているというのに。

あまり多くのことを兄は語ろうとはしない。

謎掛けのような言葉だけを残し、翌日には馬を飛ばして軍の本拠地がある港町へと戻ってしまった。

残された俺に待っていたのは、宮廷内の不協和音だった。

「あー。わかったわかった。話なら後で聞く」

回廊を渡りながら、纏わりついてきた貴族の一人を適当に振り切る。

「殿下。このようなところで申し訳ございませんが」

「わかった。お前の話も後で聞くから、執務室にしてくれ」

また一人大臣を追い払う。

ここ最近無言で歩けるためしが無い。供をしているギーに無駄口をきくなんてとても出来ない空気だ。

我先にと寄ってきては何かを言いたげにまくしたてる。一人追い払ってもまた一人、また一人。今では外れの塔の一室なのに、部屋の前に貴族たちが列を成している。

祭宮の執務室には普段訪れる者などいない。

ごくごく身内とも言えるような、祭宮に「降格」になった後も離れていかなかった人間たちだけだ。

それが最近では距離を置いていた者や、元々親しくなかった者までもが訪ねてくる。

そんな日常に辟易していた。

口を開けば、次王がどうこうと。決まった事を今更ほじくり返してどうなるというのだ。ど阿呆め。兄貴が気に入らなかったのなら、もつと早く父王に働きかければ良かったただけだろうに。

これ見よがしに溜息を吐いても、不平不満を漏らす者たちには伝わりようも無い。

「失礼致します。殿下、こちらの書類にそろそろ目を通していただきたいのですが」

肩肘について話半分程度も聞いていなかった俺の眼前に、ルデアが書類を突き出す。

ごくごくありふれたような書類と見せかけて、これは神殿からの

書簡じゃないか。

見上げると能面のような顔で、俺を見下ろしている。見下ろして
いるんだけど、見下した目みくだをしている。

言いたいことがたつぷりあると、口には出さずに顔で語るか。

「ああ、わかったよ。すまないが急ぎの仕事もあるので、この話は
また後日してくれるか」

禿げ上がった貴族の男に声を掛けて退出を促すと、男は額の汗を
拭いながらまだ何やらブツブツと呟いているが、それを無視して書
類に目を通す。

婚約者であり、神殿の神官長であり、従妹姫の自筆の書簡か。何
か神殿であつたか。

気持ちは既にそちらに移っているにも関わらず、男はまだ何か言
いたそうに俺のほうを見つめている。

「何だ」

「殿下は玉座を欲しておられないのですか」

部屋の中に緊張が走ったのがわかる。

視界の端でギーの腕に力が入り筋肉が引き締まった事も、ルデア
の眉が一気にひそめられたのも、女官たちの動きが固まったのも見
て取れた。

そこまで冷静に周囲を分析出来るのは余裕があるからではなく、
幾度と無くそう問いかけられた時の答えを考えていたからだ。

につこりと笑い、執務用の机の下で足を組み、両肘を突いて組ん
だ手の上に顔を乗せる。

「欲しているように見えるかな」

ぎょっとした顔をしたのは、問うた本人だった。何故お前が固ま
る。

欲していた事も、あつた。何故自分に与えられないのかと思つた
こともあつた。

たった一人の少女に出会うまで、俺は俺の立場の不遇を呪ってい
たし、二人の兄よりも血の濃い自分こそが玉座に相応しいなんて思

つていたこともあった。

「もし欲しているように見えるなら、これから自分の振る舞いに気をつけなくてはならないね」

にっこりと微笑みを付け足す。

部屋の中にいる何人もの人間が一斉に俺のほうを見つめる。

この中の誰が父の、兄貴の、兄上の、息の掛かった人間なのだろう。こちらが方々に手を出しているくらいなのだから、逆もまた然りで、どこかで言質を取ろうとしているに違いない。

余計な言葉で取り繕う必要も無い。

「この椅子の座り心地も悪くは無いよ」

この椅子を暖め続ける事が俺の運命なのかどうかは知らないが。ふいに頭の中に青い衣の裾が浮かぶ。運命、か。

「全ては水竜の御心のままに。俺が祭宮になったのもまた、水竜の御心によるものだろう」

男は腰を折るように丁寧に挨拶をすると、はあつと溜息を吐きながら部屋を出て行く。

俺をどう動かすつもりだったんだか。

くるりと椅子を回し、扉に背を向けて手の中の書類に目を向ける。何枚かの書類をパラパラと斜め読みするけれど、これといった重要な報告は含まれていない。神殿に対しての監査を行っているわけではないので、大祭の費用について書かれているけれど、だからどうしたという程度だ。

善良なる市民の寄付による独立採算制を取っているのだから、王家からの費用負担などといった甘い考えは捨てて欲しいな。

その辺りに関して少々神官長と話し合う必要はありそうだが。

「ルデア」

腹心の文官に声を掛け、手にしていた書類を手渡す。

「少々豪華にやりすぎたらしい。追加での寄付をお願いしますだと」パラパラと書類を捲り、ルデアが溜息を吐き出す。

「修繕等で余剰費用を使い尽くしたとありますが、どうも神殿は最

近井勘定な傾向が見受けられますので、こちらから敢えて手を差し伸べる必要は無いかと思われます」

「だよな」

「寄付の増額をと言いますが、新年及び大祭の前にはかなりの額を、とはいっても例年同じ額をですが寄付をしております。これ以上出すとなると、祭宮領からという事になりますね。王家からというのは賛同いたしかねます」

「追加で税を取るのに関心しないな。民の負担も増やしたくない」

「ではそのように先方への連絡をお願いいたします」

慇懃無礼つて、きつとルデアの為にある言葉なんだろうな。

口元を歪めて笑うルデアの腹の中にはどんな思惑が溜まっているのだろう。こんなのに仕える事になった不平不満でいっぱいなのかもしれないな。仕事はそれなりにこなすけれど、俺の能力を認めてはいないのは口に出さなくともわかる。

「わかった。陛下に神殿への出張の承認を貰ってくるよ」

「畏まりました」

書類をルデアに手渡し、ギーに目配せして上着を手取る。

さすがに国王たる父の御前に行くのに、部屋着のままと言うわけにもいくまい。部屋着といっても、まあ、それなりに小奇麗にはしているが。

華美な装飾のついた祭宮の準正装を手にし、それを持ったままルデアに片手を上げる。

「後は頼む」

「畏まりました」

返事をして恭しく頭を下げるルデアを見て、ふいにあることを思いつく。

「お前も行く？」

怪訝そうな顔をしてルデアが顔を上げる。

「それは、今、殿下のお供をしろという事でしょうか。ほんの少し前におっしゃった事と乖離した質問のように思いますが」

ルデアらしい言いつぶりに思わず鼻で笑う。

「いいや、今じゃなくて、神殿に行くかって聞いてるんだよ」

不思議そうに首を傾げ、それから今度はルデアが鼻でふんつと笑う。臣下としての礼儀だとかなんだとかっていう事を気にする男ではないのが、こういう時に良くわかる。

ギーは俺たちの遣り取りに口を挟むつもりは無いらしく、カフスボタンを留めなおしている。

「愚問です。不在の間、誰にあなたの業務代行をさせるつもりですか。大体あなたが不在にしている間にどれだけ決裁が溜まると思っ
ているんですか。今は収穫期だから余計に税の関係やら寄付の関係
やらで書類が上がってくる時期なんですよ。それなのに神殿に行こ
うなんていいご身分ですよ。ああ、実際にいいご身分なのは存じ
ておりますよ。ただ直属の配下のもものとして御注進させて頂けるの
ならば、文書で済むものをわざわざお出向きになられるというのは」

「……ルデア」

「あちらに理由をつけて行きたいのは存じておりますけれど、今神
殿へと動かれるという事が他の勢力にとってどのように受け止めら
れるのかも考えになられたほうが宜しいのでは」

ドアノブから手を離し、改めてルデアに向き直る。

「俺の考えが甘いと？」

「ご自分でお考えになられてはいかがですか。どのような問題に波
及するか、実際に体験なさるのも良い経験になるかと思しますので、
お止めは致しません」

はつきりとは言わないが、行くなつてことか。

ギーを横目で見ると、ギーもまた険しい表情を浮かべている。

ふうつと大きく息を吐き、それからルデアに笑いかける。それに
対してルデアは持ち上げるように眼鏡を指先で触れる。

「今更俺に何が出来る。他家の養子になった祭宮。最も玉座とは遠
いところにいる直系だ。王太子が事実上選出された今になって動き
だす輩の真意がわかりかねるね」

「だから覚悟の足りない者だと言われるんですよ。俺から言わせればただ単純に甘いだだけだと思いますけれどね」

「それは面白い意見だね。ルデアのように苦言を呈してくれる人間が傍にいるというのはありがたい事だと、再認識させて貰ったよ、ありがとう」

につこりと笑い返すと、ギーが頭を抱えて溜息を吐き、ルデアがコホンと咳払いをする。

「そういう器の広さは悪くないと思いますが、こちらも心配しているのだとご理解頂きたいです。大体殿下はいつもいつもそうやって笑って物事をうやむやにしますが、今殿下が置かれている状況というのは非常にシビアなものですよ。王宮が分裂しているのがお分かりにならないのですか」

「わかってるよ、そんなことは」

水面下で動いていた思惑が、王太子正式発表を目の前にして表面化していること位、嫌でもわかる。だからこそ俺の部屋に千客万来なわけで。

ただ……。

「これを上手く治めるのも王者としての資質を問われている王太子殿下の為すべき事だろう。俺は関与らない」

はあっと巨大な溜息が部屋を支配する。

ルデアの言わんとすることはわかるけれど、自分が積極的に動いても何の得にもなりやしないという事もわかっている。

俺に求められているのは「祭宮」であって、世継ぎの王子としての振る舞いなんかじゃない。

「大祭以来あちらに足を運んでもいないし、こちらの事情で全く参拝をしないというわけにも行かないだろう。それにこの案件に関しては口頭であちらにお断りするのが筋だと思うが」

「……畏まりました。臣下である以上、殿下の御意思に従うのみです」

「ルデアがいるから、考えるべく立ち止まる事が出来る。言いにく

いこともあるだろう、ありがとう」

につこりと笑うと、困ったような顔でルデアが幾度も咳払いをする。

「あーもう本当にあなたって人は。幾らでも尻拭いして差し上げますから、好きにしちゃってください。全く」

そう言うつと背を向けて書類棚に手を伸ばす。もうこれ以上議論するつもりはないようだ。

コホンと咳払いをして、一度手を離れた扉へと手を掛け、振り返らないルデアに声を掛ける。

「後は頼むよ」

言い残してパタンと扉を閉める。

王宮の高い塔の一つにある祭宮の執務室から父王の執務室に行く為には、一度王宮の中心部まで出なくてはならない。

父は謁見の間と呼ばれる玉座の置かれた場所で執務をする事を嫌い、後宮と呼ばれる妃や子供たちの私室がある一角に執務室を設けている。

塔の階段を降り、王宮の中でも人の多い場所に足を踏み入れると、一斉に貴族たちが俺のほうへと歩み寄ってくる。

はあつと溜息を吐き出すけれど、どいつもこいつも気付きやしない。

始まるのは挨拶に美辞麗句。それから娘や親族の妙齡の女性の売り込み。

「殿下、正妃には申しませんので、ぜひ我が娘を」

「先日素晴らしい宝石を手に入れました、もし宜しければ殿下に献上させていただきますらと」

「我が家で今度晩餐会を開く予定ですが、殿下にも是非ご参加頂ければ」

「当家と致しましては、今後殿下のご命令がございましたら、どのような事もお応えさせていただきますたく」

滑稽すぎて閉口する。

この取り巻きたちの向こうでは、法務大臣一派がこちらの様子を窺っているのが見える。その中には先日密かに酒を酌み交わしたライの姿もある。

別の場所には内務大臣一派の姿も見え、そこにはスージが混ざっている。両手にした書類で手は動かせないが、口パクで何かを伝えようとしているのは見て取れる。何を伝えようとしているのだろう。周囲のどうでもいい戯言を聞きながらも後宮のほうへと少しずつ異動していくと、その先に法務大臣が立ちはだかる。

立ちはだかるというのは言い方が悪いな。歩いていった方向にたまたま姿を現したというのが適切か。恐らく父王と何か話をするなりしていたのだろう。

「これはこれは祭宮殿下」

わざわざ祭宮を強調してくるあたりが嫌味っぽいな。しかも芝居がかかっていて鼻につく。

「このような場にお姿をお見せになるとは、お珍しい。陛下に何か御用でもございましたか。もし必要とあれば、わたくしからお伝え致しましょうか」

にやりと下卑た笑いを浮かべるあたりが兄貴と似ているな。さすが兄貴の後ろ盾だけあるな。いやいや、そういう問題ではないか。「大臣にそのような手間は掛けられないよ。祭宮の業務に関する事だからね。心遣いありがとう」

祭宮というところを大臣のように強調して微笑み返し、大臣の横をすり抜ける。

今までは表立って嫌味を言うてくるようなことは無かったが、王太子に兄貴が指名された今になって何でここまで突っ掛かってくるだ。さっぱりわからないな。

他の連中も擦り寄ってきたり、距離を置いてみたり。意味がわからない。

「水竜の威光を翳しても、今更評価は覆らないかと思いますが」

足を止め、嫌味つたらしい大臣に向かって振り返る。

「言いたい事が他にもあるなら今聞こうか」

につこりと微笑む俺に対し、大臣もまた口を真横に引いて笑みを作る。

「殿下にご不快な思いをさせてしまいましたか。わたくしの言葉などどうぞお気になさいませぬよう」

嫌みつたらしいジジイだな。この古狸め。

不快にさせると思うなら、最初から口を開くな。ボケ。

「この程度で不快には思わないよ。寧ろ大臣がどのような意図を持って発言したのか、その心中を聞かせて貰いたい」

どうせ答えやしないんだろうけれど。

ぐっと言葉に詰まった大臣をふっと鼻で笑う。

「答えはいつでもいいよ。急いでいないからね」

返答は無い。大概俺も子供っぽいな。嫌味に嫌味で応酬して、その拳句反論されないのをほくそ笑むなんてな。

返答を待たず、衣を翻し、限られた人間しか入る事の出来ない後宮へと続く門の扉を押す。

重い扉を押すのを手伝うかのようにギーが体を寄せる。

「すまないな」

「いいえ。正直これ以上敵を増やして欲しくないのですが」

小声で囁くギーに口元を緩める。

「善処するよ」

宮内権力抗争に既に嫌気がさしてきた。兄上みたいに王宮を離れたほうが気が楽だな、これは。

王宮を離れば気が楽になるかと思いきや、これはこれで針のむしろだ。

目の前に座る水竜の神殿の最高責任者（最高権力者と同義ではない）の神官長は明らかに不機嫌そうな顔をしている。

まあ、当たり前と言えば当たり前なのだが。要望を断りにきたのだから。

綺麗な顔を明らかに歪ませて、それなのに優雅さも持ち合わせた笑みを浮かべているのが恐ろしい。恐ろしいというか凄みがある。

美人が怒ると怖いって言うてたのはスージだったか。

「祭宮殿下」

「何でしょう」

「何でしょうではありませんわ。わたくしの話をちゃんと聞いてくださっているのかしら」

珍しくムキになっている神官長に釣られても仕方がないので、極力心中を悟られないように、いつもと同じ笑みを浮かべる。

「当たり前ですよ。神官長様のお言葉を聞き流すような事をするわけがないではありませんか」

はははと笑い声を付け足し、出されて飲み頃になっているお茶のカップに手を伸ばす。

一口飲むと乾いた喉が潤され、一息ついたことで改めて余裕が出てくる。

こちらとしては決定事項を覆すつもりは無い。なので改めて議論する余地は無い。ただ否と返答しにきたに過ぎないのだから。

書簡で拒否を示しても良かったのだが、それはさすがに神殿に対し非礼であろうと判断したからこちらに來ただけだ。

ついでに彼女の顔を見て帰れば、それでいい。

ただ彼女は奥殿に行っているようだから、そうすぐには來ないだ

ろう。それまでの間、延々と神官長から寄付金を増額しない事に対しての不満を言われ続けるのか。それはそれで面倒だな。

不快だとは思わない。それは立場の違いからくる意見の相違ではない。

平行線の不毛な議論を長々と続けて嫌味の応酬をする事が面倒で、時間の無駄だとは思えない。

しかしそれが彼女に会う為の試練なら受け入れようじゃないか。

おおつ。こう考えるとすっげえ前向きだな、俺。

しかし会ったら会ったで、この間怒らせた事を謝ったりしたほうがいいのか。でもなあ、何で怒ってたかさっぱりわからないんだよな。表面上取り繕っても仕方が無いし、それに表立って祭宮と巫女が言い争いをしたわけじゃないし。

難しいところだな。彼女の出方を見るか。

いやー、でも本音をポロポロ漏らすとも思えないんだよな。完璧な巫女を目指している彼女だから。

大体弱音くらい聞いてやるって言ってるんだから、思うことがあれば言えればいいと思うんだ。

生真面目で完璧主義な彼女が神官長を筆頭に、神官たちに何か愚痴を漏らしたりするとも思えない。恐らく四方八方敵だらけとは言わないが、常に気を張った生活を強いられている事だろう。

俺には本音を漏らして甘えてくれたらいいのにな。

って、そんな事考えちゃってる俺って超恋愛モード？

くくくつと笑みが漏れる。

何しにきたんだか。お仕事に來ただけで、彼女に会いに來たわけでもないのに。それなのに浮かれてんのは単純すぎるな。

「何を笑っていらつしやるの」

目の前のお姫様の存在を忘れていたわけではないのに、ついつい考えが浮ついた方向に流れてしまった。

ああ、やばいやばい。目が完全に据わっている。

コホンつと咳払いをして、神官長へと作り笑いを浮かべる。

「いいえ。久しぶりに神官長様とお会いできてお話が出来て、会話の内容がどのようなものでも嬉しく思い、自然と笑みが零れてしまいました」

「それが真実でしたら、とても素敵なことですわ、殿下」

おほほほほと上品な笑い声を上げる神官長は、絶対にそんな事はないという事を確信しているようだ。まあ、事実だが。

ただ表面上は非常に穏やかに笑いあつて話をしているので、神官たちから見たら、非常に和やかに見えることだろう。

「何せ普段はむさ苦しい連中に囲まれて生活をしておりますから、神官長様のようなお美しい方といると、心が和みますね」

「まあ、お上手ですこと」

おほほほほという笑い声と、俺のはははという笑い声が重なる。すっごく嘘臭い笑い声の合唱だ。

何で俺、どこに行っても腹の探りあいしてるのだろうな。たまには腹の探りあいなんてしないで、心からの笑みを浮かべてみたいものだ。

ま、このお姫様相手じゃ無理だけど。

生まれた時からの婚約者で従妹で、先の巫女で今は神官長。本音なんか言えるわけもない。最も神官長だつて俺にそんな事を求めてなんていやしない。

「話が逸れてしまいましたけれど、わたくし共と致しましては、王家の神殿への忠誠をお金で測るわけではありませんけれど、寄付の増額をして下さると今後の神殿運営が非常に円滑になると思っておりますの」

断つたのに、全然聞いてないな。めんどくせえ。

途中で話の腰を折ることはせず、神官長の出方を見ることにする。「先だつての大祭の折には、思いのほか費用が必要になってしまいました。祭宮殿下の広いお心をお示し頂けると嬉しく思いますわ」
広いお心っていうよりも、広い懐だろ。早い話、金を出せと。

すぐには答えず、ふーっと息を吐いて考える素振りをする。結論

なんてここに来る前に出ているけれど、一応考えるポーズ。

こうやって断りに来ただけでも神殿への敬意は十二分に払っているつもりだが、伝わってるわけないな。

怒らせないようにするのは、きつと無理だよな。

「お申し出はわかりましたが、王家としてはこれ以上の寄付は致しかねます。申し訳ございませんが」

神官長がこれ見よがしに溜息を吐き、不快感を露にする。これはこれは好戦的なことで。叩き潰すのは簡単だけれど、後々の事を考えると面倒だな。

形だけ、さも心から申し訳ないと思っている風に顔を作り、更に言葉を続ける。

「現状王家としては水竜様のご神託に基づき、領土全域で備蓄を増やす方向で動いております。改めて予算立てするととなると、そういった部分から削る事にもなりかねませんので、水竜様の御意向に反する事になるのではと思いますが、神殿の皆様はどのようにお考えでしょうか」

水竜のご神託。普段は大っ嫌いなフレーズだけれど、こういう時は心地良いな。

あいにく信仰心なんてものを持ち合わせていないので、普段は面倒なだけでウザイだけのご神託だけれど、神殿の連中にはこれ以上の切り札はあるまい。

この辺で引いていただけると、関係性が険悪なものにならずに済むのだが。

さあ。どう出る。

「まあ。そんなに王家は、国家は困窮していらっしやるの？ 民の為の備蓄を削らなくては追加予算が出せないほどに」

ふーん、そういう切り口から来るか。

それは徹底的にやっても構わないという宣戦布告と取られても仕方ないのでは。

何故か口元に笑みが浮かぶ。

相手を言いくるめるのが楽しいわけでも、これから苦虫を潰すことになるであろう相手を想像して喜びを得ているわけでもないのだが。

「欲しいと言えば、何でも通るとでもお思いで？ 全く神殿の方々は世間知らずでいらっしゃる」

鼻で笑ってしまったのは、本心が透けてしまったからだ。その辺りはもう少し精神修行が必要かもしれない。

「この広大な大陸を治めるという事は、行き当たりばったりでの統治では全国民の生活を保障していくことは不可能です。予め税収を計算し、そこから支出を予測し予算立てしていく。そうやって我々は国家運営をしているのです」

「そのような講釈、今更していただかなくても存じておりますわ」

「予算というのは国家の基盤です。王家として、神殿に対し毎年一定の寄付を行っているのも、国民からの税収によるものです。寄付を増やせというのは、それは即ち国民への負担を増やせという事と同義であるという事はご理解いただいておりますか」

「……ええ」

苦虫を噛み潰したような表情をする神官長を見ても、何の感慨も湧いてこない。

こういう言い方をして申し訳ないとも思わないし、婚約者の姫を追い詰めるような言い方をする事に罪悪感も感じない。可哀想だとも、何とかしてその意図を通してやりたいとも思わない。

従わせるのみ、だ。

「そしてもう一点。神殿というのは元来王家から手の離れた自主独立を基本とした組織です。しかしこれ以上の金銭的負担を求められるのであれば、残念ですがその財務に対して不審を抱かずにはおられません。こちらから会計士を送ることも考えなくてはなりません
が」

嫌だろう。絶対に王家の支配下になど置かれたくあるまい。

答えなんて聞く前からわかりきっているので、敢えて返答を待つ

気もしない。

「別に貸借対照表を出せとか、そういう細かい事を言うつもりはありませんよ。今年は大祭の礼拝の回数も多く、去年よりも拝観料の収入も増えている。新巫女誕生で新調したものも多かった昨年のほうが支出は多いはずです。それなのにこのような結果を招くということは、神殿内での予算や支出に関する精査が足りないという事ではありませんか」

畳みかけ、ふうつと溜息を吐く。

視線が合うと、神官長の目は笑っていない。表面上は穏やかな顔をしているけれど、腹の中は煮えくり返る思いだろう。

やり込めたからって、別に嬉しくも無い。

寧ろよくまあ婚約者の女性にここまで非情になれるかと、我ながら関心する。

以前はそれなりに心情を慮ったりもしたし、年月を重ねることに情が生まれていくのだろうと思っていた。そして共に肩を並べて歩いていくのだろうと。

けれど今俺の中には、そういった少しでも目の前の神官長と心を添わせたいと思うような気持ちが生まれてこない。

敵だとは思っていない。ただし味方だとも思っていない。

王宮の中に巢食う権力欲にまみれた連中たちと対峙する時と同じような緊張感を持って接するだけだ。ってことはさ、全くもって気の抜けない相手って事だ。

神官長との間には見えない溝が年々広がっていくように思う。

婚約者である目の前の姫君が俺を裏切ったからなのか、それとも俺が心変わりしたからなのか。そのどちらのせいでもあるのか。以前には多少なりとも本心や本音が会話の中に透けて見えたものだけれど、今は全くの社交辞令しか見えてこない。その分岐点はどこにあったのだろう。

長い長い沈黙の後、神官長は深い溜息を吐く。

「……わかりましたわ」

俺が折れないのがわかったのだろう。

大体もう何十年も同じ金額しか出していないのだから、こういう結果になるのはわかっていただろうに。俺が先の祭宮に比べて若造だから何とかなるとでも思っていたのだろうか。

不快だとは思わないが、もしそうならば浅慮だなと思う。神官長ではなく、神殿という組織が。

王宮内も複雑に様々な組織が絡み合っているが、神殿もまたかなり複雑で細かく部門分けされている組織であると思う。その中の最高責任者は神官長だが、その下には各部門に長がいて、その頂点たる長老もいる。各長たちが何を考えてこういう結果を出し、尚且つ神官長から俺に働きかけるようにと動いたのだろう。どのような議論の後にこの結果が導き出されたのか。

「わざわざご足労頂いたのに、実のある話にならず申し訳ございませんでした、祭宮殿下」

嫌味か。それは。もっとも仮に嫌味であつたしても、可愛らしいものだ。腹を立てるような類のものでもない。

ふつと頬をほころばせ、神官長に笑いかける。

「気にしておりません。文書で済ませることも出来ますが、このような機会を設けるほうが相互理解を深める事が出来るかと。それに神官長様や巫女様にお会い出来る貴重な機会を頂けた事を感謝しております」

「本当に祭宮殿下はお上手ね。わたくしが王宮にいた頃からお変わりにならないのね」

少しだけ張り詰めた糸が緩んで、神官長の肩に入つた力も抜けている。ふわりと浮かべる笑みは本当に優雅そのものだ。絵に描いたような「お姫様」だな。

綺麗なお姫様はもう苦渋に満ちた表情なんて浮かべない。自分の中にはそういった醜い感情は一切存在しないともいうかのように。「そついえば巫女はまだ奥から戻ってこないのかしら」

「お忙しいでしょう。巫女様に急ぎの用事があるわけではありま

せんから、別に構いませんよ」

どうせ俺が来るってわかって、あの化け物が俺に会わせないように画策しているのだろう。

気にしていないと神官長に微笑みかけると、神官長もまた笑みを浮かべる。

「祭宮様のお心が広くて感謝致しますわ。巫女には事前に申し伝えたのですが、お待たせしてしまって申し訳ありませんわ」

申し訳ないと神官長は眉をひそめるけれど、正直別にどうでもいい。

足を組みなおし、冷め切ったお茶を口に一口含み、窓の外に目を向ける。鬱蒼とした森の向こう側にある白い大理石で出来た堅牢な建物、奥殿。

一瞬だけ視界に入っただけなのに、何故か頭の中には神託が浮かんでくる。

- - そこで運命にあうでしょう。

- - 触れるなど言っただけ。違えた約束の代償は払ってもらった。暫くその手に戻らぬと思え。

僅か数日の間に俺へと告げられた二つの神託。

一つ目は巫女になったササの事。二つ目は婚約者である神官長のことかと思っていたのだが……。俺、今別に神官長を返して欲しいなんて思っていない。あの時は俺のだから返せと思っていたが。

疑念が湧き上がる。

水竜には一体どんな未来が見えているのだろう。

焦って来たのかわからないが、平静を装いつつも息が上がっている。そんな彼女の様子が微笑ましくて笑みが漏れる。

わざわざ走ってきたのかな。いやいや、さすがに巫女が走ったりはしないだろう。

でも彼女ならそれもありえるか？

いつものように巫女の笑顔を浮かべる彼女に近寄って、祭宮然とした挨拶をすると、にっこりと彼女が微笑む。

うーん。これがギーが言うキュンってやつか。

胸の鼓動が逸るのも、口元が自然と上がってしまうのも「キュン」の効果なのか。

ただどうしても彼女を見るとからかいたくなるんだよな。

「そんなに焦ってくるほど俺に会いたかった？」

耳元で囁くと、目を見開いた彼女の頬が一気に真っ赤に染まっていく。

やばいな。自分で振っておきながら、余計にどつばに嵌まったな。これで手を出すなというのは蛇の生殺しだ。

微笑みを浮かべたままの俺を、上目遣いで彼女が見上げてくる。触りたい。

その真っ赤に染まった頬に手を伸ばしてみたいくらい可愛い。これで更に俺が触れたら、お前、一体どんな反応するの？

……しないけど。

「お忙しいところをすみません。こちらの都合でお伺いしたのですが、巫女様にもお氣を使わせてしまいましたね」

出来るだけ本音を上手く隠して取り繕い、困ったような顔で俺を見る彼女に座るようにと促す。

いつものように、彼女と神官長と俺の三者会談。

ここからまた先程までのような針のむしろが始まるかと思うと、

ぞつとする。

彼女をからかって遊ぶほうが楽しいのに。

巫女権限で邪魔な神官や神官長に退出を促してくれたらいいのに、まあそういう事はしないよな。生真面目な巫女は。

俺が始めて出会った時よりもずっと落ち着いて品のある女性として、付け焼刃というのではなく身に着いた品性が所作に表れている。あの日、巫女になるのに相応しくないと泣いていたけれど、俺の言ったとおり、何とでもなるだろう。

「祭宮様のご都合でという事でしたが、ご神託が必要というわけでは無いのでしょうか」

一瞬の動揺も上手く巫女の仮面で押し隠し、ごくごく冷静なフリをして訪ねてくる彼女がまた、ぐっとくるんだよな。

その氷のような巫女の仮面と、さっきの本心を垣間見せたかのような表情。そのギャップが無理しなくていいんだよって言ってやりたくなる感じで、庇護心をくすぐるというか。

返答をしない俺を不思議そうに見て小首を傾げる彼女に微笑み返し、本業を思い出す。

「ええ。業務上の確認の為に参りました。巫女様のお手を煩わせるような事はございません」

「そうですか」

あれ。声のトーンが硬い。何で若干ムツとした顔になってるんだ。「しかし巫女様のお元氣そうなお顔が拝見できて、とても嬉しく思っております。なかなか神殿の方々にお会いする機会がございますので、お会い出来る幸運に巡り合えて感謝しております」

「おほほほ。お上手ですこと」

巫女である彼女ではなく、神官長が口元に手を当てて笑い声を上げる。

ちらつと彼女に目を向けると、ふっと肩が上下に動いたので溜息でも吐いたのだろうか。

「本当はわざわざこちらにいらっしゃるのはご面倒でしょうに。」

足労をお掛けして申し訳ありませんわ」

要望を呑まなかったことをチクチクやるおつもりですか。いいですけれどね、別に。

「いいえ。とんでもない。水竜様のお許しが頂けるのでしたら、それこそ毎日でもこちらにお伺いさせていただきたいくらいです」

「まあ。本当にそう思っているのなら嬉しそうですね」
実際にそんな事したら祭宮業務が滞るので致しませんが。

しかし社交辞令というのは非常に大事だ。これで人間関係が円滑になるのならば、幾らでも心にも無い嘘も吐ける。

実際彼女に会いたい気持ちがあると言うのは嘘ではないので、全くの嘘ではないから良いだろう。

「巫女様はお変わりありませんでしたか」

しかし社交辞令の応酬というのもあまり心地よいものではないので、お茶のカップに手を掛けていた彼女に声を掛ける。

カチャッと音を立ててカップをソーサーに置き、彼女がまたにつきりと巫女の笑みを浮かべる。

「はい。とても元気にやっております。祭宮様はお変わりありませんか」

「ええ。何も変わりなく、のんびりとやっております」

嘘だけれど、神殿のゴタゴタに巻き込むつもりは一切ないし、今何かを彼女に伝えるべき時ではないので王太子指名のことなどは黙っておく。

それよりもこの巫女ですって笑顔じゃない顔が見たいな。

どうやったらさっきみたいな本当の彼女の「素」の表情が見られるのだろう。

巫女じゃない彼女自身としての笑顔が見たい。それはさすがに欲をかき過ぎだろうか。でも見たい。またどうせ何ヶ月も会いにはこられないのだから。

「祭宮様とのんびりってあまりそぐわない感じが致しますわ。本当は浮名を流しているのじゃないですか？」

余計な事を口出ししないで欲しい。

ああ、彼女の表情が固まったじゃないか。先程からの明らかな悪意が感じられる発言は、嫌がらせに近いな。よっぽど腹に据えかねているという事か。

「浮名など。ありえません。そのようなだらしの無い男だと思われていたのなら心外です」

「あら。そうだったかしら」

「そうだったかしらではありませんよ。そもそも神官長様が王宮にいらっしゃる頃から、そういった噂など流れてはいなかったかと思いますが。しかしそのように誤解されていたとは、残念です」

クスクスとまるで鈴のような笑い声を上げる神官長は一体何を考えているんだか。普段はこういう話題は一切出さずにビジネスライクを突き通しているというのに。

女って面倒臭い。

いかんいかん。本音が顔を出してしまった。

直系王族として子孫を残さなくてはならないから結婚は必然だし、その相手は厳選されて然りだと思っている。その事には異論は無いが、だからといって女の機嫌をとって相手にしなくてはならないのは非常に面倒だ。外見も内面も並ぶものが無いとさえ言われる姫君を婚約者に持つてもなお、その考えは変わらない。寧ろ姫君であり神官長の機嫌をとって美辞麗句を並べるのは息が詰まる。

偽りの笑顔。偽りの愛の言葉。

そんなものには何の価値もないのだと、気付いてしまったから。ただ本心をぶつけてくる相手というのは、時として苛立つ事もあるけれど、それでも心地よい。

この国でたった一人だけ「祭宮」でも「王子」でも「カイを持つもの」でもなく「ウィズ」として見てくれる彼女という時間が恋しいと思う。だから余計に本当の仮面の下の彼女の素顔に触れたくてたまらない。

こんな上辺だけの会話なんて何の意味も成さない。

けれどいつだってそんな会話しか俺たちの間には残らない。何の話をしたのかもわからないような、どうだっていいような。

会話の合間に、ふいに目が合う。

視線を逸らそうとしたのにも関わらず、視線が絡み付いて離れない。いつまでたっても、右に動かしても左に動かしても。絡んで離れないのは、視線だけなのだろうか。

お互いに一瞬時間が止まったかのように見つめあったかと思うと、彼女が頬を染めたまま俯いてしまう。

もしかして？

その反応に心の中で拳を握った。

何とも思っただけなら、そんな風に困ったような顔をしたりしないよな。俺の直感が「よっしゃー！」と叫んでいたのはご愛嬌。

「祭宮様？」

おつといけない、現実を忘れていた。

冷たい女王のような神官長の視線を感じ、コホンと咳払いをして立ち上がる。

「巫女様のお元氣そうなお顔も拝見出来ましたし、要件は済みましたので、そろそろお暇させて頂こうかと思えます」

はっとしたような顔で俺を見上げた彼女に微笑み掛ける。何かを言いたげに口を開きかけたが、彼女もまた巫女の笑みを浮かべる。

立ち上がろうと腰を浮かせた彼女に手を貸すように目の前に差し出すと、一瞬戸惑ったような表情を浮かべる。

「どうぞ」

「あ、ありがとうございます」

戸惑いの表情を見せつつも、断るわけにはいかないと判断したのであろう彼女の手がそつと重なってくる。これくらい触れるにはならないだろう。貴婦人に手を貸さないのは紳士として失格だしな、と心の中で言い訳。

ぎゅっと重ねられた手が握られて、ドキッと胸が跳ねる。けれど何も無いように平静を装って祭宮として笑みを浮かべる。

「いいえ」

再び彼女が軽く頭を下げると、重ねられた指がずっと引いていつてしまう。

ほんの少しだけ感じた彼女の体温。緊張のせいか冷えていた指先。柄でもないけれど、そういった全てが愛しく思える。

「どうぞ王都までの道中お気をつけて」

「ええ。ありがとうございます」

心からの笑みを彼女に向け、惘然としたままの神官長へと向き直る。

「神官長様もどうぞお体ご自愛下さい。これからどんどんこちらは寒さの厳しい季節になりますから」

「ありがとうございます。祭宮殿下も、ご無理をなさいませんかように」

「ありがとうございます。では、失礼致します」

二人の尊い存在に心からの礼をし、背を向ける。

部屋の扉に手を掛けてからふと後ろを振り返ると、巫女の表情を貼り付けたままの彼女と目が合う。

「がんばれ」

声には出さず、口だけで伝えた言葉は彼女に伝わったのだろうか。表情を変えないまま、深く頭を下げてしまったのでよくわからないけれど。

深く考えるのは性に合わない。

だけれどわかった事がある。俺は多分婚約者の姫君に今まで恋なんてしていなかった。あるのは必然だけだ。今になってその事に気付いたのは「運命」に出会ったから。

浮かれた気持ちも、触れたくてたまらないという欲望も、誰かの力になりたい守りたいなんていう自己犠牲的感情も、今まで自分の中には無かったものだ。

恋って、好きっていう気持ちに付随して、色んな感情を自分の中から引つ張り出してくるものなんだな。

そして自分のほうを向いて欲しい。同じように想って欲しいと願ってやまない。

これが本当に「運命」の恋なのならば、いつか彼女は俺のものになるのだろうか。頬を染めて上目遣いに俺を見る彼女の姿に、いつかそうなるんじゃないかなんて一縷の希望を見出さずにはいられなかった。

あの日の、能天気な俺。

なーんにも知らない。それこそ神官たちに「無能」と評されるに相応しいお坊ちゃまで覚悟の足りない三男坊だった。

ゆっくりと一度積み上げたものが瓦解へと進んでいったというのに。

王宮に戻ると、あの神官長の嫌味さえも可愛いものに思えてくるような情報戦やら心理戦が繰り広げられていた。

それに巻き込まれる気もないのだけれど、どうしても王宮を住まいにしている限り、否が応でもその中に引きずり込まれる。

もしも仮に俺が玉座に座る日がきたら、公の部分と私的な部分は物理的に切り分けよう。私室にも大臣たちが押しかけてきて、気の休まる時が無い。

あれやこれやというジジイどもの話を聞き流し、坦々と日々の業務をこなしていく。

こなすと言っても、今回はご神託を貰いに行った訳ではないので、新たに報告書を作成するといっても紙1枚と口頭で済ませられる程度のものではない。

更に大祭も終えた後なので、差し迫って処理を進めなくてはならないような案件が溜まっていくわけでもない。

ただ収穫期で税の関係や寄付の関係の書類の数は多い。まあそれに関しては来るものは拒まずという感じで、おかしい額でもない限り判を押すだけだが。

だからこそ、大臣やらその下っ端やらがここに押しかけてくるのかもしれないが。

留守の間にルデアが処理をしておいた書類に目を通し、片っ端から承認印を押していく。文字の羅列を読み続けて判を押すだけの作業。

やばい。眠い。

ふうつと溜息を吐き出すと、コホンとルデアが咳払いをする。

わかってるよ。もうちょっと読めばいいんだろ。

フンつと鼻から勢いよく息を吐き出してから再び書類に目を向ける。5枚綴りのこれは、どっかの街からの要望書らしい。祠の老朽

化に伴う修繕の必要性について長々と書き連ね、最後は援助をい
ったところだ。

「ルデア」

「はい」

「祠の修繕というのは頻繁に行うものか。平均的に何年に一度と決
まっているものなのか」

鎖で繋がっている眼鏡をかけてから、ルデアが目の中の書類に指
を指す。

「この街は沿岸部ですから、潮風を受けて通常よりも痛みが早いのは
事実ではないかと思います。また修繕と一口に言いつても、小
規模な補修なのか、それとも大規模修繕、簡単に言えば建て替えに
なりますが、そのどちらのかというのも判断の材料にしたほうが宜
しいかと思います」

「なるほど」

「ってことは、その辺りを少し勉強して自分なりに解釈して答えを
導き出せというわけだな。あと、もうちょっと文章をちゃんと読め
と。」

「ではこの案件に関しては、最終判断は俺がしても構わないという
ことだな」

「……殿下。殿下のところに上がってくる全ての書類の決裁権は殿
下ご自身にあります。どんな些細だと思われるようなことでも、殿
下がお決めにならなくては意味がございません」

ルデアの言葉に背が伸びる。

「わかった。ではルデアはこの件に関してはどのように思っているか意
見を」

手のひらを上にしてルデアに意見を述べるように促すと、ルデア
はゴホンと咳払いをして部屋の中を見回す。

部屋の中には数人の文官と女官それとギーがいるが、その誰かに
聞かれたくない話があるとでもいうのだろうか。どこかの街の祠の
修繕の問題が。

「長くなりますよ」

感情を一切廃した声で述べるルデアに頷き返す。

窓の外を眺め、傾きだした陽の光を見つめる。朱色の光が部屋の中にも差し込んでくる。

「業務終了時刻になってしまふな。この話は後日のほうがいいかな」
「残業手当をつけて下さるのならご説明致します」

わかったよ。ったくもう。

「お前とギーは今日は残業決定。他の者は時間を見て帰っていいよ。後は全部この二人にやらせるから。遅くまで付き合わせて悪かったね」

クスクスと笑い声が女官から上がり、ギーが眉を顰めるが、女官たちは全くもって気にする素振りはない。

文官たちは手にしていた書類を各々の業務用の机に片付け始めたり書棚に戻したりと、閉め作業を始める。

ルデアはルデアで自分用に宛がわれている机の上の大量の書類をファイリングすることに勤しんでいる。今は全く話す気が無いらしい。

人払いをしてまで話したい話とは一体どんな話なんだ。全く想像がつかない。

とりあえずはきちんと書類を読み込んでおこう。

空に星が瞬きだした頃、応接用にと備え付けられたソファに俺とルデアとギーの三人が座る。

テーブルの上には軽食とルデアが用意したお茶が置かれている。

まだまだ酒を飲む時間ではなく、業務の休憩程度のようなのだ。

もしくは頭をクリアにしておく必要があるというルデアの意思表示示だろう。

「で、あの街の修繕に関して含みを持たせた意味は何？」

「書類はお読みになれましたか」

「ああ、読んだよ。別にこれといって疑問を持つようなところは無

かったが」

眠い目をこすりながら最初から読み返し、整合性の取れないところは無いが、過剰な要望ではないかなど自分なりに分析をしたつもりだ。

今現在使えないわけではないが、水竜の祠の一部に亀裂が入っているので、出来ることならば亀裂の補修ではなく祠の建物そのものを作り直したいと言う事。それにはかなりの金額が掛かりそうなので王家からの援助を求めたいのだが、無理ならば納税額を多少減額して貰えないかというもの。

それ自体、取り立てて神経を尖らせる必要が無いように思える。

「税の減額もしくは祭宮からの援助。それを求めているのがこの領地のどこの街か。ちゃんと考えましたか」

「いや」

「せめてどの地方にある街かはわかっていますよね」

「西方だろ」

は「っと吐いた溜息に、ルデアが呆れている事がわかる。

「結論から申し上げます。現在の情勢で特定の領主への税の優遇や援助は第一王子や国王陛下への叛意を持たれていると他の勢力に思われる可能性がある事も十二分に考慮されていらつしゃいますか」

思わず鼻で笑ってしまった。

それをギーが咎めるような顔で見たが、視線を合わせただけで口を開こうとはしない。

「そんな事を気にしていたら、祭事を預かる祭宮として必要な援助や支援を行う事すら出来やしない。馬鹿馬鹿しい。王宮内の勢力争いに民を巻き込むのは愚かではないのか」

「そういう理想論は通用しないのです。あなたが水竜の神殿に参拝に行った事で、水竜を後見につけて巻き返しを図ろうとしているのではないかと疑われているのです。そこに更に特定の領主への優遇があれば、自勢力の拡大を狙っていると思われるも仕方ないのですよ」

くだらない。誰がそんな事を考えているというんだ。

けれどそうやって他人の揚げ足を取ったり、裏の裏を考えているのが王宮に出入りする貴族たち。自分が腹黒いから、全員腹黒いと思っているのだろう、きっと。

だが、そんなことで痛くも無い腹を探られるのも後々のことを考えると厄介だ。

「では王太子指名が公になってから、金銭が関わる件に関しては処理する事にしよう。それで構わないね、ルデア」

「はい。ですので、そういった案件にしましては全てこちらで一旦保留とさせて頂きます。こちらが水竜の祠や祭事などに関してなど断りにくいとかわかっていているものを領主たちが意図的に上げてきている可能性も否定出来ませんので」

「頼んだよ。ルデアが事前に切り分けてくれると、助かるよ。ありがとう」

ルデアは鼻でふっと笑うだけで、何も答えようとはしない。

その代わりにギーが口を開く。

「しかしもう少し落ち着くかと思いましたが、一向に状況は改善されませんね」

「だーなー。兄貴が次王に指名されてからのほうが水面下の動きは活発化しているようで、意味がわからないな」

「意味？ そんなの簡単ですよ。皆権力の甘い蜜が吸いたいただけですよ。俺みたいにあなた専属秘書官で収まって満足している上昇志向の無い人間には無縁ですが。ギーだって出世しようと思えば、近衛連隊長ごときではなく、もっと上の地位に立てるはずですよ」

ルデアに言われたギーは肩をすくめる。

「手のかかる王子様から目を離すと何をしかすかわからないので自分はこれでいい。お前だってそう思っているから方々の誘いを蹴っているのだろう」

「まあ、そうですね」

ぶっきらぼうに言い放つルデアと、さも当然とふんぞり返るギー

が可笑しい。

可笑しくてクスクスと笑い声が漏れるのを、二人して呆れ顔で見返してくる。

「今、すつごく自分が貶められているって理解されていますか？

覚悟が足りないだけではなく、少々おつむも足りなかったのではないかと心配になってしまっているのですが、大丈夫ですか」

ルデアのそんな毒舌が心地いいと言ったら、更に呆れられるのだろうか。

「いや、俺って愛されているなと思ってさ。覚悟が足りなくておつむが足りなくても、お前たちは俺から離れていかないんだろう」

「もう一つ付け加えて下さい。能天気だというのも」

頭を抱えてルデアが言う。酷い言われようかもしれないけれど、閉鎖された空間でなら昔と同じように対等に言いたい事を言ってくれる友が傍にいてくれる事があるがたいと思う。

こうやって足りないところを指摘してくれる人間が傍にいないとなったら、多分俺は腐っていくだろう。傲慢で鼻持ちなら無いヤツになっっていたに違いない。

自制するためにも、自戒するためにも、苦言を呈する者というのは必要だ。

なるべく巻き込まれないように、ルデアの助言を元に先送りできる案件は先送りにし、貴族たちの話は聞き流してきた。

しかし状況はあまり改善されず、ついに父王が動き出す。

「お呼びでしょうか、陛下」

玉座の前に膝を付き、冠を頂に載せた父と対峙する。

最近やたらと王冠を持ち出しているという話を聞いていたが、本当だったのか。もう何年も王冠なんてお蔵入りしていたというのに。王の権威の無さを気に病んでおられるようですと言っていたのはどの大臣だったか。覚えていない。

「祭宮。そちに一つ頼みがある」

「はい」

顔を上げて正面から父王を見据えると、すいっと視線が逸らされる。けれどこちらは決して逸らさず、父をまっすぐ正面から見つめ続ける。

長い長い沈黙。

わざわざ「祭宮」を呼び出して伝えたかった頼みとは。祭宮に就いてから、一度もそのように言われたことなど無かった。祭宮にしか出来ない頼み事など、皆無といっても過言では無い。

政には関わらず、祭事を執り行うのが祭宮。

出来ることといっても、祭事の大半は水竜の神殿に丸投げで、書類の判を押す事くらいしかやる事なんか無いんだが。

「ご神託を、水竜の神殿で貰ってきてもらいたい」

「ご神託をですか。構いませんが、どのような件に関してでしょうか」

前回水竜の神殿を訪ねてから数ヶ月。収穫期も終わり、豊作への感謝の挨拶も済ませた。季節は冬。この時期には通常わざわざ雪深い神殿を訪れたりはいらない。

そんな時期にご神託をというのは、何か切羽詰った事でもない限り有り得ない。春の挨拶までは神殿には行けないと思っていたのだが。

冬の寒さも例年と変わらず、地方でもこれといった災害なども起こっていないと記憶しているが、こちらに情報があがってきていないだけで、どこかの地方で天候が厳しく人々の生活を脅かしているところがあるのだろうか。

再びの沈黙の間、様々な情報を記憶の糸を手繰り寄せて照会していく。しかしご神託に結びつくようなものはどこにも無い。

よく観察すると父王の額には汗が滲んでいる。この肌寒い時期にいくら王の正装を身につけているとはいえ、汗ばむほどの厚着ではない。

ということば、言いにくい何か。だな。

普段なら父王の傍で執務にあたっている文官たちもおらず、大臣も一人も列席してはいない。外部に漏らされては困るような、内密にしたい「何か」があるって事か。

しかし最近やたらと父王の脇で偉そうに踏ん反り返っているという兄貴も従えていない。

知らず知らず、ごくりと唾を飲み込んでいた。

兄貴にも知られたくない、何か。それは……。

「次の玉座、を、誰に与えるのか。わたしの決断が間違っていないのか」

消え去りかけた小さな声。

その答えを水竜に求めるのか。

脱力せずにはいられなかった。けれど臣下の礼をとり「畏まりました」とだけ告げ玉座を去る。

それ以上の言葉を父王から聞きたく無かったからかもしれない。

「行くんですか」

旅支度を整える俺の背後からルデアが声を掛けてくる。

振り返りつつその顔を伺うと、その瞳はルデアらしくもない翳りに満ちている。

「ああ、行くよ。ルデアも来る？ 寒いけど」

いつもならポンポンと答えが返ってくるのに、苦虫を潰したかのような顔でルデアは黙り込んでしまった。

敢えて答えが欲しいような事でもないのに、答えを待たずに防寒着を引っ張り出す。まさか祭宮になってから、軍隊仕様の防寒服を着る羽目になるとは思ってもいなかったな。

それだけ父上も必死だという事なのだろう。

分裂して勢力争いを繰り広げる貴族たちの動きを抑えるのに、最も効果的と思われる「水竜のご神託」を得たいが為に、

しかし理解出来ない。

何故兄貴を指名してからこの騒ぎが起こったのか。

それとも俺が気付かないだけで、ずっと水面下ではこういった動きがあったのだろうか。

「……ギーが行けないのですから、俺が行くしかないでしょう」

溜息交じりにルデアが呟く。

「ルデア？」

「行きますよ。水竜の神殿。あなたの供をギー以外の人間に預けるのは心許ないので」

クスクスと俺が笑い声を漏らすのを、ルデアは気にするそぶりも無く、ゆつくりと頭を下げて部屋を後にした。

ギーが腕を組んだままルデアが消えた扉を見つめて溜息を吐く。

何か思うところがあるのかもしれないが、その件について口を開くつもりは無いようだ。

窓の外には雪が舞っている。

新年の宴も何もかも放って出かけるなんて、腹黒狸たちにはどのようなに見えるのだろうか。

どこに内通者や暗殺を企む輩が紛れ込んでいるのかわからないので。

そう言つてルデアはまるでギーがそうするかのように、四六時中傍を離れようとはしなかった。

故に、神殿までの旅の間、ルデアから様々な知識を吸収するいい機会になった。

たまたま話は巫女についてに及ぶ。

「水竜の巫女。一体どんな人物なのですか。先の方については存じておりますが、今の方は一切お会いした事も無く、報告書の内容を見てみると非常に頼りない人物のように思えますが」

ルデアのところに上がってくる報告書には一体どんな内容が書かれているのだろう。

彼女は神官から見たらどんな巫女なのだろう。

「どういった事が報告書に書かれているんだ」

「そうですね。端的に言つと、頼りないような覇気が無いような。

まあ、そんな感じででしょうかね」

「ふーん。そうか」

そんなもんなのかな。普段会いに行く時には巫女らしくやっていると思っていたのだけれど。

巫女になる以前に比べたら、とても成長しているように思えるけれど、先の巫女である神官長と比べるとまだまだというところか。

「巫女の十人十色でしょう。この方も恐らく短命で終わるのでしょうね。そうすると次の巫女がいつ誕生してもいいように事前に準備をしておく必要がありますね」

まあ早々に任期が終わつたとしても「巫女だった」という事実には代わりは無いわけだし、俺の思惑には何ら影響をもたらさない。

彼女自身にも言つたことがあるけれど、巫女だったならば王妃に

だつてなれる。事実、始まりの巫女を筆頭に、何人もの巫女が王家に嫁いでいる。

どんな巫女だったかなんて評価はあまり関係なく、ただの村娘を娶るのは不可能でも、巫女だったならば俺が妃に迎えても問題無い。別に時期が早かるうが遅かるうが、たいした問題ではない。

「聞いてます？」

「ああ、聞いているよ」

ルデアの話に意識を戻し、馬車の中で足を組みかえる。

「この百年以上、歴史に残るような巫女は現れていませんね。そろそろかと思っているのですけれど」

「ふーん。例えばどんな？」

「……あまり神殿史にご興味が無いのはよくわかっておりましたが、せめて巫女の事くらい学んでいただけると大変助かるのですが」

という前置きをし、ルデアが神殿史を語りだす。

何でそんな事まで知っているんだ？ と聞くのは無粋というものだろう。このルデアという男は、なんとなく興味を持っただけでもとことん調べ上げなくては気がすまないのだから。ルデアの為に博識という言葉はあるのではないかと思うほどに、知識に対して貪欲だ。

そんなルデアが語る巫女たちの話は、最も神殿にかかわりを持つ祭宮でさえも知らないような、というよりか俺が興味が無くてあまり気にも留めていなかっただけかもしれないような気もするが、巫女の中にも多種多様な人物がいると再認識させるものだった。

例えば始まりの巫女。

現在の水竜の神殿の基礎を築き、初めて水竜の声を聞いた人物。

この辺りが俺の知識の限界だったわけだが、ルデアの語る話ばかりと趣が異なる。

始まりの巫女は、水竜の声を聴くことだけではなく、その姿を視ることが出来たらしい。視るというのは見るとは異なって、水竜の本体を見るところとは違い、その精神体を視ることが出来たらし

い。

らしいらしいと伝聞調なのは、そう神殿では言い伝えられているからというのが情報源だからだ。

ちなみに視る事が出来る巫女というのは、ごくごく稀に現れるそう
うだ。

何十年、何百年に一度という割合で。

そういつた聴く能力に加えて視る能力も携えている者のことを、
神殿では「類稀な方」と呼ぶらしい。

その類稀なと呼ばれる人物の中で、更に強い能力を持つ者がいる
らしく、その人物は水竜を自らに憑依させる事が出来るらしい。

水竜は文字通り巫女の口を借りて、自らの意思を伝える事が出来
る。

ただ、憑依させる事が出来る人物は憑依と代償に命を落とす事が
多いようだ。憑依したらすぐに死が訪れるというわけではないよう
だが、その後体調に変調をきたして死を迎える。

巫女の歴史の中には、そんな悲劇もあるようだ。

だからこそ、いつ巫女に異変があってもいいように神官長という
保険を掛けているわけだ。

体調不良等により途中で巫女を全うする事が出来なくなった場合、
そもそも巫女に選ばれても辞退した場合、そんな時の為に神官長が
いる。巫女の座を空位にしない為に。

そのような場合には、神殿で急遽巫女誕生の儀式を執り行うよう
だ。

そもそも外部には巫女がいつ代わったかなどの情報は秘されてい
るので、いつ代わろうが民には全く関係ない。

興味があるのは、支配者である王族や貴族たちだけだ。

自分の血族から巫女を輩出することが出来るか。巫女を娶る事が
出来るか。

いつだって、興味はそういった名声に繋がるような事でしかない。
「いつかあなたは巫女を妻に迎えるのでしょうか」

「……え？」

誰にも明かしていない胸のうちを覗き込まれたようで、ぎよっとして言葉に詰まる。

「何を意外そうにしているのです。あなたの婚約者はかつて巫女だったのですから、当然でしょう」

「あ。ああ、ああ。うん、そうだな」

よほど答えが滑稽だったのだろう。自分でもそう思う。

ルデアがあきれ返ったような顔をして、ふんつと鼻を鳴らす。

「別にいいですけど、誰があなたの妃になろうとも」

「先の話だよ」

ふんつともう一度鼻を鳴らし、ルデアがずり下がってきた眼鏡を戻すように押し上げる。

「一つだけご忠告致しますけれど、あなたはただの王族ではなくカインを継ぐ者なのですから好きだの嫌いだのといった感情だけで妃を誰にするかなど選べませんからね。あなたの立場をより強固にするような人物以外、あなたの横に立つ事は許されない」

「玉座から遠ざけられているというのに？」

「遠ざけられているではありませんよ。あなたはそこで守られているのです。それがわからないのならば、もう少し周囲に目配りする事をなさったほうが宜しいでしょうね。誰も手出しの出来ない地位に、誰も並び立つ事の出来ない唯一の場所をあなたには与えられたのです。兄上の部下ではなく、兄上や王太子殿下と並び立つ為に、ついでにここまで教えて差し上げる俺にも感謝していただきたいです」

いつか兄上に言われてた言葉を思い出す。

父上の意図を理解していないと、あの時兄上は言っていた。だから覚悟が足りない者だと言われるのだと。

守る為に、並び立つ為に。今この地位があるとルデアは言う。同じ事を兄上も感じていたと言う事なのだろう、恐らく。

それでも、思う。

「俺は王にはならない。その為に祭宮なんだろう。それが父上の答えだ」

「……あなたは愚かです。祭宮という立場を上手く利用すれば、玉座など容易く己のものにする事が出来るというのに。何故それをなさらない」

いつもよりも熱くなっているのはわかる。俺も、ルデアも。

「有史以来の前例を覆すつもりは無い。それで、いいんだ。ルデアは俺に玉座に座って欲しいの」

「正直に申し上げても宜しいでしょうか」

「ああ、構わないよ」

「玉座に座るべきです。あなたはその為に姫を婚約者にし、そのお立場を強固なものにしてきたのです。水竜の神殿を後見とし、巫女を妃にし、それは他の王子は持ちえない武器だとは思いませんか。俺だってギーだって、あなたの人柄に惚れたからこそお傍から離れなかった。それは即ちあなたを王にする手助けをする為です。決してこのまま終わらせる為ではありません」

「うん。ありがとう。けれどその計画は最初の一步で頓挫しているよ。姫はもう神殿の檻に捕らわれて出てくる事はないだろうからね」
自嘲的な笑みが零れ落ちる。

それを見た為かどうかはわからないが、ルデアが盛大に溜息を吐く。

「何故それであっさりと諦めてしまうのです。ならば姫の心を引き止めるような努力をなされば良いことです。贈り物でも愛の言葉でも、何でも方法はあるでしょうに。女泣かせの第三王子の異名をこれから如何なく発揮してください」

「……そんな異名は初めて聞いたけど」

戸惑う俺のことなんて気にも留めるつもりはルデアには無いようだ。

「事実ですから。というわけで、せっかく神殿まで行くのですから、ついでに姫を口説いてきてください。ちょうどいい機会ですよ、頑

張って」

というわりには、何故口元が笑っているんだ、お前は。

冗談で片付けようとしているのか、それとも言い過ぎたから誤魔化そうとでもしているのか。ならばこちらでも軽口で終わらせてしまうのがいいのかもしれない。

「やだ」

「やだって何ですか。あなた子供じゃないのですから、もう少し言いようがあるでしょう」

「嫌なものは嫌だ。今更口説くとかしたくない」

「あーなーはっ」

どうやらルデアの怒りの炎に油を注いってしまったようだ。でも、出来ないものは出来ない。

ふいつと横を向いた俺に向かって、ルデアは深い溜息を吐き出す。馬鹿だなって自分でも思うよ。

ルデアの言うようにもつと器用に立ち回ればいいのかもしれない。そうすれば次の王は無理でも、その次の王にだったらなれるかもしれない。

「何故」

しばしの沈黙の後、絞りだすかのように、感情を一切排した声でルデアが尋ねてくる。

何故かと問われても、嫌なものは嫌だとしか言いようが無い。

必死になって上辺だけ取り繕って、裏で様々な手回しをして、時には汚い手を使ってでも王になりたいとは思えない。

なりたかったはずの王という存在が、今の俺にはさして魅力を感じないものになっている。寧ろ適度に自由で束縛されない祭宮でいたい。

それは逃げでしか無かったとしても。

「手を伸ばせば手に入るのに、何故」

何故の問いに対して考える。

どうして王になりたいと思わないのだろう。どうして祭宮でいた

いのだろう。どうしてここに拘るのだろう。

「……欲しいと思わないんだ。玉座も、姫も」

それが取り繕いようなない本心。

欲しいものは、自由であつたり……。

「なんか辟易しているんだ。この王冠争いに。そこまでして欲しい玉座なんかじゃない」

「あなたは恵まれているから、そのように思うのでしょね。けれど姫だけは譲れません。どうかそのお心を繋ぎとめる努力をなさつて下さい」

「無理。絶対にしない」

「どうしてそこまで頑ななんですかつ」

少し怒りさえも滲ませるルデアの声を、どこか他人事のように聞いている。

「簡単だよ。俺は姫を愛してはいない。姫もまた俺を愛してはいない。だから元々繋ぎとめるようなものも存在しない。だから無理」
「愛だの恋だの。そんなものは政略結婚には必要ありません。当たり前すぎることをわざわざ言わせないでください。あなたは馬鹿ですか」

愚弄するルデアの様子に、ふつと笑いが零れる。

色々ルデアなりに心配してくれているんだろうなと思うと嬉しかったし、思いの丈をぶつけられる事が小気味良い。

頭の中には愛しいとは言いがたい冷たい瞳の婚約者が浮かぶ。それと同時に「いけないで」といつか俺の腕を握り締めた彼女の顔が脳裏にちらつく。

「じゃあ馬鹿でいいや。俺は愛だの恋だののほうが大事なんだ」

「はあ？ 何言ってるんだか、さっぱり理解出来ません。寧ろ脳が理解する事を拒否しているのですが、きつちり説明して頂けるのですね。それを口に出したという事は」

にやりと笑うと、ルデアが嫌そうに眉を寄せる。

「聞くつて言う事は、協力してくれるつて事でいいんだよね。ルデ

ア？」

「それこそ嫌です。馬に蹴られて死のうとも、恋路の邪魔をしたくなるのが俺の性。そんなものよりも、自分のお立場を考えて行動してくださいって説教するに決まっていますとわかつての発言ですね」

「じゃあ馬に蹴られて死んで来い。んで、今日からは俺の恋路の手伝いしてよ」

「ほんつとくに、あなた馬鹿ですね。今までも馬鹿だ馬鹿だと思っていましたが。どこで恋なんて碌でもないものを見つけちゃったんです。とつと捨ててきなさい」

ルデアの言葉が引つかかった。

「ろくでもない？」

「ろくでもないです。そういう無駄な感情を覚えるべきではないと思います」

「ふーん、じゃああの萌黄色のドレスを着ていたお嬢さんに、それを伝えてもいいわけだね」

「どこのご令嬢でしょう」

「ああ、ご令嬢だったんだ。って知っているけれどね。ギーに調べさせたから」

「……殿下」

「それが愛だとか恋だとかってものなら、俺の意見に同意して貰えるだろ」

掛けていた眼鏡をはずし、頭を抱えるようにして黙り込んだルデアを見つめる。

ルデア自身がろくでもないものといった恋だの愛だのってヤツは、本当にどうしようもなく人をみつともなくさせるかもしれない。

それでも、反面やたらと人間臭くていいなとさえ感じる。それは俺もまた、恋なんてものを知ったからなのだろう。

恋とは人を愚かにする。そんな事を吟遊詩人が詠っていたような記憶がある。確かにそのとおりかもしれない。

偽りの愛の言葉を囁いて、自分の立場を強固なものにして、そう

やって国の頂を目指すのもいいだろう。だけれど、そんな事をして空しいだけだと今の俺は知っている。

「欲しいものは、偽れないよ。俺も、お前もさ」

その存在だけで、俺を玉座から遠ざける。玉座を欲していた俺の心を動かしてしまう。運命ってやつは、目に見える明確な何かではなく、複雑に絡み合っているのかもしれない。

恋とか愛とか。

そんな甘ったるい関係だったら、いつそ良かったのかもしれない。表面上を取り繕う為に、どんどん拗れていくこともあるって事、全然わかってはいなかった。

同時に俺自身「恋に恋している」状態だったのかもしれない。

その姿、その声。微笑み。

触れる事は叶わなくとも、ただそこに彼女が存在し、俺に微笑みかけてくれる事が嬉しくて舞い上がっていた。運命なんて後押しや、微かな手ごたえという名の自信もあった。

それが見えるものを見えなくしてしまったのかもしれない。

だとしたら、本当に俺は愚かだったのだと思う。

好きだという気持ちが大きかったから、かっこつけてばかりいた。本心を上手く隠そうとしてばかりいた。

それと同時に、彼女の巫女としての評価を俺自身さえもかなり低く見積もっていたのも災いしたのかもしれない。

そして、また一つ歯車が動き出す。

父王の依頼を受けての神殿訪問は、正直言って二度とこの季節に神殿に立ち寄るものかと思うくらい雪、雪、雪。

あとから聞いた話では、たまたま訪ねた日の辺りが特に雪が降り積もったらしい。

ものすごくわかりやすい嫌がらせを受けたのだと、王都への帰り道に気付いた。天候を自在に操れる水竜は、俺という訪問者が気に入らなかったようだ。

結果、かなり薄着の巫女の正装を着なくてはいけなかった彼女に大変な思いをさせてしまって、申し訳ない気持ちになる。

その日、少し遅れてやってきた彼女の唇は真っ青だったし、肌は

寒さで鳥肌が立っている。

暖を取れるように手を貸してやりたくとも何も出来ない自分に、
齒がゆさを感じざるを得ない。

「本題は何かしら？祭宮さま」

突然の訪問の理由を聞くべく、神官長が切り出してくる。

ほんの少し前まで表面上は和やかに世間話に興じていたというのに、切り替えの早い事だ。

巫女である彼女よりもずっと体が弱い神官長にも、この寒さはかなり堪えるだろう。出来ることならば、このような無理をさせたくなかったな、この人にも。この後寝込むようなことにならなければいいが。

表面上は二人とも笑顔を浮かべているけれど、内心では予定外の訪問者に快い感情は抱いていないだろう。だからこそ、早々に用件を切り上げたいのかもしれない。

実際、神官長にはまたしてもチクチクやられる羽目になった。

わーるかったよ。俺だって来たくて来たわけじゃない。

心の中で呟いたけれど、口に出すのは憚られる。

嫌だと思いつつもこの時期に神殿を訪問したのは、王座に興味は無いと言いつつも、真に王の器にあるのは誰なのか、俺自身も聞きたかったせいもある。

暫定王太子の兄貴、全軍の指令権を持つ大將軍たる兄上、そして祭宮の俺。

先を見通す事の出来る「瞳」を持つ水竜には誰が適任だと見えるのか。本当に王座に座るべきなのは誰なのか。

王宮内のごたごたを解決できる糸口としてという使命感とは別に、個人的興味がそそられ、水竜の神託を待つ。

期待を込めて巫女である彼女に尋ねたのに、答えは全く予想もしていなかったような期待外れなものだ。

「水竜は王家の方々が行う『政』には一切干渉いたしません。お忘れではないですわよね、祭宮様」

「しかし、それはご神託とは言えないのでは。それでは、私をこちらに参らせた陛下や王太子殿下のお心にお応えすることが出来ません」

非難するつもりはないが、質問に対する答えとしてそれは的確ではないように思えた。

王太子である兄貴を次の王として、水竜は認めるのか。応か否か。答えはそのどちらかしかないはずなのに、肩透かしもいいところだ。

「二度は申しません。また、水竜はそこにご神託を曲げる事はございません」

それが答えか。

落胆の溜息が漏れるのを隠す事が出来なかった。

わかっていた。わかつている。祭宮が政治に関わらないのと同様に、水竜もまた一切政には関わらないのだと。

それでもこの国は水竜によって統べられている国でもある。

もう一人の支配者である「国王」を認めるのかどうか。そのくらの意見は持っているのではないかと思ったのに。

このような返答を想定していなかった俺の思慮が足りなかったのか。結局は無駄足か。

王宮に戻ってからどのように報告しようかという考えが過ぎった時、思いも寄らない人物の思いも寄らない言葉で現実に戻される。

「巫女。そうおっしゃらずに、もう一度水竜様に聴いて差し上げたら？」

いや、もう一度聞いても同じだろ。巫女である彼女が二度は無いと言っているのだし。

何故そのようなことを言い出したのか、謎というか不思議でしうがない。

けれどチラッと視線を感じ、その視線が俺の上で止まる。

姫は姫なりの何らかの意図があるということだろうか。

「いいえ。二度はありません。そうおっしゃるのは、私を、そして

水竜を疑っていらつしやるという事でしょうか」

「わたくし、そんなつもりで申し上げたものではありませんわ。巫女はわたくしがどれだけ水竜様をお慕いしているかお分かりにならないから、そんな事が言えるのだわ」

「では今の言はどういった意味だったのでしょうか」

「神官長様は水竜の言葉を信じている。しかし巫女である私の言葉は信じられない、そうおっしゃりたいのですか？」

その問いに口籠ってしまった神官長の代わりに否定をしなくては神官長だってそんな風に疑っているから「もう一度」と言っただけではあるまい。何らかの意図があつたから切り出したはずだ。そこまで浅はかな人間じゃない。

しかしこのように口籠ってしまえば、彼女の言っていることを認めてしまうことになる。

だが下手に横から口出しをしても、取り繕っているだけだと思われないだろうか。俺だって神官長だって、ちゃんと巫女として認めているのだと、どうやって言えば伝わるだろう。

「私はこれで失礼致します。ご神託は以上ですから」

悲しそうな顔の中には失望の色と涙が見える。

傷つけてしまった。俺の思慮が足りずに水竜のご神託を求めに来てしまったが為に、彼女の心に深い痛手を負わせてしまった。

「巫女様。ご不快な思いをさせ……」

立ち上がり部屋を出ようとした彼女に伝えようとした言葉は、すっと上げられた手によって遮られる。

何もかも圧倒するかのような雰囲気彼女から漂いだす。

それは今まで見たどんな彼女とも違う表情で、その瞳からは涙の色は見えない。

ここにはいない何かを見つめるかのような遠い瞳なのに、強い意志が内在しているようにも思える。

ふいに部屋の中に風が起る。

準備のいい神官が彼女の為に扉を開けたのかと目を凝らすけれど、

決してそんな事は無い。

一瞬目を離れたその隙に、彼女の瞳の色が見たことの無い色に変わっている。

- - 蒼。

「立ち去るがよい。その顔、当分見たくもない。立ち去れ」

誰の声だ。

確かに目の前の彼女から発せられている声なのに、違う。全く別人の声だ。

高くも無く低くも無い。女性のもんでも、男性のもんでもない。まるで変声期前の子供の声のような甲高さ。

ぞわっと全身に寒気がする。

本能的な恐怖に足が縫い付けられた。決して強い視線ではないのに、それを拒む事が出来ないような威圧感。これは彼女じゃない。

しかし理性がその言葉を形にする事を拒む。

そんな事は有り得ないんだ。

けれど冷や汗が止まらない。蛇に睨まれた蛙のように、視線を逸らすことも体をぴくりと動かす事も出来ない。

まさか、ルデアの言っていた……。

「君が望んで選んだ道だ。その責を他者に負わせるような言動は慎むといい」

俺から視線がずれ、神官長に向かって彼女が微笑みかける。

まるで聖母のような笑みなのに、どことなく冷たさが同居している。その理由を認めてしまうことを、心が拒絶している。彼女が彼女じゃないように見える理由、それは。

「すいりゆうさま？」

あどけない少女のような声で神官長が問いかける。

拒絶していた事実を、神官長が肯定してしまう。頼むから違うと言ってくれ。

ふわっと花の零れるような笑顔で、恋しい相手を見つめるかのような視線で、嬉しくて嬉しくてたまらないというのを神官長は全身

で表現している。

こんな顔、今まで俺は見たことが無かった。

神官長になる前に言われた「馬鹿げているとお思いになられるかもしれませんがけれど、わたくしは水竜様が恋しいのです」という言葉が事実であると、まざまざと見せ付けられる。

一生懸命、水竜であろうと認識した巫女相手に普段よりも幾分高い声ではしゃぎながら語りかける姿は、まさに恋をする少女そのものの。

神官長の豹変を見つめていると、ふいに視線を感じて再び巫女である彼女のほうへと目を向ける。

高貴なとしか表現しようのない雰囲気と、内から溢れ出る自信。

その全てが本来の彼女とは違う。

重なった視線が逸れる瞬間、彼女の口元が笑みを浮かべる。まるで嘲るように。

それを見て核心した。これは、彼女じゃない。と。

膝を折りたくなるのも、頭を垂れたくなるのも、彼女じゃないからだ。けれど、それを認めてしまいたくない。それに仮に彼女ではない生き物だとしても、俺がソレに平伏す事は許されない。

奥歯を噛み締め、睨みつけるように彼女の中にいるモノを見つめる。言葉を紡ぐ事は出来ずに。

「水竜様、こちらにおかけになって下さいな。わたくし沢山お話ししたいことがあるの」

神官長の声が急に脳裏に鮮明になって届いてくる。

「おやめなさい」

咄嗟にその手首を掴んで伸ばしかけた指を止める。

何故そうしなくてはならないのかわからないが、今の彼女に触れてはならない。本当に中身が水竜ならば尚更に。決して信仰心なんて持ち合わせてはいないけれど、畏れ多いと感じる本能が心の内から湧き上がっている。

制した俺の手から逃れるように腕を振り回し、身を擦る。

乱心と言ってもいいような豹変。これを止められるのは俺しかない。

神官長がここでただの「恋する女」に成り下がっては、今後の神殿運営にも関わるだろう。

いや、そうじゃない。こんな馬鹿馬鹿しい話、あるわけが無い。目の前にいるのは水竜なんかじゃない。ただの巫女だ。

なのに神官長はまっすぐに頬を染めて水竜だと思い込んだ相手への想いを隠しもせず、駄々を捏ね続ける。

「わたくしは水竜様とお話しがしたいのよ。誰も邪魔しないで！」
幻でも会いたいほどに？

入れ物が違っても、水竜であると願ってしまうほどに？

俺には見せなかった視線、態度。

そんなに必死になるほど会いたかったのか、水竜に。

落胆？ いや、違うな。けれど言いようの無い空しさで心が一杯になる。

「神官長様、どうぞおやめ下さい。あなたの目の前にいるのは水竜ではありません。あなたの目の前にいるのは、あなたがご神託を聴き次代の巫女に選ばれ、今は巫女であらせられる方です」

認めることは出来ない。

目の前にいるのは、俺が巫女にしたサーシャという名の村娘。

決して水竜なんかではない。

もし目の前にいるのが水竜そのものだとしたら、その命が奪われてしまうじゃないか。そんなのは嫌だ。受け入れられない。

それに憑依なんて奇跡、容易く起こるわけが無い。

「そうですよね、巫女様」

念を押すように、彼女に向き直る。

肯定してくれ。心の底から願わざるを得ない。それを認めてしまつたら、水竜の奇跡を目の当たりにしてしまつたら……。

蒼の視線とぶつかる。

じーっと値踏みするかのように静かに見据えるその瞳を見つめ返

すと、ふわつと彼女の目元が緩み、張り詰めていた空気が緩む。

「私に出来るのは、ただ水竜のお言葉を伝えるだけです」

彼女の声で、彼女の言葉で聴こえた言葉にほっとした瞬間、その体がゆっくり傾いていく。

「巫女様！」

数歩先の彼女へと手を伸ばし、その体を腕の中に受け止める。

どさりと倒れてきた彼女は意識が無いようだ。

「ササ……？ マジかよ」

全く開こうともしない硬く閉じられたまぶたに、暗い予感が胸を過ぎる。

ほんの数時間前の「憑依された人間は死ぬ事が多いそうですよ」というルデアの言葉が思い出され、冷え切った彼女の体をぎゅっと抱きしめる。

このまま奪われてしまうのか。この世でただ一人愛しいと思う彼女を。

嫌だ。そんな事は耐えられない。

ウィズと呼んで俺を真っ直ぐに見つめる瞳。たった一人、王子でも祭宮でもなく、ただのウィズとして俺を見してくれるのに。

一生するはずの無かった恋を、彼女が教えてくれたのに。

王冠よりも欲しいのに。

違う。憑依なんかじゃない。このままその命の灯火が消えたりなんかしない。

言葉もなく壁際で立ち尽くしている神官たちに声を掛ける。

「君たち、何をしている。早く医師を呼ぶんだ」

まるで抜け殻のように呆然としている神官長では話にならない。

適切な判断が出来るとも思えない。

俺が動かなかつたら、彼女が永遠に失われてしまう。

「何をしているんだ、早く！」

いつまで立っても動き出そうとしない神官たちに怒鳴り、腕の中の彼女に再び目を向ける。

冷たい体。青褪めた表情。紫色の唇。

その全てが死に直結するもののように思えてくる。

古い民族衣装でもある巫女の正装は薄く、細い肩や首筋が露になっている。これでは余計に体が冷えてしまう。

両腕で彼女を抱え上げ、先ほどまで座っていたソファに彼女の体

を横たえる。

床に落ちた外套を拾い上げて彼女に掛けようと思ったが、それもまた冷え切っていたので、上着を脱いで彼女に掛け、その上に外套を掛ける。

膝を折り、瞳を開かない彼女の両手を握り締める。冷たい感触が掌に伝わってくる。

頼むから死なないでくれ。

ばたばたと神官たちが部屋に雪崩れ込んでくる。慌てて入ってきた神官たちの中に、先の神官長付だった老神官もいる。

老神官と目があうと、老神官はこくりと頷き返す。

王宮にいた頃から神官長の主治医をしていた医師が彼女を診察する為に近付いてきたので、場所を譲って立ち上がる。

誰もが固唾を呑んで見つめている中、神官長だけが心ここにあらざる状態で椅子に座っている。その姿はまるで抜け殻のようだ。普段の凜とした神官長の姿も、恋する少女のような浮ついた様子もない。

付き従う神官が何か話しかけているけれど、まるで壊れた人形のように虚ろなままだ。巫女も心配だが、神官長も違う意味で心配だな。

再び彼女と医師のほうへと視線を戻すと、医師がこちらを振り返る。

「お命には別状は無いようです」

「では、ただ気を失っているだけなんだな」

「はい。さようでございます。ウィズラール殿下」

医師を信頼していないわけではないが、確認する為に膝を折って彼女の顔を見つめる。

先ほどは焦って確認する事も忘れていた規則正しい呼吸音が耳に届き、彼女の命に別状が無い事がわかったと、自然と頬が緩む。

少し乱れた髪と額、それから頬に触れると、冷え切った体に少し体温が戻ってきている事がわかる。

「きちんとお調べしたわけではありませんので、原因まではわかりかねますが、例えば高熱で倒れたというような類のものではなく、眠っている状態に近いかと」

「そうか」

良かったという言葉を飲み込んだ。

もう一度だけ彼女の髪を撫でてから立ち上がる。

目が覚めるまで傍にいたいと願っても、ここに俺がいて何か出来るわけではない。寧ろ俺が居る事によって、神官たちも動きにくいだろう。

祭宮はこの一室外、神殿内への立ち入りを禁じられている。

いつまでもこんなソファに彼女を寝かしておくわけにも行かない。離れがたい気持ちをひた隠し、神官たちに彼女を託して神殿を後にする。

その意識が戻れば連絡が来るだろう。もし異変があれば、それもまた連絡が来るだろう。何も無いことを信じるしかない。どうか無事であって欲しい。

あれが憑依なのかどうかはルデアの意見を求めてみればいいだろう。

認めたくは無いが、確かにあの瞬間目の前にいたのは水竜だったように思う。

もし本当に彼女に憑依したのだとしたら、その命が遠からず失われてしまう事になるのだろうか。その辺りもルデアに意見を仰ごう。それも問題だが、神官長の件も見過ごせない。

身体的に限界が近いというのは主治医からの報告で聞いていたが、あのような精神状態に陥っているとは思わなかった。

何らかの手段を講じ、神官長を一時期でも神殿から遠ざけたほうがいいのかもしれない。このままでは神殿内に混乱をもたらす恐れがありそうだ。

やはり本人が望んでいたとしても、巫女を辞めた直後に神官長になるという選択をすべきでは無かったな。

「これ以上ここにいても、皆さんのお邪魔になるだけでしょうから、わたくしはこれで失礼致します」

本当は目を覚ますまで傍にいたい。

このまま傍で見守りたい気持ちを振り切るように立ち上がり、神官長へと声を掛ける。

正気に戻っているといいのだがという願いを込めて。

「このお天気ですから、どうぞお気を付けてお帰りくださいませ」

こちらを一瞥しようともせず、棒読みの心の籠らない言葉に一瞬眉を顰めるが、溜息を押し殺してもう一度神官長へと話掛ける。

「では失礼致します。巫女様はこの国にとって大切な方。何かお変わりがあれば、ご連絡をいただけますか」

答えは無い。

一瞬、部屋の中がしーんと静まり返る。

聞こえているのか、俺の声は届いているのかと懸念したくなるほど、神官長の横顔は変わらない。

これは、ダメか。

「ええ。かしこまりました。私共が全力でお守り致しますから、どうぞご心配なきよう」

神官長の代わりに長老が答える。

神殿内で実質実権を握っているのはこの老神官だという報告を受けている。

任せても間違いないだろう。

逆に糸の切れた人形のようになってしまった神官長と比べ、きちんと巫女である彼女に今後適切な対応を取っていくに違いない。いや、そうあって欲しいと願わずにはいられない。

「頼みます」

俺の最も大切な女性を。

後ろ髪引かれる思いを断ち切るように、彼女を振り返らずに部屋を後にする。

もし振り返ってしまったら、もう一度この腕の中に抱きしめたく

なる。ちゃんと息をしているのか確認せずにはいられない。そして腕の中から離す事が出来なくなる。

目覚めるまでこの腕の中で、それが叶わないのならすぐ傍で見守っていたい。そうでなくては安心出来ない。

知ってしまった。

どうしようもなく彼女が愛しいのだと。

だから上手く祭宮の仮面が被れなくなってしまふ。

ここに居続ければ、祭宮ではなく「ウィズ」が彼女を求め続けてしまふから、王家の祭事を預かる直系王族に相応しい振る舞いをする事が出来なくなってしまう。

本当は不安で不安で仕方が無い。

ちゃんと目覚めますように。

その日、生まれて初めて水竜に祈った。彼女の命を奪わないで欲しいと。

このままとんぼ返りでは兵たちの負担になるのでと言い訳をし、水竜の神殿から数時間の距離にある祭宮の居城に逗留する事にする。水竜の神殿にいる事は出来なくても、せめて少しでも彼女の傍にいたかった。

そんな風に思ってしまうなんて、本当に恋ってヤツは。

けれど心配で胸は張り裂けそうだし、気がつくと溜息ばかりが零れ落ちる。

書類を前にしても内容が頭に入ってこない。その事に関してルデアに嫌味を言われるけれど、それもまた右から左へ聞き流してしまう。

彼女は大丈夫なのか。それだけで頭が一杯だ。

腕の中のとて軽くて細かった彼女の体が思い出される。そして同時に冷たく血の気の引いた体温も。

どうか……。

祈るような想いを打ち消す事なんて出来ない。その想いから逃れ

ることが出来ない。

コン。

無機質な音が突然頭に響く。

書類だらけだったはずの机の上に、グラスが一つ置かれている。

いつの間にか真つ暗になっていた部屋の中、瞬きをして周囲を見渡す。

今のはグラスを置いた音か？

首を傾げてグラスを眺めると、目の前にルデアの姿が浮かび上がる。

「ああ、ルデアか」

「ルデアかじゃありませんよ。そんなに熱心に読むほどその書類にご興味が？」

感情の籠らない声で呟き、ルデアがこほんと咳払いをする。

「酒でもどうです。この辺りはブドウ酒の名産地なんだそうですよ。せつかくだから飲みましょう」

両手に酒瓶とグラスを持って、ルデアが対面に置かれている椅子に腰を下ろす。

ポンという音を立てて酒瓶の口を開け、俺の前に置かれたグラスとルデアの前に置かれたグラスに真紅の酒が注がれていく。

ゆっくりと注ぎいれられるのを見つめながら、ふっと思う。

彼女の暮らしていた村も酒の名産地だと聞いていたな。彼女もこれを普段飲んでいたのだろうか。

「心ここにあらずですね。どうしました」

ルデアの声ではっと我に返る。

「ああ」

そう答えたものの、何をどう説明したらいいのか。事実をありのままに伝えれば、ルデアはきっとそれに対する自分なりの意見を述べてくれるだろう。けれど、それを口にするのは躊躇われた。

口にすれば、それを認めてしまう事になるような気がして。目の前で起きた奇跡を。

何も答えない俺の様子に肩をすくめ、ルデアはふうつと溜息を吐き捨てる。

「宝石の人と呼ばれる方。本当にあなたの青い石の片割れはあの白亜の城の貴人なのですか」

「ルデアのところに、報告はきているのだろう」

「ええ。知っていますよ。けれどあなたがお持ちになっている輝石と、貴人がお持ちの輝石が同じものなのは知りません。ただ、あなたが貴人に宝石を贈ったという事実は存じております」

さらつと言いのけ、ルデアはぐいつとグラスを傾ける。

肩肘をつき、窓の外を眺める。

見通しの良い場所にある城からは、水竜の神殿が良く見える。雪もやみ、宵闇の中で白くまるで輝くように鎮座している。

「今日だけは、あそこにいたかったな」

ぼろりと本音が漏れる。

誰に言うでも無く、ただ本心が零れ落ちた。そのような事は出来るはずもないと知っているのに。

聞こえているだろうけれど、ルデアは何も口を挟まず、淡々とグラスを傾ける。

長い長い沈黙。

何か言ったほうがいいのかもしれない。ルデアもそれを待っているのだと思う。けれど適切な言葉が浮かんでは来ない。

何を伝えたらいい。

この心の中にある想いなのか。それとも今日目の前で繰り広げられた光景なのか。

まぶたの裏には、はにかんだ彼女の笑顔と同時に威圧するような蒼の瞳が浮かぶ。そのどちらも彼女である。けれど決して同じものではないとわかっている。

そしてそれを認めてしまえばいいのだということも。

認めたくないのは、彼女が類稀な存在だという事ではなく、近い未来命が奪われてしまう可能性があるという事なのか。それとも水

竜に気圧されたという事実なのか。

両手で頭を抱え、ぎゅっと髪の毛を握り締める。

全然違う髪質。柔らかくてふわっと香水の香りが漂った長い髪。ものすごく鮮明に覚えているのはどうしてなのだろう。

この体の全てが彼女の形を覚えている。髪の一房さえも記憶している。

「ルデア」

顔を上げ、何も言おうともせず無表情に徹している部下であり友である相手に声を掛ける。

「何でしょう」

「秘密を共有してみる？」

「……ギーでは無く、俺が、ですか？」

細切れに区切りながら、しかしはつきりとした声でルデアが言う。四人の幼馴染の中で最も近い存在であるのはギー。それは自他共に認める事実である。だからルデアは俺の発言に疑問を持ったのだらう。

けれど、今、誰かに心中を吐露せずには居られなかった。

そして今日の出来事に関して言えば、最もそれを共有するのに相応しいのはルデアであると思う。

「別にギーだけが特別だって訳じゃない。お前だってスージだってライだって、皆俺にとって特別だよ。それに今日はルデアの知恵を借りたいんだ」

一部始終、なるべく主観は排して神殿での出来事を話すと、ルデアの顔が一気に陰しくなる。

途中で口を挟まずに聞き続けていたルデアは最後まで聞くと、短く「わかりました」とだけ答える。

「とりあえずは神殿からの報告を待ちましょう。本当に今の方が特別な才能をお持ちなのかどうか、影たちの意見も聞いてみたいですし、今、何かを即断する事は出来ません」

それと、と付け加えるように呟いたものの、ルデアは口を閉ざし

てしまう。

何か考え込むように宙を仰ぎ、ふーっと大きく息を吐き出す。知識豊富なルデアだけに、色々思うところもあるのだろう。

窓の外を眺める。

ここから見える水竜の神殿はとても近く見えるのに、とてもとても遠くて近付けない。

たった一人の祭宮なのに、俺は神殿に居る事さえ許されない。それが神殿開闢以来の不文律だという事はわかってるのに、どうしても求めてしまう。彼女の傍にいたいと。

彼女、ササは目覚めただろうか。命に別状は無いだろうか。体調不良などの異変は無いだろうか。

目を瞑ればまぶたの裏側には蒼の瞳。そして冷たくなった彼女の青褪めた横顔。

一分一秒が長く長く感じるほど、神殿からの報告を待ちわびている。大事無かったという報告を。

それは祭宮という公人の感情ではなく、カイ・ウィズラール個人の感情に寄るものだろう。

「今日の件、口外致しません。この情報が外に漏洩しても良い結果をもたらすとは思えません。もし憑依したのが事実でお命に別状が無いということになると、歴代の巫女の中でも傑出した人物である可能性があります。それを王太子殿下や將軍閣下が知った時、利用しようとなさるかもしれない」

「……ああ」

「けれど巫女はあなたの運命なのですから、お二人が手を出そうとも最後はあなたの元に紡がれるでしょう」

「どうだろうな」

未来は水竜にしかわからない。今回のことは既知の事実だったのか、それとも予想外の出来事だったのか。これも含めて運命なのか。唯人の俺には知る由もない。

一日の殆どを眠って過ごす彼女の傍で、日がな一日読書に明け暮れている。

こんなのにんびりと本を読む時間なんて今まで無かった。大昔に、少しは勉強してくださいとどやされた神殿史なんてものを読んでいる。

小難しい水竜の神殿史の序盤を読み終え、書庫番の司書お勧めのやたら口語体で書かれている日記のような書物に手を伸ばしかけたところで、娘がひよつこりと顔を出す。

「お父様、今、いい？」

「嫌だと言つても、お前は来るのだろう」

「ふふふつ。お見通しよね、お父様には」

全く怯む事も無く、娘は神官を従えて俺の前へと歩みを進め、円卓の空いた席に腰を下ろす。

「何読んでるの？」

「神殿史」

ふーんという興味無さそうな声が上がり、呆れたような溜息が娘の口から零れ落ちる。

「そんなの読んで面白い？」

「面白くは無いが、興味深いよ」

返答が気に入らなかつたのか、娘が肩を竦める。

円卓に乗せられていた茶器が下げられ、代わりに新しいお茶とお茶菓子が目の前に広げられる。どうやら娘の話し相手をしなくてはならないらしい。

読みかけの本に頬を挟んで、ポンつと手で本を軽く叩くように閉じて娘に目を向ける。

「どうした？」

「えー。そろそろ本当に毒殺未遂事件の事を教えて貰おうと思っているの。だってお父様はぐらかしてばかりで何も教えて下さらないのだから」

ふっと息が漏れる。

まだその事に拘っていたのか。

「別に何も面白い事実なんて無いよ。それに神官たちの評価がどん底だろうが全く気にならないから構わないよ」

本気でそう思っているのに、娘は気に入らないらしい。「もうっ」とと非難する声を上げ、王家の姫らしくもない仕草でカップを音を立ててソーサーに置く。

どうしてその一点に拘るのか、寧ろその方が疑問だった。

別に俺の評価がどうであろうと、娘や彼女の評価に響く事は無い。奇跡の巫女で二竜に仕えし巫女である彼女と、紅竜の紅を継ぐ王家の姫である娘。まして娘はその紅と彼女の娘であるという事実から、非常に敬われていると聞く。事実、娘の御付神官や彼女の御付たちも非常に恭しく娘には接している。

つまり、神官長である彼女の業務にも、これから神官長になる娘の業務にも、俺の悪評は全くもって支障をきたさない。それなのにどうして拘り続けるのだろう。

「知ってどうなる。別に何も面白い事実なんて無いが」

それもまた、事実である。

もしもあの瞬間をやり直せるのであれば、俺はあの決断を二度としたりはしない。しかし「もしも」は有り得ない。目の前にある事実だけが、積み重ねられてきた真実であり、その事実が覆ることはない。

あのターニングポイントで「もしも」違う選択をしていたら、運命はどのように転がっていったのだろう。

それともあの選択をしたこともまた、運命だったのだろうか。

「そうね。何も面白い事実なんて無いわ。でもとても興味深い何かがあるのではないの？ お父様」

先ほどの俺の台詞を使い、娘がにつこりと微笑みながら俺を射抜くように見つめる。

そんな真っ直ぐな娘に頭を振って、否と示す。

「いいや。何も無いよ。愚か者が誤った選択をした。ただそれだけのことだ」

「えっと……」

何かを言い淀み、娘は芝居がかった仕草で指を顎にあて小首を傾げる。

ついつと視線を眠っている彼女へと向ける。

倒れた彼女を抱きしめたのは、あれが二回目のことだった。一度目で失う怖さを知っていたのに、もう一度同じ事をしてしまったのだから愚か者としてしか表現しようが無い。

二つに分かれた石を渡した時の誰にも渡したくないという気持ちも、巫女になるうか悩んでいる時の支えたいという気持ちも、巫女になってから守ってやりたいと思った気持ちも、全部彼女を大切にしたいという想いから生まれていたのに。

その全てを打ち消すような真似が出来たのは、俺自身も切羽詰って「水竜」に「巫女」に縋りたかったのだと思う。

あの遠き日。それでいて、つい昨日のように思い出せる瞬間。あの時の肌のざわめきは、一生忘れることが出来ないだろう。

「ねえ、お父様」

「何だ」

小首を傾げたまま、娘は眉を顰めて問いかけてくる。

「あの日が奇跡の始まりだったのよね？」

娘が言うあの日とは、毒殺未遂事件の日のことを指し示しているのだろう。

「そうかもしれないな」

皮肉にも、後世へと語り継がれるような巫女の物語はあの瞬間から始まった。俺の浅はかな思いつきが、加速度的に世界を変えていった。

「お父様は奇跡を起こしたかったの？ お母様が奇跡の巫女と呼ばれるような人だったからこそ妃にしたのでしょうか」

「……そのどちらも違うよ。奇跡を起こしたかったわけではないし、彼女が巫女として素晴らしい人だったから妃にしたいと思ったわけではないよ」

「そうなんだ」

深く噛み締めるように呟き、娘はまたふうつと息を吐く。

「なーんかその辺りからお父様の意識と神殿側の意識の齟齬が生じているのよね。それに語り継がれる伝説の巫女とお母様の実像ってもののすごく乖離しているじゃない？」

「そこで俺に同意を求めるな」

くすくすつと娘が笑い声を上げ、眠ったままの彼女へ視線を向ける。

「伝説の巫女で鉄の神官長。なーんか本当にお母様って変な人」

「変？」

「ええ。変な人よ。今ここに生きていて目の前にいるのに、語られているのは赤の他人の事のように感じるわ。本当のお母様って一体どんな人だったのかしら」

それは慕情のようだ。

幼い日に母と別れ、業務上の関係として再び出会い、そして再び別れる。

娘だけが持つ複雑な感情があるのだろうけれど、どこまでも「母親像」を求め続けているように思える。

それを取り上げてしまったのは、俺にも責任のあることだから申し訳ない。

「本当がどんな人かって？ それはそこに居並ぶ神官たちが一番よく知っているさ。なあ、執事」

ロマンスグレーという言葉が良く似合う彼女の御付神官に声を掛けると、執事はほんの少しだけ口角を上げ目礼で応える。

一番の理解者である執事は黙って頭を下げるだけで、本当の彼女

のことについて口を開くつもりは無いようだ。

「そうだ、執事。助手。ずっと聞こうと思っていたのだが、彼女が神官長を辞めた後の身の振り方は既に決まっているのかな」

「……何で俺は飛ばすんですか」

文句を言いつつ睨み付けてくる片目には笑みで返す。

「お前は現状維持。それは決定事項だろう。フレッドもアンジェリンもそのつもりだろうしな」

「そうなんですか。紅姫様」

目を見開いて啞然とした表情の片目に、娘は鈴の音のようだと笑い声を上げる。

「どうせならここでも大道芸を披露して欲しいわ。それも考えておいてね」くすくすと笑っていたかと思うと、次の拍子には鋭い視線へと変わっている。

「あなたのことはお兄様が決めるわ。私には決定権は無いのよ。それにお父様はあなた以外を私に譲る気は無いのだから。ねえ、お父様」

まるで駆け引きをするかのような視線を投げかける娘に、微笑み返す。

俺が持つ複数の神殿内の影たち。それから神殿内で絶大な権力を振るっている神官長様の御付神官たち。

新たに神官長になるにあたって、娘はその全てを譲り受けたいようだ。

「自分の人生は自分で切り開くのだろう、アンジェリン。自分の力で切り開いていくといい。お前の母親がそうしたように、ね」

「お父様」

不満そうに頬を染めるアンジェリンを腕組みをして眺める。

恵まれているが故に、全ては「誰か」から与えられる事を当然とし、それを享受してきたアンジェリン。ここにいるべくしている存在であり、誰もが神官長としての娘を称え、敬愛するだろう。だが、それだけでは飾り物でしかない。いつかその事に娘は気がつくのだ

ろうか。

「望むものは自らの手で掴むものだよ。譲り受けるのではなく、欲しいものはその手で掴みに行きなさい。というわけで、話が逸れたが執事、助手」

強引に話を逸らし、娘から神官たちへと視線を移す。

二人の神官は表情を変えずに目礼するだけで、俺の言葉を待っているようだ。

「身の振り方をまだ決めていないのならば、彼女が望むのならば今後も傍にいてやって欲しい。お願いできないだろうか」

何を言われるのかはわかっていたのかもしれない。二人とも一切表情を変えず、室内には沈黙が漂う。

アンジェリンは二人がいなくなつては困るのだろう。眉根を寄せ、祈るような表情で二人を見つめている。

片目に見えるほうの瞳で、横目で二人の様子を伺っている。

娘の御付神官は、あんぐりとした表情で目を見開いて二人を見つめている。

ここを出る彼女と共にあるということ。それは神官を辞めるということに他ならない。優秀で次期長老候補でもある執事と、神殿内の医療を束ねる助手。共に神殿の中核を担う存在だけに、その答え次第では神殿が揺れることも想像に容易い。

先に口を開いたのは助手だ。

「神官長様のお体について俺以上に知る人間はいません。俺が断つたら祭宮様は神官長様をどなたに委ねるおつもりですか」

「それはこちらで手配するから、助手は気にしなくてもいいよ。幸い王都には人材も豊富だからね」

ぶつかる視線が、返答に不満があると伝えてくる。

助手はどこか彼女と似ている。感情が表に出やすくて、気が強いところだ。

「妃殿下を長生きさせたいのなら、俺が行くしかないでしょう。ただし給料は弾んで貰いますよ」

敢えて妃殿下と彼女を呼んだ助手の視線の先には、眠り続ける彼女がいる。

閉じられた瞳が開く事は無く、穏やかな眠りの中で見るのはどんな夢なのだろう。

「それで構わないんだな」

「ええ。紅姫様には大変申し訳ありませんが、一度この紅竜の神殿を出たあの日より主は唯一人と決めておりますから」

さらりと言いのけ、にっこりと娘に笑いかける。

さっぱりとして迷いのない意志の強い瞳は、己の意思を曲げることが無い事を表しているようだ。それに対してアンジェリンは肩を竦めるだけで、何も言おうとはしない。

「執事は」

問われた執事の口元にうつすらと笑みが浮かぶ。柔らかな視線、微笑み。普段見ることのない執事の表情に、ぎよっとしてしまふ。

それは俺だけではなかったようで、居並ぶ神官たちも目を見開いて執事を凝視する。

穏やかな表情の裏に、どんな感情が隠されているのだろう。いつもはそれさえも能面の中に隠してしまっているというのに。

「若い頃の話です。わたしは神官を辞めるつもりでした。そんなわたしに当時の神官長と長老は辞めるなとおっしゃいました。いつかまた必要とされる日がくるから、と」

遠い目は過去の情景に向けられているようだ。

しかし執事にこんな表情をさせられるのは、恐らく彼女以外にいないはずだ。彼女の片腕、腹心。影になり表になり、常に彼女と共にあり続けた執事。その執事が辞めたいと思った日があったとは。表情と発言が全く別の事柄のようだ。

「助手と同じです。わたしもまた、他の方にお仕えする意思が無かったのです。他の巫女には仕えたくは無かった」

「それは、今も変わらないのか」

ごくりと唾を飲み込む音が体の中に響く。

能面の中の本心が垣間見え、恐ろしいほど強い主従の絆を見せ付けられる。助手もそうだが、この執事の中にはどれほどまでの彼女への忠誠心があるというのだろう。

「ええ。一片の曇りもなく。ですがわたしは助手とは違い、外に出ても神官長様のお役には立てません。それと水竜の神殿の建て直しをやりかけのまま放り投げてきましたので、水竜の神殿に戻るつもりです」

「水竜の神殿？」

娘が執事に疑問を投げかけると、いつもの能面よりもずっと柔らかな表情で娘に頷き返す。

「紅竜の御世に、水竜の神殿？」

もう一度問いかけるアンジェリンへ、執事はゆっくりと「はい」と答える。

紅竜がこの世に現れ水竜が姿を消した後、水竜の神殿はひっそりとその存在を忘れられたかのように佇んでいる。

何故そこに執事が拘るのか、紅竜の御世に生まれ、紅を継ぐアンジェリンには理解しがたいのだろう。困惑が手に取るようにわかる。「ええ。わたしは今紅竜の神殿の神官ですが、元は水竜の神殿の神官ですから」

蒼き衣を身に纏った神官たちが列を成し、儀式用の第一正装に身を包んだ水竜の巫女の後に続いて礼拝堂に入ってくる。

蒼、青。

輝く眩い蒼き竜の像。そして黄金色に彩られた祭壇。何本もの光の帯に照らされた水竜の巫女。

今もまだあの日を覚えている。

俺でさえこんなに鮮明にあの頃を覚えているのだから、神官たちの胸中には更に強く水竜の神殿と水竜の巫女の姿が甦っているだろう。

そして、どこまでも広がる空の青のような蒼い瞳。誰もを魅入って止まない容貌と、そして心に残る印象深い声音。

あれを一度でも見たものならば、忘れる事は決して出来ないだろう。

彼女への忠誠を誓っていると執事は言うが、それは水竜への信仰心から続くもののように思える。

「蒼き竜。空を舞うことの出来ない、鎖に繋がれた大河の化身」

吟遊詩人たちが語る水竜の物語の中の一説をアンジェリンが呟く。

「紅き竜。大空を自由に飛び回る炎の化身。決して共生しない二色の竜。……そういうことね？ 執事」

「はい。申し訳ございません」

それで全てを納得したかのようにアンジェリンは頷く。

「ならば仕方が無いわ。でももしもお母様が執事に一緒にいて欲しいって言ったら、その時はどうするの？」

「答えは同じです。それで神官長様にはお判りいただけます」

よりいっそう執事の頬が緩む。

俺なんかが知らない彼女と執事の物語があるのだろう。そしてそれは主従の間に切れない絆になって繋がっている。

もしかしたら俺なんかよりも、ずっと執事のほうが彼女との絆が強いかもしれない。

そんな事を口にしたら「嫉妬？」と娘に笑われそうだが。

執事と彼女をよりいっそう結びつけたのもまた、俺が起こした不祥事から始まる運命だったのかもしれない。

先王の失態から、当時一人だった彼女の巫女付神官が増やされた。執事の他に、助手、片目、カカシ、熊、現長老でもある傭兵。今は亡き先代の長老。

運命の輪は回り続ける。

俺と彼女を中心に。周りを少しずつ巻き込んで。

「執事。お前にとってもあの日は特別だったのか？」

「あの日、と申しますと？」

「毒殺未遂事件の」

表情を曇らせ、執事が眉間に皺を寄せる。

ふつつと息を吐き、ゆつくりと言葉を選ぶように執事が口を開く。
「ここにいる誰にとっても、あの日の悪夢は忘れることは出来ない
かと思います」

「悪夢。そうだな、悪夢だな」

「はい」

同意したまま執事は口を閉ざし、他の神官たちも思い思いの思考
の中に入り込んでしまったようだ。

「けれどあれこそが奇跡の始まりだったのでは」

アンジェリンの御付神官が言いにくそうに、けれど少し甲高い声
を震わせながら訴えるが、神殿の幹部でもある神官長の御付神官た
ちに睨まれて俯いてしまう。

悪夢の始まりで、奇跡の始まり。

それはゆつくりと、しかし確実に「あの日」に向かって進行して
いった。

頭を抱え込む俺の頭上には、せせら笑うような声が降ってくる。珍しくスージの父親が所有する屋敷に呼ばれて何事かと思えば、兄貴からの伝言を伝える為だったとは。

内密の話があるとは言わず、たまには飲もうぜなんて声を掛けてきたから気軽に尋ねてみれば。

スージ自身が内務大臣配下で働いているというのもあるが、スージの父もまた長兄で王太子である兄貴の一派だ。

迂闊な返答も出来ずに溜息を吐くと、スージは楽しくて仕方が無いといった様子でケラケラ笑い声を上げる。

「本当に困るんだね。あんたがそんなに顔を見せるとは思ってもいなかったよ」

飄々と紫煙を燦らせながらスージが言う。

風貌通りの柔らかな口調なのに、どこことなく意地悪さが混在するような言葉に溜息しか出てこない。

どうしろっていうんだ。全く。

「即答しろと？」

「いいや。どうせ持ち帰りだろうと思ってたから別にいいや。上もそんなに急に答えを求めていないだろうしね」

コンッと音を立ててブランデー用のグラスを目の前に置く。

4人の幼馴染たちはそれぞれ酒の好みも違う。一口で酒に酔えるくせに、スージは度数の強い酒を好む。理由を聞いたら、何も考えずに眠れるからだと言う。

今日は話はおしまいで切り上げて、あっさりと床につくつもりだろうか。

と考えていたら、スージはグラスに水と氷を注ぎいれる。横に置かれた酒には手を伸ばさずに。俺のグラスにはなみなみと酒を注ぎいれてくれたが。

「神殿の中のことは、俺が何を言おうと何をしようとも恐らく覆らないぞ」

「そうだろうね」

氷水を口から流し込み、スージは顔色一つ変えずに視線だけを王宮のほうへと向ける。

煌々と燈る松明の灯によつて浮き上がるかのような王宮の姿は、宵闇に浮かぶ水竜の神殿のそれよりもずっと明るい。しかしどこと無く二つの建物の姿が重なる。

どちらも堅牢な迷路のような建物であり、周囲にその権威を誇示している。

「それでもあんたの両翼をもぎたいから水竜の神殿の後ろ盾が欲しいんだよ、上は」

「俺の？」

「そう。最も血が濃い上に、将来は水竜の巫女を妃に娶る。今だって祭宮として祭事においては権威を奮っている。ほーら、ここまで聞くと周りのオバカさんたちが焦るのがわかつてくるだろ？」

「あんまりわかりたくないな。くだらなくって」

溜息を吐くと、スージがふんつと鼻で笑う。

「あんた、そういうところがダメだよ。全部自分基準で。そういう風に考える人間もいるってわかれよ。そういう風に見られているんだって」

「スージ？」

スージはどこと無くイライラとしている。さらに珍しいことに直情的だ。

身分なんて幼すぎてわからない頃からの付き合いだけあって、ギームルデアもスージもライも本当に俺に対して容赦が無い。それはいつも通りなのだけど、何か違和感を感じる。

余裕綽々の優男として、女性たちに甘い言葉を囁いて誘惑しまくる普段の姿の片鱗は全く無い。

独特の物腰の柔らかさも無く、ピリピリと張り詰めたものを感じ

る。

「何でわかうとしない。それじゃいつまで経っても覚悟の足りない第三王子のままじゃないか」

「ならスージは俺に何を求めているんだ」

「何をだつて？ 何故わからない。どうしてわからないんだ」

ぐいつと胸元を掴まれ至近距離で睨まれる。

こんな態度を取るなんて、スージらしくない。乱暴な行為をされているという事実よりも、スージを追い立てる何かのほうに気になって、憤りの感情は沸いてこない。

ぶつかりあう視線。

イライラとした表情のスージの睨むような視線と、眉間に皺を寄せた俺の視線。

絡み合った視線がゆつくりとほどけていくのと同時に、スージの握り締めた手からも力が抜けていく。

「きつと未来永劫、わからないんだな、あんたは」

諦めの言葉に対し、ふつと息を吐く。

「自己完結してないで、思うところがあるなら言ったらどうだ」

スージはふふつと乾いた笑みを浮かべる。

「じゃあ聞くよ。あんたが守りたいのは何だ。祭宮の地位か。第三王子としての地位か。それとも水竜の神殿か」

「……その、どれでもないな」

指を顎に掛けて考える。守りたいものなんて、無い。

「もつと子供の頃は王冠が欲しかった時もあるな。だけれど今はそれを欲しいとは思わない。だから第三王子としての地位を守りたいとは思っていない」

「……ふーん？」

「元々俺は、父王に厄介払いをされて玉座から遠ざけるために祭宮を与えられたのだと思っている。だからそこまで祭宮にも水竜の神殿にも思い入れは無い」

こくりと頷いてスージが話の続きを促す。

「だから傍から見るともどかしく見える部分もあるだろうし、疑心を抱かれかねない部分がある事もわかっている。だからといって、動く事が得策だとも思えない」

「あんたが取っている一連の行動は、水竜の神殿に頻繁に通って神殿を後ろ盾にしているように思えるけど」

息を大きく吸い込み、それからゆっくりと吐き出す。

「ああ、そう見られるかもしれないね。けれど父王はそうは思っていないよ。俺が水竜の神殿を訪れるのは、全て父王の意思なんだから」

「……どういうことだ」

「水竜の後ろ盾を求めているのは俺じゃなくて父王ということだよ」

決して愚鈍ではないスージのことだ。これだけで十分に真意は伝わったと思う。

黙り込んでしまったので、目の前のグラスに手を伸ばし、ちびちびと酒を口に含む。

兄からの、婚約者を譲れという伝言。

こればかりは譲るとか譲らないとか、俺が個人的に決められる事では無いだろう。そもそも姫が首を縦に振るとは思えない。

水竜に心を捕らわれて、永遠にあの迷宮の中から出てこようとは思えないだろう。

大体俺だつてもものすごく邪険に扱われているというのに、兄貴が出張ってきたところで姫が快い回答をするはずがない。自惚れではなく、少なくとも兄貴よりは俺のほうがまだ好意を持たれている女性にだらしない一面を持つ兄貴のことを、姫が鼻白んでいたのを知っている。

巫女に選ばれる器が生来備え付けられていたしか思えないほど、姫は潔癖なところがある。

他を寄せ付けない清廉さと、併せ持つ美貌。

確かに兄貴が横に並んで欲しいと願うのはわからなくはない。

「お飾りの人形が欲しいのならば、他のかつて巫女だった女性を探してきたほうが手っ取り早い気がするけれど、権威主義の兄貴はそんな事はしないだろうな」

「国王の正妃になるんだ。例え巫女であつたとしても、どここの馬の骨かもわからぬような女では務まらないだろ」

「そうか？ では始まりの巫女は建国王の正妃としては不適格だな」
どここの生まれでどのような育ちの女性だったのか、始まりの巫女の事は謎に包まれている。一体どんな女性だったのか。

それでも建国王は始まりの巫女を正妃に迎え、二人の血が俺の中に脈々と流れている。二人の血を継いでいるから、正統な建国王の直系だからこそ「カイ」を名乗ることを許されている。

一番最初の根源の「カイ」が選んだのは、どここの馬の骨かもわからない竜の声が聴こえた女性。

それでもその女性はこの国において最も敬われている一人である。氏素性などわからなくとも。

「始まりの巫女のような女性ならばな。姫より以前に、そのように素晴らしい巫女がいたのか？」

「さあな」

「おい、さあなつてどういうことだ。あんた祭宮だろうに」

呆れ顔のスージにくすりと笑い声を漏らす。

「俺だつて数年前に祭宮になったばかりだ。元来保守性の高い情報である巫女に関する事など新参者がわかるわけもないだろ。大体先代が亡くなったから俺が指名されたわけだし」

「まあ、そうかもしれないが」

溜息交じりに語るスージの声のトーンは少しばかり通常のものに近くなつたようだ。

激昂するほどの何かが俺の答えにはあつたのだろうか。そこまでスージに余裕をなくすほどの何かが。それが、わからない。

「それはどうでもいい。結局殿下は姫しか求めていないんだよ。それとも代わりに今の巫女を差し出すか」

「それこそ無理だろう。どうやったって今の巫女は渡せない。水竜も決して手放そうとはしないだろうしな」

「だよな」

目を瞑り、スージは物思いに浸るかのような表情を浮かべる。

何も語りだそうとはしないスージを横目で見つつ、ちびちびと酒を口に運ぶ。度数の強い酒のたゆたう表面を見つめていたら、ふと水竜の神殿の揺らぐ松明の光を思い出す。

あれからどうなったのだろう。思い浮かべるのは今の巫女である彼女のこと。

翌日には目を覚まし、特にこれといった変調は見られないという報告は受けたが、その後の彼女の動向が一切掴めない。

冬場という事もあるのだが、いつも以上に神殿からの情報が入ってこない。便りがないのが良い知らせなどと言う者もいるが、無ければ無いで不安になる。

彼女の瞳が蒼に変わった意味。それは恐らく「類稀な」と呼ばれる一部の巫女しか出来ない事を成し遂げたとういう事に相違ないだろうとルデアは言う。それに関する情報を更に集めてみると言うてから、ルデアは口を噤んだままだ。

今頃何をしているのだろう。

どうせ雪が溶けるまでは彼女には会えない。

そもそも俺と彼女の間に、何か特別なものがあるわけでもない。だから業務以上に接する事も一切無い。個人的に文をしたためるなんて事、有り得ない。

それなのに会いたいと思う。顔が見たい。元気にやっているのかこの目で確かめたい。

笑って欲しい。いつものようなはにかんだ微笑みを見せて欲しい。

「あんたさ」

ふいにスージが切り出す。

ゆっくりと視線をグラスからはずし、スージの顔を見つめる。

「やっぱり宝石の人は姫なの？」

「何故そう思うんだ」

問い返すとスージはふつと鼻で笑う。

「やっぱり違うんだな。あんた気付いてる？ 姫を妃に迎えたいという上の意向を伝えた時、頭を抱えるだけで拒絶はしなかったこと」

「それは俺個人が決められる問題じゃないからで」

「違うよ。あんたは姫を愛していない。ただそれだけのことだ」

言い返す言葉が無い。

今だってずつと考えていたのは、姫じゃないほかの女性のこと。

話題が姫の事だったというのに。

凶星を突かれたが、だからといってここで「はい。そうです」なんて言ってしまったら、今後の姫のお立場にも関わる。少なくとも今の地位を守りたいと思っっている姫の意志を、俺の失策どころが失言で危うくするわけにはいかない。

「愛している、か。じゃあスージはそんな恋をしたことがあるのか？ 俺たちに打算以外の女性関係が許されるとでも？」

スージはゆっくりと首を横に振る。

それは恋をしたことがないということと、より自分の立場を優位にする女性以外は娶る価値がないということを認めたのだろう。

ギーもそうだし、スージだってルデアだってライだって皆婚約者はいる。だけれど望んでその女性を婚約者にしたわけではない。それぞれの事情がそうさせただけでしかない。

所詮王族だとか貴族だとかっていうのは、個人的感情なんて二の次だ。

正式な夫なり妻なりは血筋などを考慮して選ぶ。もし欲しいと思うような相手がいるならば、愛人にすればいいだけのこと。周囲を見渡しても、そうやって婚姻の体裁を整えているものが大半だ。

「俺は俺の立場だけでは姫のことを決められない。元々親同士が決めた事でもあるしね。姫の意向もあるし、神殿の事情もある。俺がここで即答すべき問題ではないと思うよ」

「けれどその宝石の半分を誰かに渡したのだろう」

「ああ。渡したよ」

「その女性は愛しているんじゃないのか」

「さあ」

自然と口元が緩む。けれどそれは心からの笑みではない。

誰にも気取らせてはならない。それは彼女をこの騒動に巻き込む事になりかねない。もっとも、彼女がああ堅牢な神殿の奥深くで守られている限り、誰も手出しなんて出来やしないが。

その立場と類稀な能力。そして俺の執着。

それがバレたら、間違いなく兄貴の興味を惹くだろう。それだけは避けたい。

「さあって何だよ」

苦笑を浮かべつつ、スージが殆ど氷しか残らないグラスに酒を注ぎいれる。どうやら思考することを諦めたようだ。

「俺はさ、守ってもいいよ、その女。あんたがそれを望むならね」

「それはどうも」

「どうもじゃねえ。本気だよ。だからいつでも言ってくれ、ウィズルール」

誰も呼ばなくなった古い名で呼んだのは、スージの本心からの訴えだからなのかもしれない。

けれどそう言ってくれるスージにも本当のことは明かす気は無い。スージが兄貴の一派の人間だというのも理由の一つではあるけれど、例えギーだとしても彼女のことを自ら口に出したりはしないだろう。

本当に何にも王宮とは関係ない彼女を、変な形で騒動に巻き込またくない。

ぐいっと酒を煽ったスージは、数分後には意味のわからない事を言い出して、追い払われるようにスージの父の屋敷を後にする。

門を出たところに、ギーが不機嫌そうな顔で立っている。

「あれ、どうしてこんなところにいるんだ」

「こんなご時世に一人で出歩かせるわけにはいかないでしょう」

外套の高い襟の隙間からギーの重低音が響いてくる。

雪のちらつく街の中、スージが用意してくれた馬車は断つて二人で肩を並べて歩く。

「悪いな。いつも気を使わせて」

「そう思うなら最初から一人で出かけないで下さい」

ふつと鼻で笑うと、ギーの視線が更に険しくなる。

「別にスージのところならいいだろう」

「駄目です。例え誰のところであろうとも、お一人で行くのはおやめ下さい」

「……やっぱり駄目か」

「当たり前です」

言いつつギーが肩を竦める。言いたい小言が山のようにあるのだろう。頭の中でどの小言を言おうか吟味している最中なのかもしれない。

雪の舞い散る中、天候のせいかいつもより少ない酔客たちがすれ違っていく。

ふいに、急に酒を煽って口を噤んでしまったスージのことを思い出す。本当はもっと何か言いたいことがあったのではないのだろうか。

伝言だけならば、わざわざ屋敷に呼ばなくとも出来たはずだ。

スージはスージなりに何かを伝えたかったのか、それとも何かを知りたかったのか。

そして今ここにギーがいるということは、ギーはスージにそれなりの警戒心を抱いているという事の表れなのかもしれない。

そんな風に少しずつ互いの思惑を伺わなくてはいけない時がくるなんて、幼かった頃には想像すらしていなかった。

永遠に四人とは友情を育んでいけるものだ、信じて疑わなかった。

結局思い通りのご神託が降りなかった事を、父王はどのように思っただろう。

年明けに結果をお伝えして以来、お召しが無い。

それはそれで気になってはいるのだが、それ以上に今は厄介な問題を抱え込んでいる。

婚約者である姫を兄貴へ譲るかどうか。否を言う事は簡単だ。実際に正式な手続きを踏んで婚約をしているわけだし、兄貴の横槍が入ろうが簡単に破談になるような関係でもない。

従妹でもある姫は、叔父の一人娘で、生まれたその日から俺の婚約者と決まっていた。

両親共に王族である俺と、父の弟の娘である姫とはものすごく血が近い関係だが、昔からこのような婚姻は珍しくは無かったのだ。たしいた問題ではない。

まあそれを言ってしまうえば、兄貴と姫も従兄妹同士ということになるが。

より濃い「カイ」の血を継承していく為、王族内での婚姻は幾度となく繰り返されている。もっとも俺みたいに近親結婚の繰り返しみたいなのは珍しいかもしれないが。

カイの血の濃さと、巫女の血の濃さ。

その二つを併せ持つ事を王族は求められている。より多くの巫女を王族から輩出するために。

しかしその思惑はあまり上手くいっておらず、この五十年の間、二人の巫女しか王族からは輩出していない。それも二人とも子を為していない。

姫の場合は、まだ巫女の任期を終えたばかりで、尚且つ現在も神官長として神殿に留まっているので不可能ということになるが、先代の神官長だった方も、結局未婚を貫き通している。

既に老婆と呼ばれるに相応しい年齢に達し、今更誰も老巫女を娶ろうなどとは思ってはいないようだ。

王と竜。

二人（一人と一頭が正しいか）の最高権力者。

竜の代弁者たる巫女は、王と肩を並べるほどの影響力を持つ。

王族で巫女だった姫を兄貴が欲しがるのも、わからなくはない。
だが……。

「殿下はどうなさりたいのですか」

ルデアに問われた言葉が胸に突き刺さる。俺がどうしたいか、か。恐らく姫こそが俺の意中の相手である「宝石の人」だと思って、兄貴も揺さぶりを掛けてきたのだろう。姫の全てが、権力欲に捕らわれた兄貴にとって魅力的だということもあるのだろうが。

答えは出ているようで、出ていない。

考えるのだが、どうしてもこれだという答えに巡り合えない。

俺は、どうしたいんだ。

姫を渡すのか。渡さないのか。答えはその二つのいずれかなのに、どうしても答えが出ない。

いつものように執務室で書類をパラパラと捲りながら読んでいると、コンコンと扉を叩く音が部屋に響く。

来客など珍しい。

ギーに目配せをすると扉の傍に脇の短剣に手を添えながら立ち、侍女がそそくさと扉の前まで移動していく。

「どちら様でしょうか」

「北からの伝令にございます」

どう致しましょうかといったような表情を浮かべる女官に、ルデアがこくりと首を縦に振る。

北というのは神殿の隠語。しかし使うのは内偵のものに限られている。そういった人間が表立ってこの部屋を訪ねるなど、普段は無い事だ。

ルデアの部下であるその男を招きいれると、恐らく雪で濡れたのであるうフードを小脇に抱え、神妙な面持ちで入口の傍に立ち尽くしている。

「こちらへ」

ルデアの誘導により、執務用の机に座る俺の前で男が最敬礼をする。

「お忙しいところ、大変申し訳ございません」

「いや。特に立て込んでいないから気にしないでいいよ」

がちがちに固まる男に、もしや神殿に大事でもあったのではないかと緊張感が走る。

筆まめな神官長からの文にはこれといった報告は無かったが。しかしこのように表に出るはずのない男が出てくるなど、何かあったとは思えない。

口を閉ざしたまま開かない男の様子に、ふうつと溜息を一つ吐く。「ギー、ルデア。この客人のもてなしを頼む。他の者はちょうどお茶の時間だから休憩してきていいよ」

侍女や官吏の者たちに声を掛けると、人払いだという事はわかったのだらう。うやうやしく頭を下げて人が捌けていく。

その間も男は直立不動を崩さず、表情一つ変えないまま、俺とは目を合わせず俺の後ろにある窓の向こう側を見続けている。

ギーは全員が部屋から出ると扉の鍵を閉め、俺の右にギー、左にルデアが立って男と対峙する。

「ごくりと唾を飲み込んだかのように、男の喉仏が上下する。

「さて、何があつたのか聞かせて貰おうかな」

執務用の机の上に両肘をついて顎の下で両手を組む。

男を見上げるような形になり、よくよく顔を見ると髭すら剃られていないことに気がつく。

よっぽどのがあつて、慌てて来たとは思えない。身だしなみに気を配る時間も無かつたのだらう。

「中の者からの伝言です」

「何があつたのかな」

努めて冷静に、なるべく余裕を崩さずに男の顔を見上げる。口角を引き上げ、意識して笑みの表情を作り出す。

ルデアもギーも一言も口を開かず、直立不動のまま微動だにしない。こういったところは軍隊で鍛えられているだけのことはある。ただ立つという動作だけで、相手に威圧感を与えることが可能だ。

こほんと咳払いをしたというよりは、裏返った声を直す為に幾度か咳き込んでから、男が口を開く。

「こちらを」

懷から丸められた書簡を取り出し、目の前に差し出す。

それをルデアが受け取って内容に目を通し、ふうつと息を吐き出す。

「書にしたためるとは、無用心ですね。次からはこのような物は現地で焼却処分なりなんなりして下さい」

「申し訳ありません」

がばつと頭を下げる男をそれ以上咎めるでもなく、ルデアが目の前に書簡を差し出す。

それを受け取って内容に目を通し、反対側のギーにも手渡す。

ギーが読み終えたところで、部屋の片隅にある暖炉の中にその書簡は投げ入れられる。ポつという音を立てて、書簡は跡形も無く消え去るのを確認し、それから男に目を移す。

「それで、どうなんです。ご容態は」

ルデアが問いかけると、男は身を小さくしてぼそとした声で話し出す。

「給仕を勤める人間からの情報ですと、完全に病人食をお召し上がりになれていると言いますし、召し上がる量もかなり少なく、お体の調子が悪い事は間違いないかと思えます」

「それはそうでしょうね。高熱を出して倒れた人間がもりもり食べるわけがありませんからね」

いちいち毒の籠った返答をするので、男の目は完全にきよろきよ

ろとせわしく動きだして焦りが表れている。

自分の放っている影の一人の動きが存外に悪く、ルデアは完全に機嫌を損ねたのだろう。

この部屋を訪ねてきた瞬間から、わざわざこのような場所までやってくるなんてとても言いたげだ。

「で、あなたが持っている情報はそれでおしまいですか」

下賤の者を見下すかのような視線を男に向け、ルデアはきつい口調で問いただす。

雇い主であるルデアにそのように見られたのでは、男も閉口せざるを得ないだろう。と、思っていたのだが。

「いいえ。今回の一連の出来事が姫派にのみ伝えられ、お嬢派には何も伝えられていないようです」

ふーっとルデアが溜息を吐き出す。

「そうですか。とうとう確執が表面化してきましたか。まあ知ったところでお嬢には何も出来ないでしょうけれどね」

姫にお嬢。それは神殿内で使われている隠語。

神殿内では個人の過去に関する全てが俗世に通じるとし、名前さえも使用する事を禁じられている。神殿に入ったその日から生まれ変わったのだと、神殿内では神官たちに教育を施すらしい。

その為、全員が本名の代わりの通り名で呼ばれるようになっていく。さすがに女官と神官合わせて数百人もいると、各個人を指し示す「名」が無くては不便なようだ。

そして今、神官長は姫、巫女はお嬢と呼ばれている。また、それぞれを支持する派閥が出来ており、姫派、お嬢派と呼ばれている。

今回の神殿流に言うのなら姫の体調不良は、お嬢派には伝わってはいない。つまるところ、対立がかなり色濃くなっており、派閥同士が互いに距離を置くようになっていくということだろう。

本来そういった事態を諫める立場にある姫は、そのことに関しては無頓着のようだ。というよりは、姫自身がお嬢を疎んでいる雰囲気周囲の神官たちが感じており、神官たちの不仲に発展したよう

だ。

お嬢、即ち巫女がこの事態を収めることは事実上不可能だろう。彼女がこの事態に気付いているとは思えないし、そもそも巫女は神官たちを統治する立場には無い。巫女とは全てを超越した、神である水竜の代弁者なのだから。俗っぽい神官たちのごたごたなど、関知するわけもない。

更に現在の巫女である「お嬢」はその立場が非常に弱いと聞いている。端的に言うと、カリスマ性に欠けるといったところだろう。カリスマ性だけで比べるのならば、先の巫女である神官長「姫」のほうが他者を魅了するものを持っている。

起きるべくして起きた問題、か。

かといって、組織外部の人間である祭宮が神官たちの事に口を挟めるわけもない。

ふうつと溜息を吐くと、ルデアの視線が止まる。ちらつと俺の方をみただけで、相変わらず腕組みをしたまま男に厳しい視線を投げかける。

「で、そのようなことを伝える為に、わざわざここへ来たと？」

「……いいえ。どちらかと言うと、体調不良に伴う精神的な不安定さが問題になっております」

「精神的な不安定さ。また随分と直接的なようで抽象的な発言ですね。具体的に説明してください」

きよろきよろと視線を彷徨わせ、落ち着きのない様子で周囲を窺い、そつと男は自らの懷に手を忍ばせる。

その動作にギーの体に緊張が走り、ルデアの表情がよりいっそう陰しくなる。

このような、正直言って報告にも値しないような事柄でこちらに立ち寄ったということは、いずれかの勢力にこの男が買収されたか。疑いを色濃くし、男の一挙手一投足から目を離さないように、瞬きさえもせずに見つめていると、懷からは小さく折りたたまれた紙が取り出される。

少々拍子抜けしたような表情を浮かべたギーとは対照的に、ルデアは目を見開いてそれを見つめる。

男の手の中の紙と、それから男の顔を何度も交互に見、ルデアは手の中にその紙の包みを受け取り、鼻先にそれを近づける。

「これは」

「はい。ご想像の通りです」

男の言葉に、ルデアがふうつと息を吐いてから、ギーにその手の中の物を手渡す。

受け取ったギーが同じように鼻先にそれを近づけてから顔をしかめる。深く刻まれた眉間の皺と深い溜息の後には長い沈黙が続く。

ギーとルデア。二人の視線が交差して、そして同時に俺の上へと降り注がれる。

二人が互いに視線で会話をし、そして意を決したようにルデアが口を開く。

「下がっていいですよ。後ほど私の屋敷に寄って下さい」

「畏まりました」

男は腰から折れ曲がるような最敬礼をし、暗い表情のまま部屋を後にする。

これ以上あの男からの報告は無いと判断したのだろう。

パタンと扉が閉まった後、ギーが机の上に例の紙の包みを置く。

「どうぞ、ご確認を」

目の前に置かれたそれに手を伸ばし、二人がしていたかのように鼻先に近づけると、ふわっと甘ったるいチョコレートのような臭いが鼻の奥に広がっていく。

それに、思い当たるものがある。

「……ルデア」

「はい」

「一体どんな状況でこれを使ったんだ。姫は」

「わかりません。想像する事は可能ですが」

確かにルデアの言うとおりだ。

この小さな紙片に包まれたものをどのように使ったかなど、ルデアがわかるはずも無い。けれど問わずにはいらなかった。

渋い顔は、ルデアの苦悩をそのまま表しているかのようだ。

ギーがごくりと唾を飲み込み、やはり険しい表情でルデアを見つめている。

「どうして幻覚を見る必要があるのか。それがわかりません。ただ一つ言えるのは、非常に精神的に不安定な状況にあり、医師が何らかの意図を持って投薬代わりに使用している可能性があるという事だけです。快樂の為に使用なさるような方ではないでしょうから」「変調をきたしているのは、肉体的にというより精神的にと見たほうが良いということだな」

「おっしゃるとおりです。しかし常習性が無いとはいえ、このようなものを使用し続ければ何らかの不利益が高じないとは言えません。早急な対応を取る必要があるかと思われます」

机の上に置かれたそれに手を伸ばす。

そこまで追い詰められているのか。一体何に。何故俺には一言も相談も報告も無いんだ。

今更ながらに互いの距離感を意識せざるを得ない。形だけの婚約者だとしても、互いに業務上だけの付き合いだとしても、何故その心中を吐露してはくれなかったのか。

全く気がつかなかった。その事にも苛立ちが募る。

俺は一体何を見ていた。表面だけしか見ていなかったから、姫の心の中を見ようとしてもしていなかった。聞こうとしてもしていなかった。

周囲にその心の内を漏らせる相手などいないのに。俺以外の誰も、姫と対等に話をする事なんて出来なかったのに。何故美辞麗句や表面をさらうような世間話だけに終始して。

本当に、俺は愚かだ。

「どのような対策を講じるのが良いと思う」

問いかけられたルデアは首を左右に振る。

「わかりません。どうしてこのようなものに姫が頼らなくてはなら

なくなつたのか、全くわかりません。あのように高貴な精神をお持ちの方が、何故」

続ける言葉を失ってしまったルデアは暗い表情を浮かべる。

誰よりも気高く美しく高貴な精神を持つ、王家に名を連ねる姫。

巫女であり、今は水竜の神殿を収める長。

何がどこで狂つたのだらう。

「問題の本質を見極め、そこから距離を置くように提案する以外に方法は無いだらうな」

呟くと、ギーが頷く。ルデアはまだ顎に手を掛けたまま何か考えを巡らせているようだ。

ただの体調不良ならば、臨時の医師を派遣したり薬を運ばせたりすれば済む話だが、幻覚を見せるような薬に頼らざるを得ない精神状態に陥っているとするならば、安易な対応は姫を苛立たせてしまふだけだろう。

冬になる前から体調が良くないことは姫の主治医から報告を受けていたが、体調不良に伴う精神不安なのか、それとも。

ふいに、ある光景が頭を過ぎる。

思わず息を吞んで、意識せず背筋が伸びる。

「すいりゅうさま」

頭の中で甘つたるい声が響き、あの日の光景が蘇る。

瞳の色が蒼に変わった巫女に話しかけた神官長。あの時に見たのは、もしかしたら狂気の片鱗だったのか。

いや、あれを狂気と呼ぶのはおかしいかもしれない。

それが「真実」ならば、姫の問いかけは間違っていないかつたのだから。だとすると、幻覚でも見たいのは「愛しい水竜の姿」なのか。そんなに思いつめていたのか。そんなにも巫女であり続けたかつたのか。

だとしたら、俺に何が出来る。どうすれば、姫を救う事が出来る。本当の狂気の淵に落ちてしまわないように、手を差し伸べなくては。

姫の状態が気になり姫本人にも主治医にもそれとなく確認する文を送ったが、共に額面どおりの答えが返ってくるだけで、現状が把握できずに王都でもややもやとした気持ちを持て余している。

あんな薬とも毒ともいえないようなものを姫が使わざるを得ないというのは、一体どういうことなのか。

そもそも、それを使うことを本人が希望しているのか。

外の人間であり、物理的にも距離があるので、どうにも確かめようがない。

だからといって今神殿に赴く事は、王宮内の権力抗争が激化しているので、避けたほうが得策だろう。

ギーヤルデアに言われたからというわけではなく、実際はかなり当たりが強くなってきているのを感じる。

俺のことを次々王として推してくれている者たちからは突き上げが強くなり、王太子に公式に指名された兄貴の一派からは兄貴の立場を揺るがす気ではないかと警戒の目で見られることが増えた。

例え、個人的に一人一人に「そのようなつもりはない」と言って回ったとしても、今の混乱が解決出来とは思えない。

多かれ少なかれ、誰もが権力欲に捕らわれて動いている。

人の心の醜さというのを感じざるを得ないが、それこそが俗世の中にあつて「伏魔殿」と呼ばれることさえある王宮の醜い側面の一つだろう。

そういうことを口にする、ギーなどは鼻で笑って「すっかり他人事ですね」と呆れ顔を見せる。

誰にも、例えギーヤルデアに対しても漏らす気はないが、第三王子として生まれ何一つ不自由する事も無く、望むものは全て手に入る事が出来る生活をしているせいだと思いが、何かを強く切望することが無い。

これが欲しいとか、あれが欲しいとか。

それは例えば服ひとつ、食べ物一つとってもそうだし、王冠だってそうだ。

自分にとって欲しいものは何も無い。どうしてもそれが無くてはならないと思うような、心を強く揺すぶられるような魅力的なものは何一つ無い。

ある意味では欲に乏しい人間なのだろう。

実際過去にライにそのようなことを言われたことがある。

のんびりとして怒るとか大笑いするとか、とにかく烈しい感情を表す事の無いスージから見ても、俺はどこか歪んでいるようだ。

悔しいとか思わないのですか。

そう言ったのはルデアだった。

軍に所属していた時、兄上の大將軍に対して小將軍と揶揄されていると知った時、俺よりもずっとルデアやギーが立腹した。けれど、俺はそう言われても仕方ないなという程度にしか思わなかった。

兄上は素晴らしい人間だから、俺が兄と肩を並べていることさえおこがましい。

それを卑屈だと言ったのはギー。

悔しいと思うなら、そう口にすればよいのにとルデアも同調していた。

けれど事実は事実なのだから、それはそれで仕方ないだろうとは思えない。剣の腕も、戦略も、兄上には一つとして叶わなかったのだから。

あんたって何を言われても、平気な顔してんだね。そう言ったのはスージ。

いつだっただろう。何かきっかけがあったのだと思うけれど、スージと口論した事があった。その時に言われたその言葉だけがやけに頭に残っている。

口先だけの愛の言葉はいりませんわ。

まだ姫が王宮にいた頃、そんな事を言われた事がある。

いいえ、心からの言葉ですよと答えたら、ふふつと笑うだけで姫は何も答えなかった。

王冠一つ、名声一つ、女一人、心から欲した事は無い。
今更それは変わらない。

王冠を欲しいと思っていたこともある。幼い頃、兄貴や兄上と比べられるのが嫌で、そういう奴等を黙らせる為の手段として王冠が欲しかった。

けれど王になって何がしたいからといった目的を持っていたわけではない。

漠然と一番が欲しかっただけで、いざそれを目の前に差し出されると、その責任の重みから逃げ出したい気持ちで一杯になる。

ずるいかもしれないという事はわかつている。

それでも中途半端な第三王子で祭宮という立場のぬるま湯な心地よさから、自主的に抜けるつもりは無い。

火種を自分から作ることも避けたい。

それでも、姫が心配だという気持ちが拭えない。

体と心のバランスを崩してしまっているのがわかつているのに、

俺は今ここでその事実から目を背けたままでもいいのか。本当に？

自問自答しても、答えが見出せない。

頭を抱えたままで目を閉じる。まぶたの裏に思い浮かぶのは「すりりゅうさま」と巫女を呼んだ姫の姿。

俺には決して向けられなかった好意、愛情、恋慕。

どうして化け物に恋心を抱けるんだ。それさえも理解できない。

俺は姫のことを何も知らなかった。本来はこの手で守らなくてはならない人なのに、そのような前向きな感情を自発的に抱いたことが無い。そもそも姫を理解しようとしてこなかった。

そんな俺に何ができる。

怪しげな薬などに手を出すと俺が言ったところで、姫が納得して聞くともしえない。

そうだ。俺にとって姫が軽い存在だったのと同様に、姫にとって

も俺はさして重要な相手ではなかったのだろう。

馬鹿だな、今更後悔して。

これが恋心でも何でもないということも、ギー流に言うならばウキウキしたりキュンとしたりする事を知った今ではわかつている。

恋でも愛でもなかったとしても、俺は姫を救いたい。今までの罪滅ぼしでしかないかもしれないけれど。

「行くことにする」

顔を上げてギーに声を掛けると、神妙な面持ちでギーが頷き返す。

「畏まりました。ではそのように手配致します」

夜も更けて照明により照らされている手元の中にある大量の書類には全て目を通してサインをした。これで数日留守にしても、業務が滞る事はないだろう。ルデアもいるし。

侍女も官吏も者たちも全て帰った後、部屋の中にはギーしか残っていない。ルデアも今日は先約があったということで定時で早々に帰宅している。

ふーっと溜息をついて背伸びをすると、クスッとギーの笑い声が部屋の中に響く。

「なんだよ」

「やっぱり疲れます？ 頭脳労働」

「まあ、それなりにね」

軍に所属していた頃は筋肉痛に悩まされていたが、最近では肩こりに悩まされている。

どっちにしても肉体的な疲れには変わらないが、肩こりは頭痛を伴う事があるのが厄介だ。

「薬でも飲まれますか」

「いや。そういうのに頼るのは好きじゃないな。どちらかというとたまには体を動かしたいな。おかしいものだな、軍にいた時は座つてする仕事がしたいと思っていたのにな」

そうですねと笑って、ギーが机の上の書類をまとめて整理し始める。

近衛に属し、筋肉隆々の体系を維持しているギーは、そのように思うことはないだろうな。

背もたれにもたれかかり、本来は文官の仕事である作業をこなすギーの様子を何の気なしに見つめている。

薬を飲まなければならぬほど疲れているように見えたのだろうか。全然体を動かしていないから、貧弱になったのかもしれない。たまには剣の稽古でもしておくか。いや、そんな事をするとなまた外野がうるさそうだな。

窓の外のキラキラと輝く照明に目を移し、その先にある水竜の神殿に思いを馳せる。

何故姫は薬なんか……。

「いや、待て」

思わず口をついて出た言葉に、ギーが降り返る。

「どうなさいましたか」

頭の中に浮かんだ一つの考えに、暗い予感が過ぎる。しかし、本当にそこまでするだろうか。

眉を寄せた俺の様子がおかしいと思ったのか、ギーが手を止めて歩み寄る。

はっとして息を呑むが、この考えをギーに言うべきか。もしもギーが……いや、それはないだろうか。

「あのさ」

「はい」

「誰が、あんなものを姫に勧めたんだ。本当に主治医なのか」

「……と、おっしゃいますのは」

「誰かが何らかの意図を持って、姫に一服盛ったという可能性は無いのか」

声を潜めて告げると、ギーの顔が一気に曇る。

「実際には盛られる手前で内偵のものが気付いて、姫は口にしていない。それに主治医も関与していないから問われても答えようが無いという事は無いだろうか」

「そういう可能性が全く無いとは言えませんが」

「仮にそうだとしたら、どの勢力が神殿まで手を伸ばせると思う？」

「そういう類の事は、ルデアのほう得意分野かと」

「だよな」

思い切り息を吐き出し、物思いに耽る。

父王、兄貴、兄上。恐らくそのどの勢力も神殿内に手を伸ばしていることは間違いない。俺がそれぞれの勢力に内偵を潜ませているのと同じように。

その中の誰が一体姫に薬を盛ったのか。

その考えに固執するべきではないとわかっているが、仮に外部勢力によってもたらされたものとしたら、俺以外の誰かだ。

姫に薬を盛って、誰か得をするか？ せいぜい俺の支持勢力が縮小するくらいだ。より濃いカイの血をという血統第一主義の連中が俺の支持をやめる程度だろう。それが誰の利益になる。

そもそも姫が誰かによつて薬を盛られたという事実が露呈すれば、それはその勢力にとつてはむしろ不利益になりかねない。そんなリスクを犯すか？

ではやはり、姫やその周囲がその薬を飲む事を望んだのか。

姫はそこまでして……いや、それもおかしい。

俺の知る限りでは、そのような手段を用いて幻覚を見たいと願う人ではない。

高貴で高潔であり孤高の人であるはずだ。

恋が姫を狂わせたか。はたまた陰謀か。

「答えは出ないな」

「百聞は一見にしかずというところでしょうか」

「かもな。でもまたルデアは怒りそうだ」

ふつとギーが鼻で笑う。

「そうでしょうね」

それでも、自分の目で見て確かめたい。真相が一体どうなのかを。

雪も降ることが減ってきた冬の終わり、僅かな供を連れて水竜の神殿を目指す。

姫には事前に赴く事は伝えているが、巫女には会うつもりは無い。会いたい気持ちが無いわけではないけれど、正式に水竜からの要望があつたわけでも、王家側として巫女に神託を求めに行くわけでもない。

これは祭宮としてではなく、いや祭宮だからこそなのだが、個人的に神官長である姫に会いに行くだけだ。

予想通りルデアはぶーぶー文句を言ったが、寄り道をせずに最短日数で戻ってくると約束すると、嫌々送り出してはくれた。

確かに今でも外野が煩いことから、更に非難を浴びることは確かだし、ルデアには業務面で負担を掛ける。それは申し訳ないと思うが、今確かめなくては、もしもその薬に姫がどっぷり浸かった後では取り返しがつかない。

馬を走らせ、街道をひたすらに進み、水竜の神殿へと辿りつく。その前に付くと、やはり身の引き締まる思いがする。ここが神域なのだと、肌に触れる空気が伝えてくる。

夏でもひやっと冷たくて張り詰めた空気が神殿を取り巻いている。冬の終わりの今、その空気は厳しく突き刺さるようだ。

招かれざる客って事が。

本当に俺も水竜に嫌われたもんだ。

一体何がそこまで機嫌を損ねたのか、さっぱりわからない。

やっぱり今の巫女であるササを巫女にする前に「触った」から気に入らないのか。しかし触るっていったって、別に手を出したわけでもあるまいし。巫女の純潔を汚すようなことはしていないぞ。

神様の考えることはさっぱりわからないな。

馬を下りて防寒着の雪を振り払って、いつものように神殿の入口に立つ。

無表情な神官が定型の挨拶文を述べて、ゆっくりと神殿への扉を開く。

ギーっという重厚な音を立てて開かれた扉の向こうには、頭を下げた老神官。先の神官長に仕え、現在は長老と呼ばれる神官の実力者。わざわざそのような神官が出迎えに来るとは珍しい。

「これは長老。この寒い時期にお待たせして申し訳ありません」

「いやいや。ワシが若いもんに譲ってくれとでしゃばったのじゃ。

たまには体を動かさんと、体も頭も衰えるからのう」

軽口を言い、門兵を務める神官に軽く手を上げると、扉を開けた神官は扉の向こう側に姿を消す。

迷路のような回廊の入口、窓もなく薄暗い回廊には僅かな蝋燭の灯りだけが揺らめいている。

「今日はどうなさいましたかな」

ごくごく自然に切り出した好々爺は、その笑みの裏側に鋭い視線を隠し持っている。

「あまり神官長様のお加減が宜しくないと聞きました、お顔を拝見できればとお伺い致しました」

「そうでしたか」

ほっほっほつと笑い声を響かせ、けれど一歩も動かないまま老神官はにやりと口元を横に引く。

「てつきりワシは別の理由でお越しになられたのかと穿っておりますぞ」

「それゆえ、こちらまでお見えになられたのですか」

「さーて。そのようにお思いになられるのでしたら、そうなのでしようなあ」

どちらとも取れるような肯定を口にし、老神官は狡猾な瞳を閉じる。

何か物思いに耽っているようにも見え、言葉を選んでいるかのようにも見える。

「もしもお二人をあなた様がお救いになられたいと願っておられるのなら、力をお貸し致しますぞ。それが我が主の願いでしたからのう」

「二人？」

主というのは聞くまでもなく、先の神官長のことを指し示しているのはわかる。しかし先の神官長が救いたいと願った二人とは。

「お嬢と姫。二人の仲がこじれるのではないかと、主は常に心配しております。そして姫は堕ちてしまわれた」

「堕ちた、のですか」

「残念じゃがの」

老神官が言うのは、あの薬のことに違いない。この神殿において権力を掌握している長老と呼ばれている神官が、神官長の異変に気付かないということは有り得ないだろう。

「いつからご存知で」

ふうつと老神官が溜息を吐き出す。その目は憂いに満ちている。

「ワシはあれはただの安定剤じゃと聞いていた。それがまさか毒にもなるようなものとは思ってもおらなんだ。気付いた医師の一人から報告があつた。おかしいと」

「そうだったのですか」

「元々姫は体が弱く、様々な薬をお飲みになられておった。それ故に、薬の量の増減が多少あつても、誰も気にはしておらなかった」

確かに王宮にいた時から数種類の薬を飲んでいたので、それを継続していたのだろう。

少し気温が低くても体調を崩す姫が、巫女という大役を勤めるのは肉体的にも並々ならぬ努力が必要だった。だから薬を用いずにはやり遂げる事が出来なかったのだろう。

「巫女をお辞めになる前からは、かなりお心が乱れておいででな。

その為に不安感を抑える為に薬を使うという報告は受けていたのじやが、状態は薬の効果もあり安定しているように見えておった。が、どこかで歯車が狂ったようじゃな」

「……では、あの薬を常用されて」

問いかけに老神官は僅かに顔を上げ、目を伏せる。それが答えのようだ。口には出さなくとも、その絶望的な表情が全てを物語って

いる。

一番最悪の結果だ。

せめて常用していなければ、老神官も対処のしようがあったのかもしれない。しかし中毒性の高い薬であるが故に、姫はそれに手を出さずにはいられないのだろう。

「そうですか。その事を知っている神官は」

「ごく僅かな者だけじゃ。それが毒にもなるものだ気付いているのは医師数人だけじゃな。恐らくお付きの者もその薬の正体には気付いてはおらんじやろう」

計らずも同時に溜息を吐く。

しかし笑えるような状態でもなく、共に言葉に詰まってしまふ。

何とかして姫を薬から遠ざけたいが、容易には受け入れられないだろう。

「結果論でしかありませんが、やはり先の方にもう少し神官長を続けて頂いたほうが良かったですね」

「……今となつてはのう」

深い絶望が老神官を支配しているように思えた。がっくりと落とした肩が、自分を責めているかのようにも見える。

「救いたいもう一人とは」

「お嬢じゃ。きっと今回の騒動に巻き込まれてしまふに違いないから。う。もしもこの騒動がお耳に入った時、ご自分を責めてしまふのが目に見えておる」

蒼い衣に身を包んだ巫女。それでいてどこか不安げな瞳が揺れている。その姿は、風に吹かれる花のように儚げでもある。

その細い肩を守りたい。彼女を不用意に傷つけない。その為にはこの老神官の手を借りなくてはならないだろう。

「巫女にはこの事は決して」

「そうじゃな。お嬢のみならず、全ての神官たちの耳に入れないつもりじゃ。今後も姫以外に神官長を勤められる方もおらんしのう」

もしも事が明るみになれば、神官長である姫を不適格な者とみな

し、排斥しようという流れが起きないとも限らない。しかし、先の方を除いて神官長になれる資格を持つ者がいない。しかし先の方はご高齢で、神官長の任に再び就く事は体力的にも難しい。

姫自身が望んで薬を使っていないのであれば、ごくごく内密に事を進める事が、今後の姫のためにもなるだろう。

仮に神官長を辞する時が来たとしても、決して薬などという不名誉な事実で神殿を追い払われた為などという事になってはならない。王宮での姫の名誉を守る為にも。

そのようなことになれば、王宮でも姫を受け入れることは不可能になってしまう。

「姫ご自身が、薬と距離を置くようになっていただければ良いのですが」

「それが一番なんじゃがのう」

深い溜息が、それが不可能だと言っているようにも思えた。

実際に姫にお会いして話した時にも、その薬に対してなんら疑問点を抱いてはおらず、体調は芳しくないものの、神官長業務は滞りなく行っていると話していた。

王宮からの姫の主治医から事情を聞いても、今はその薬が姫の状態にはあっているようなので、これ以上量を増やさなければ中毒性もなく、副作用もなく使用出来ると判断しているとのことだった。

しかしそれは対処療法でしかなく、本当の意味で姫の状態を良い方向に導く為には、いずれその薬とも距離を置かなくてはならない。その為はどうしたらいいのか。

道は一つしかないように思える。

神殿と距離を置く。

それが、最良の判断ではないだろうか。

季節は巡り、春が訪れる。 数ヶ月後には王太子に指名された兄貴の戴冠式が執り行われる。

それなのにまだ王宮はゴタゴタしているようだ。いい加減諦めればいいのに、大臣たちも。

スージには先日断りを入れた。兄貴に姫を譲ることは出来ないと、思いのほかあっさりとした「まあそうだろうね」という返答に拍子抜けしたが、兄貴サイドとしても本気で姫を欲していたわけではなく、俺に揺さぶりを掛けられればいいと思っていた程度なのだろう。

姫が宝石の人なのかと楽しそうに聞くスージに「ご想像にお任せするよ」と答えると、一緒にいたギーは思いつき肩を竦めた。

もしかしたらルデアから何かを聞いているのかもしれない。

戴冠式に合わせ、父王からはある打診をされていた。

断られるであろうと思っているがという前置きが付いたそれは、俺の意図と合致するものだったので、出来るならば父王の願いを叶えたいと思っている。

しかしそれが可能なのだろうか。

父王が半ば諦めているように、やはり拒否されるのではないだろうか。

一抹の不安を抱えながら、水竜の神殿への扉を叩いた。

通された部屋の中、春の穏やかな光の中では神官長である姫は健康やかな様子に見える。

冬の日のような青白さはない。しかしそれでもかなり痩せ細ってしまっているように思える。

華奢な体がいつそう細くなり、手首なんて簡単に折れてしまいそうなほどだ。

それによく目を凝らすと、化粧で誤魔化しているだけで、目の下のくまも色濃い。肌が白いから余計に目立つのかもしれない。

やっぱり状況は全く良くなってはいないようだな。

姫と決まり文句のような社交辞令の応酬をしつつ、そんな事を胸の内で思う。

一通りの社交辞令が終わったあと、意を決して姫へと父王からの依頼についての話をする。

「神官長様。陛下よりご依頼があるんですが、お受け頂けますでしょうか」

可愛らしい仕草で小首を傾げふわりと微笑む姿に、愛しさよりも心配が頭をもたげる。

無理に表情を作らなくてもいいのに。明るい表情を無理に作るよりも、その心の内を吐露してくれたらいいのに。

しかし決して姫は俺に心中を明かしたりしないだろう。苦しいとか、辛いとか。それから甘えるような事も。

今作ったその表情だって、俺が祭宮だから、俺が婚約者だからとりあえず微笑んでみただけに違いない。

絶望なんてしないけれど、こういう関係を築き上げてきたのは自分なのだと改めて思い、そして後悔の念が過ぎる。

そして、こんなにも追い詰められた人を作り上げてしまったのに、自分の手で何とかしたいと思っただけでも、その心をずっと支えていきたいという覚悟は持てない。

神殿に来る直前に「所詮偽善にしか過ぎないんですよ、わかっていますか？」と眉を顰めて告げたルデアの心中を慮る。

いつだって覚悟が足りない。

この目の前の女性の人生を背負う覚悟も無い。

王族なのだから、妃は何人娶ろうが誰にも文句は言われない。寧ろ姫を妃に迎えれば歓迎されるに違いない。

しかし自分の心を偽ることが出来ない。

姫に愛を囁いて抱きしめた腕の中に、この後に姿を現すであろう

彼女を抱きしめて同じように愛を囁くなんて、俺には出来ない。その逆も然り。

俺はどうやら非常に不器用な人間らしく、たった一人しか胸に住まわせる事が出来ないようだ。

同じように二人を愛して守っていくという選択が出来たのなら、もつと違った言葉を姫に掛ける事が出来るかもしれないのに。

守り続ける事は出来ないけれど、それでも姫を苦境に立たせたくは無い。その心を救いたい。

その事は真実なのに、やはり覚悟の足りない者の贖罪が偽善でしかないのだろうか。

ごくりと唾を飲み込み、正面から姫を見据える。

「戴冠式に、お出で頂けますでしょうか、神官長様」

俺の発した言葉が、部屋の中に衝撃として広がっていく。

姫も、神官長の御付神官も、長老も、目を見開いて俺を見ているのがわかる。空気がどこかピリッと張り詰めたように感じる。

「陛下からのご要望でございます。ご無理を承知で申し上げますので、戴冠式のついでに王都でご静養をされるのはいかがでしょうか」

周囲の様子とは異なり、姫はふわりと頬を緩ませる。

もしかしたら王都に戻りたいと思っているのではないかと期待すら過ぎる。

けれどその笑みはあつという間に細められた視線と共に消え、ゆっくりと左右に首を振って拒絶を示す。

「わたくし、ここを離れるつもりはありませんわ。ただ、陛下や殿下がわたくしを気遣って下さったことに感謝の思いが絶えません」
ゆっくりと瞬いた後、姫の視線は窓の外の水竜の神殿へと向けられる。

以前聞いた甘ったるい声で、水竜に話しかけているのだらう。その柔らかな表情が姫の決意を物語っているかのようにも思える。

「一生、ここを離れるつもりはございません。体調のことでしたら

大丈夫ですわ。そのように報告もしておりますでしょう」

「確かにそのような報告書を受け取っております。しかししばらくお会いしない間にまた……」

言葉を遮るように姫が立ち上がる。

何をなさうとしているのか全くわからない。

そうだ、今この瞬間さえ、俺は姫の考えていることがわからない。ただ一つわかるとするならば、神殿を離れる気はないということだけだ。

「巫女に関しては在任中は神殿から出る事を禁じられておりますが、神官長にはそのような制約はないはずです。これ以上お体がお弱りになれば、必然的に王宮に戻らなくてはならない時がきてしまわれるのではないしょうか」

半ば脅しのような俺の言葉に、姫はゆっくりと降り返る。

微笑なのか苦笑なのか、笑みを浮かべて俺を見下ろす。

「殿下はこんな時でも冷静でいらっしゃるのね」

「そんな事はありませんよ。ただ神官長様のお体が心配なだけです」

「そうかしら。本当にそうなら、わたくしたちの間も少しは違うものになっていたのかしら」

「神官長様」

思いもかけない言葉に絶句する俺とは対照的に、どこか姫はふわふわとして舞う蝶のようだ。ひらりと神官長の正装が翻り、そして窓辺に手を置いて俺を見つめる。

真っ直ぐと俺を見つめているはずの瞳が、俺の後ろを見つめているように焦点が合わない。

本当に副作用がないと、この目を見ても言えるのか。明らかにおかしい。やはり薬から遠ざけなくては。

「殿下の人生とわたくしの人生が重なる日は来るのかしら。そうなるのが必然だと思っていましたのよ、これでも」

「神官長様、その話は今は」

遮る声など全く耳には届いていないようだ。

「もしも神官長にならなかつたら、殿下はわたくしの手をお取りになられたのかしら。それとも運命は変わらないのかしら。全ては必然なのか偶然なのか。水竜様の御心はわかりませんわ」

独り言のような、それでいて俺に語りかける口調から伝わってくるのは、こんなに姫は空想家だったかという懸念。

場の空気も読まず、自らの主張だけを繰り返す姿は異様なものにした。俺の知っている姫はこんな姿を他人に見せるようなことはなかったはずだ。

「どうしてわたくしには水竜様のお心が見えないのかしら。どうしてそのお声が聴こえないのかしら」

ぎょっとして目を見開いてしまったのは無意識だ。

壁際に控える二人の神官に目を向けると、長老と目が合う。長老は俺にわかる程度に首を横に振り、状況があまり芳しくない事を伝えてくる。そしてそっと部屋の中から姿を消す。もしかしたら控え室に詰めている医者のお意見を仰ぐのかもしれない。

「ですからもう一度そのお声を聴くまでは、わたくしは神殿を離れませんわ」

固い決意を窺わせる言葉に、俺は首を縦に振る事も横に振る事も出来ない。

本当は一刻も早くここを離れて専門医の治療を受けたほうがいいけれど、どうやったって姫は神殿に、いや違う、水竜にしがみついているんだ。

ならばどうやって離せばいいんだ。この神殿から。

恐らく心の病に罹られた最大の原因は「巫女でなくなった事」だろう。そして自分以外の誰かが水竜の声を聴いているという事実が姫の心を蝕み続ける。

けれど、本来ならば神官長という任を選んだ時点で、それは自身で乗り越えなくてはならない壁であったはずだ。

水竜の声が聴こえないということを受け入れ、新たな巫女を受け

入れて育てていく。その覚悟が全く姫の中に無かったわけではあるまい。

思ったよりもずっと、その事実が姫には受け入れがたい事実だったのだろう。

「では、賭けをしましょう」

「賭けとおっしゃいますと？」

「もしも神官長が神殿を出るという前例がある場合は、今回の戴冠式に限り王都にお戻りいただけませんか」

「……わたくしは」

につこりと笑顔を作り、立ち上がって姫のほうへと歩み寄る。

「わかつております。神殿を、水竜を愛していらっしゃるから、こちらを離れたくはないのですね」

「ええ」

わかつているのならばどうしてと顔に書いてある神官長の横に立ち、同じように窓の外の水竜の神殿の奥殿を眺める。

木立の向こう側にいる水竜。俺の声もどうせ聴こえているのだろう。ならばこの姫の病を治すために、助力願えないだろうか。

久々に間近で眺める姫の横顔は整っていて美しい。影があっても、やつれていたとしてもその美しさには何ら変わらない。

「神官長様は前例があるとお思いですか？」

「……わかりませんわ」

「ですから賭けです。この賭けに水竜のお心を賭けてみませんか」姫の視線が重なった。ちゃんと焦点のあった目で俺を見ている。

「もしも前例があれば、水竜は姫にご静養を求めている。無ければ水竜は姫を放したくは無い。こういうのはどうでしょう」

問いかけるとふふふと姫が笑い声を上げる。

「こんな重要なことまでゲームにしてしまうのね、殿下は」

「いけませんか」

「いいえ。殿下らしいなと思っただけですわ」

手を伸ばせば届くところにいた姫が残り香だけを置いて、元いた

席に腰を下ろす。

ゆっくりとしたその動作を見守り、姫の斜め前のソファに腰を掛ける。俺の目の前にソファはまだ無人のまま。

姫が一口お茶を飲み、カチャッと小さな音を立ててカップを下ろす。

窓の外を眺めるその横顔に声を掛けず、水竜に問いかける。

姫に時間をくれ。必ず返すから、お前のもとに。お前は姫がこのままで良いと思っっているのか。

ふいに頭の中に声が響く。

「君が望んで選んだ道だ。その責を他者に負わせるような言動は慎むといい」

蒼い瞳、甲高い声。かつて見聞きした光景を思い出すと、自然と体にぞわりと気色の悪い感触が這い上がる。

お前は姫が自分で立ち直れるって思っているのかもしれないけれど、今のこの状態を長引かせるのは得策じゃないだろう。

少なくとも精神状態を安定させる為という薬が、姫にとっていい結果をもたらしているとは思えない。

今だけでいい。俺に姫を救う手助けをさせてくれ。

黙りこんでいた姫が俺を見つめる視線に気付き、視線を姫のほうへと戻す。

「賭けてみても構いませんわ。前例を調べる手筈を整えます」

「神官長様、ありがとうございます」

「まだ王都に行くとは決まったわけではありませんわ。調べてみてからですわ、全ては。そもそも莫大な資料がありますから、全てに目を通すのは不可能かもしれませんわよ」

出てこないと姫は思っているのだろう。それならそれで構わない。水竜自身にも巫女を通して、神官長である姫の静養を求めるつもりだ。本当に神官長のことを思うのならば、今静養が必要だと水竜にもわかるだろう。

今は姫がまず賭けをする気持ちになれば、それでいい。

「構いませんよ。結果を待つのも楽しいではありませんか」

わざと大げさに答えると、姫はふふと声を上げて笑う。

「決して面白いゲームというわけでもありませんのに、殿下にかかれば全てが楽しい出来事のように思えますわね」

思わず口元が綻び、目を細めて姫を見つめる。

「それで少しでも神官長様のお心が軽くなるのでしたら、いくらでも」

「まあっ。お上手ね」

上品な笑い声が室内に響き渡り、心の底から姫が楽しそうに見える。心の中の重荷が少し軽くなる。

どうか少しでも心の中に抱える闇が軽くなり、薬などに頼らなくとも以前の姫に戻れますように。

願わずにはられない。

暗闇に姫が捕らわれませんように、と。

姫が上機嫌にクスクスと笑い声を上げていると、トントンと扉が叩かれる音が響く。

ドキッと胸が跳ねる。

それが誰なのか、問わずとも、姿が見えずともわかつている。

意図せずほころんでしまった頬をそのままに、扉の向こう側から現れた彼女に微笑み掛ける。

仕事に來てるんだから、もうちよつとしゃんとしなきゃな。

咳払いをして、でも笑みは貼り付けたまま巫女である彼女に挨拶をしていると、すつと神官長が立ち上がる。

先ほどの件について調べてくるつもりのようなのだ。

そんなに短時間で調べつくせるものでもないだろうに。どうしたのだろう。もしかしたら体力的にこういった席に長居するのがきついのもかもしれない。

自らの不調については巫女には知らせるつもりもないだろうから、ここでその件に関して触れるのも適切ではないな。

あまり引き止めるのも得策ではなからう。

神官長の言葉を額面どおりに受け取り、席を辞することを承諾した。

さて、目の前には巫女である彼女。

否が応でも頬が緩むのは避けようが無い。

季節の挨拶をすると、いつか王都に行ってみたいと言う。社交辞令で言っているだけかもしれないが、いつか連れて行けたらという思いが過ぎる。

「では、いつかお連れ致しましょう。王都へ」

その手を取って、春の花で飾り立てられ一年で一番美しい季節に王都を見せたいと思う。

その時一体どんな顔をするのだろう。そんな妄想が逞しくなると

はな、昔の俺なら考えられないな。

思わず苦笑が漏れるが、その事に彼女は気付いていないようだ。

「そうですね。機会があればぜひ」

そんな当たり障りのない答えが返ってくる。

まあ、そうだよな。社交辞令に社交辞令で返したって感じにしか受け取れないよな。

心の中にある淡い感情を表に出す事は禁じられている。

ここではただの祭宮で、彼女は巫女だ。

巫女の神聖を汚すような真似をするわけにはいかない。水竜に釘も刺されていることだし。

一瞬彼女の顔色が曇ったように見えたけれど、それは本当に一瞬のことだったようで、巫女付神官にお茶の入れなおしを頼み、また他を寄せ付けないような巫女の顔つきに戻る。

その心中はいかばかりなのか。

神官もいなくなり二人きりになった部屋の中、彼女の心の内を覗いてみたい欲求が湧き上がる。

多分、嫌われてはいない。寧ろ好意を持たれているのはなんとなくわかるんだけど、夏にあった大祭の時にはよくわからないけれど怒らせてしまったし。

掴めそうで掴めない。彼女の心中。

「今日は神官長様をお願い事でいらっしやったんですか」

二人きりの部屋の中でも、彼女の「巫女」は崩れない。なんかそれが悔しい。

くるくるめまぐるしく変わる表情が見たい。巫女じゃない素顔が見たい。

その為に「祭宮」を崩して、素の自分で彼女に対峙する。

「ええ、そうですね。お願いといえばお願いですね。気になる？」

目線が合う。

はっとしたような表情の彼女の目が泳ぎ、助けを求めるかのように奥殿の見える窓へと視線を動かす。

ちえつ。俺よりも水竜かよ。

色々揺さぶりをかけてみるものの、彼女の巫女然とした態度は変わらない。

水竜がそうさせているような気がして、余計に腹立たしい。

「水竜の巫女ですから。祭宮様がどんな御用でいらっしゃったのか気になるのは当たり前です」

ふふんという形容が合うような表情で、指先まで神経を行き届かせた態度で答える彼女に苛立ちを隠せない。

「つまんねえの。模範解答をどーも」

まあね、期待したような答えなんて求めてないけどさ。

そこまで巫女巫女されているのも、もどかしい。いつまた神官が戻ってくるかもしれないのに、彼女の心の内には触れられないままで終わりなのだろうか。

少しの動揺も感じられない。

期待通りの反応が無い事に、もどかしさと落胆を覚え、溜息を吐き出す。

若干なりとも好意を持たれていると考えた俺が馬鹿だったか。

彼女にとって俺は「祭宮」でしかないんだろうか。好意を持たれているかもというのは、樂觀的過ぎたのかもしれない。

「もうちよつと違う答えが欲しかったけどね。今日はご報告に来たんだよ。あと依頼ね」

ふうつと息を吐き出し、こちらも祭宮として対応するしかないか。心持ち表情を引き締め、巫女である彼女に視線を向ける。

「王太子殿下が無事即位することになった」

「そうですね。おめでとうございます。今年は国中が祝賀で盛り上がりますね。子供の頃、現王陛下の即位の時、村中お祭り騒ぎでしたもの」

彼女の視線が奥殿のほうへと向けられるので、その視線を追いかけるように奥殿にいるであろう水竜へと意識を向ける。

水竜がこちらの意図を理解して、姫を王都に戻す事を了承してく

れるだろうか。

これから彼女を通して水竜に言わなくてはならないことを思うと、気が重い。そう容易くは了承して貰えないだろうという事はわかっている。

祭事を司るものは、政治には関わらない。

それが祭宮である俺が最初に学んだ事でもある。

それ故に、玉座から遠ざけられたただけではなく、王宮からも弾かれたような気がして拗ねていたわけだが。

今思えばそれは幼い考えでしかなかった。長兄ではないが、思慮が足りないと言われてもおかしくないような、表面上のことだけを見て結論を導き出していたのに過ぎない。

兄上に言われたように、一つ一つ丁寧に掘り下げていくと、色々な事柄が見えてくる。

この立場だからこそわかる事もある。

「先の大祭で水竜様が今年は穏やかな一年になるとおっしゃっていましたが、民にとってはよい年になりますね」

「そうだな。浮かれ騒いで、楽しい年になるんだろうな」

兄貴はどういう統治者になるのだろう。

しかし民にとっては即位の一年目はお祭りのようなものだろう。

新しい王になって、様々な民を喜ばせる為の行事も行われる予定だ。まずは人気取りの為に。

父王の統治は決して長かったわけではない。

恐らく目の黒いうちに、自分の目の届くうちに次王に冠を譲って統治の補佐をするつもりなのだろう。

これといった実績もない王だったかもしれないが、それでも民に穏やかな時代を提供した王であったと思う。

「あまり祭宮様が浮かれている姿って、想像がつかないですね」

意識を彼女に戻し、少し碎けた話しかたをする彼女に合わせる。

「そう？ そんなことはないと思うけど。ササはどうなの」

「え？」

あ、ササって呼んでも怒らないのか。

また水竜がでしゃばってくるかと思っただけだ。

「いや、何か真面目を絵に描いたような感じだから、羽目はずしたりしなそうだなと思って」

「そんなことはないですよ。お酒を飲んで陽気になったりもしますよ」

どうでもいいような酒の飲み方談義が繰り広げられる間、彼女はほんの少し巫女の仮面を外しているように思える。

いや、巫女の仮面の隙間から本音が垣間見えているという感じだろうか。

楽しそうというよりも、真っ直ぐに言葉を受け取って、真っ直ぐに投げ返してくる。

そんなところにも彼女の生真面目さが窺い知れる。きつと不器用な人間なのだろう。今はこういう場面だからこういう話しかたをしたほうがいいと判断して切り替えることが不得意なように思える。

いつでも本音で、全力で。それで前、辛くないのか？

羽目を外す事も出来なそうだし、誰かを頼りにすることも無いだろう。

巫女としての今だって、誰かに頼ったり甘えたりする事なんてしないだろう。恐らくは立派な巫女である事が彼女の命題であり、それから外れる事を彼女自身が許さないだろう。

「たださ、もうちょっと肩の力抜いてもいいと思うよ、俺は。抜くとこ抜かないと、しんどくなるぞ。俺でよかったらいつでも話くらい聞くからな」

俺を頼って欲しい。

その為に俺はここにいるんだ。その為の祭宮なんだ。祭宮だからってだけじゃなくて、ササの力になりたい。

伝えたかった思いをぶつけると、彼女が弾かれたように目を見開いて俺を見つめる。

次の瞬間、ふにゃっと表情が崩れる。巫女の表情があつという間

に瓦解していき、目の前にいるのは森の中でどうしたらいいかわからないと泣いていたササになっている。

やっぱり強がってるだけなんだな。

「大丈夫です。ありがとうございます」

目から涙が零れ落ちそうな彼女を支えてやりたい。

伸ばしたい手をぐつと堪えて、彼女を見つめる。本当はその頬に手を伸ばして、思いつきり泣かせたい。強がっている肩を抱きしめて、全部弱音を吐き出させてしまいたい。

細い肩に乗せている重荷を、幾らかでも分けて軽くしてやれたらいいのに。

「あんまり私のペースを乱さないで下さい」

「そんなつもりは無いんだけどな」

可愛い恨み言に笑みが漏れる。上目遣いで涙目で、可愛くて溜まらない。

ほんの少し手を伸ばせば届く距離にいるのに、もどかしくって仕方が無い。

それでも、本人からしてみれば不本意だろうけれど心の内が垣間見れて嬉しい。いつもそういう顔していたほうが可愛いのに。ああ、でもそれじゃ巫女じゃないのか。

「ササのそういう顔が見られたから、いや」

「そういう顔って？」

「変顔」

誤魔化して言った言葉を額面どおりに取ったらしく、目の前で百面相が始まる。

深呼吸してみたかと思ったら咳払いをして、何度も何度も深呼吸して、絶対に俺と目を合わせないの。

赤くなったり青くなったり、本当のササは表情豊かだな。

「おい、冗談だから」

そう言った瞬間、鳩が豆鉄砲食らったみたいなきよんとした顔に変わる。

え、何で？　とでも言いたげな表情で、ぽかんと口を開けて。

「あははははは」

ダメだ、笑いが堪えきれない。

からかうつもりなんてまるで無かったけれど、想像以上に反応が良すぎて。

俺が笑っているのが気に入らないらしくて、今度はぷりぷりと怒り出す。

笑ったり怒ったり慌てたり泣きそうになったり。

彼女を見ていると、生きているんだなと実感する。閉塞感たっぷりの王宮とは違って、何もかも真っ直ぐで裏表なんか無い。こういう表情を作らなくてはいけないのだと意識しなくていい。

俺がずっと求めていたのは、そういう「自由」だったのかもしれない。彼女の持つ「自由」に惹かれて止まないのかな。

けれど、そんな楽しい時間はあつという間に終わる。

今回の来訪の目的を彼女に問われると、重たい現実に溜息を吐き出したくなる。

言わなくてはならない事実が彼女に面倒を掛ける事はわかっている。そしてそれを彼女の背後に控えている水竜が容易く受け入れることは無いという事も。

神託が必要かと聞く彼女に、神殿の人に戴冠式に出て欲しいとさらいとした事実を伝える。

その瞬間、彼女の表情に変化が現れる。ぴくりと肩が揺れ、先ほどまでのササの表情は一変し、巫女の表情に様変わりする。

こういう時の切り替えの早さは見事だな。

「そうおっしゃるという事は、そのような慣例は過去にはないということなんですね」

的確に事実を察した彼女に頷き返す。

「少なくとも、城の記録にはなかった。でも、もしかしたら城の記録にはなくても、神殿の記録には有る可能性も無い訳ではないだろ

う」

「それを神官長様に調べるように依頼されたんですね」

短い会話でそこまで導きだしたか。

意外にというか、思った以上に聡明な彼女に対し、どのように伝えたいのだろう。

下手なことを言えば、神官長である姫の体調不良や精神的な不安定さ、そしてそれに伴う薬の服用などを見破られてしまつかもされない。

それだけは避けなくてはなるまい。

「俺は、というか王宮の人間は、神官長様に参加して欲しいんだ」言葉を選んで慎重に、こちらの都合であるということを前面に打ち出して話しかける。

実現はかなり難しいであろうということは父王も俺もわかっている。それでも、出来る事ならば姫を王宮で静養させたい。

どのように言えば、巫女は、水竜は首を縦に振るだろうか。

「今まで随分長い間神殿を出ていないから、ご両親も心配しているし、俺もお体の事が心配だし、一度責務を離れて休養するのも良いだろうと思うんだ」

休養し、薬に頼らずに業務をこなす事が出来るようになるほうが、神殿の為にもなるだろう。

この会話を聞いているであろう水竜に、どうやってら伝わるのだろうか。

神官長が肉体的にも精神的にもギリギリの状態であるということが。

様々な言葉で神官長の体調不良を訴えるものの、巫女であるササの反応はいいとは言えない。

快諾とまではいかなくとも、目に見えている姫の変化を認識して貰えれば静養の必要性は伝わるだろうと思っていたのだが。

姫とササの仲が芳しくないせいもあるのかもしれないが、ササは表面上の姫の変化にさえ気付いていないようだ。

どうして気が付かないんだ。いくらあまり関係が良いもので無いとはいえ、神官長と巫女なのだから日々会話くらい交わすだろうにササにみならず、本当に全神官が姫の体調のことに気が付いてはいないのではないだろうか。

巫女だった時から頻繁に体調を崩して寝込んでいたというのに。姫は恐らく誰に問われても「大丈夫よ」とかわしてしまっただろうし、周囲も元から体の弱い方だという認識があるだろう。それにしたって、この冬の間にかなり痩せてしまっているではないか。

このようなことを対抗勢力の巫女である彼女に伝えても仕方がないのかもしれないが、巫女の言葉だからこそ重みを持って受け止められるのではないか。

もう少し姫にも心配りをするようにと。

「あとさ、水竜にもお願いできないか、神官長様のこと」「は？」

上手く伝わらなかったか。改めて静養のことをわかりやすく切り出す。

「だからさ、戴冠式に神官長様が出席出来るように」

「何をおっしゃっているんですか」

「だから、もし前例がなくても神官長様に王都にお越し頂けるよう、お口添えして欲しいんだ」

瞬きをした後、ササの周囲の空気が変わる。

目線の先は奥殿。

水竜と会話をしているのだろう。

俺には全く水竜なんてものの声は聴こえないけれど、巫女を注視していれば、巫女が水竜の声を聴いているということがわかる。

不可思議な存在。けれど国の礎を作り、何百年もの間この国を支え続けている。

水竜、俺の声も聴こえているのだろう。お前を支える柱の一つである「水竜の神殿の神官長」が倒れる前に、ほんの少しの間でいいから、姫を助ける手伝いを俺にさせて欲しい。

決してその神聖を汚したりはしないから。

「水竜は一切政事には関わりません」

明確な拒絶が水竜の出した答えなのだろう。

わかつている。その事は十二分に。

そうではなく、戴冠式というのはあくまでも名目で、姫の静養が主目的なんだ。どうしてわからない。水竜。

「それは存じております」

落胆が隠せない。

入れ替えられた湯気の立つお茶を口に含み、ササを通して彼女の背後にいる水竜へと意識を向ける。

このままでは姫がダメになってしまう。

頼むから、一時だけで構わないから、姫に心の休息を与えてくれないだろうか。

「水竜様が政事に関わらないというのは、以前にもお聞き致しました。けれど神官長様のお体が心配です」

「心配だから、という理由で水竜のご意思は変わりません」

即答、か。

では水竜は姫のことを心配していないという事か。

巫女でない者のことなど、どうでもいいということなのだろうか。一代前の巫女だぞ。どうしてそんなに容易く切り捨てられるのだ。

「巫女様は神官長様のことが心配ではないのですか」

感じた疑問を口に出すと、穏やかな微笑みが返される。

もう、ササはいない。目の前にいるのは巫女だ。俺を近づけないように笑顔で壁を作っているのがわかる。

どんなに言葉を尽くしても、彼女のそして水竜の答えは変わらない。い。

内偵の者たちが口を揃えて言うように、彼女と姫の間には打ち解けた雰囲気は無いのだろう。心を許せるような関係でもない。

だから理性的な言葉ばかりが出てくる。

温かみのある思いやりのある言葉ではなく、俺をやりこめる為の冷静で冷淡な言葉ばかりだ。

共に神殿に生きる者として、少しでも姫に良い方法を考えるという雰囲気は感じない。

「戴冠式に神殿のものが出席する。形はどうあれ、水竜が国政に関わる事になります」

国政なんてどうだっていいんだ。そうじゃない。何故わからない。今、俺が言いたいのは、水竜に王家に対して頭を垂れて欲しいとか、兄貴の戴冠に色を添えて欲しいなんてことじゃない。

「水竜は決してあなた方王家の方に頭を垂れる事はありません」

「それなら戴冠式の中で、決して神官長様が下座に着くようなことや、頭を下げるような事は無いようにするから」

「いいえ、そういう問題ではありません。わざわざ神殿の者が参加するという事自体が認められません」

「それは水竜のご神託なのか」

それが、水竜の答えか。

かつて巫女であった者の精神的肉体的限界が来ようとしているにも関わらず、己の権威だけを大切にするのか。

所詮は巫女は使い捨てでしかないって事か。

お前には慈悲なんてものはないのかよ、水竜。化け物で人の心などわかりようも無いって事か。

「何なんだよ」

それが神と呼ばれし者の判断か。

己と今の巫女以外はもうどうだっていいというのか。

何故人はこんな利己的な化け物を崇め奉る。

万人を助けてくれなんて言っていない。せめて縁の者くらい、慈悲の心を示したっていいじゃないか。

それともここで全てを詳らかにする必要があるのだろうか。

俺は、姫が薬に頼らなくては任にあたれないと、巫女と巫女付の

前で宣言しなくてはならないのか。

そこまでしなくては、水竜が姫を助けようとはしないのか。
しかしそれを口にするのは、姫の今後のことを考えると最適とは
言えない。

どうしたら、姫の静養をもぎ取る事が出来るんだ。

「まもなく神官長様もお戻りになるようです。私はこれで失礼いた
しますね」

「待てよ」

話はまだ終わっていない。

まだ俺の話は終わっていない。姫のこと、了承してもらわなくては
困るんだ。

「これ以上、私から申し上げる事はありません。祭宮殿下」

微笑を浮かべる彼女の目が、俺を真っ直ぐに射抜く。

何か言いたいで、それでいて憤りの色を孕んでいるのがわかる。

俺は何でまたお前を怒らせたんだ。

「ササ！ 何なんだよ。何を怒っているんだよ！」

こちらも少々冷静さを欠いている部分もあり、咄嗟に彼女の名を
呼んでしまう。

それでも彼女の「巫女」は一切揺らぎはしない。

「怒ってなんていません。私は伝えるべき事はお伝えしましたから」
怒ってるじゃないか。ものすごく。自分で気が付いていないのか
よ。

声も目も、全身で怒っていると逆毛を立てた猫のように主張して
いるじゃないか。

立ち上がって彼女に手を伸ばしかけ、頭の中に水竜の神託の一つ
「触るな」を思い出す。

触れる事さえ叶わない。

ふっと彼女の瞳が視界に入り、ほのかにその瞳が蒼く色付いてい
るように見える。

また、ササの中に水竜が入り込んでいるのか？ それとも目の錯

覚か。

「ササ、なんだよな」

「ええ」

ササは気付いていないのだろうか。

視界のほんの端、眼球の端がうつすら地の色と混ざっている事に。感覚的にも水竜が入り込んでいるというのがないだろう。だとしたら余計な事をいうのは賢明ではない。

そしてこの場に僅かな気配だけでも同席していた水竜が否というのならば、これはもう覆らないだろう。せめて前例がある事を祈るくらいしか出来ない。

「そうですか。わかりました。お時間をとらせてしまい、申し訳ありませんでした」

当たり障りのない別れの言葉を残し、彼女は水竜の神殿の中へと消えていってしまう。

どれだけ言葉を尽くそうとも、水竜には理解を得られない。そして何故だかよくわからないけれど、彼女の気分も害してしまったようだ。

どうしたらわかりあえるのだろうか。

水竜とも、彼女とも。

ただ姫に少しでも良くなって貰いたい、それだけなのに。戴冠式だとかって事を口にしたのが失敗だったのかもしれない。しかしそれを口実にしなくては、ここから神官長である姫を出す事は不可能だろう。

姫を取り巻く状況を明らかにすれば、王都に行く事は可能だろう。だがそれでは、二度と姫は神殿に戻れない。

俺との婚約を事実上破棄して「神官長」になる道を選んだというのに、それをまっとう出来なくなるなど、誰よりも姫が許せない事だろう。

今だって水竜のために、水竜の神殿の為に最善を尽くそうとした結果が、少し方向を間違ってしまっただけに過ぎない。

副作用のある薬など使わなくとも、姫がその業務を遂行できるとご本人が思ってくれば、状況は改善するのだらうけれど。

でも誰が薬を止めると姫に言えるんだ。誰も言える者はいないだろう。神殿の最高権力者である神官長に意見するなど、一神官では難しいはずだ。

俺以外、止めろって言える人間はいないのか。

だが俺がいくら言ったって止めるわけないよな。その薬を使うことさえ「水竜様のため」なのだらうから。

何て姫に言ったらいいんだか。考えただけで頭が痛くなるな。

「祭宮殿下っ」

扉を勢いよく開けたかと思うと、気色ばんで頭から湯気が出ていくかのような形相で姫が部屋に入ってくる。

「い、いかなさいましたか」

鼻の穴を膨らまし、到底真相の姫君とは思えないような勢いで、掴みかからんばかりに近寄ってきた姫に体が引ける。

「あーなーたーはっ。一体巫女に何をおっしゃいましたのっ」

「へ？ 巫女？」

「へ？ じゃありませんわよ。あなたが余計な事を巫女に吹き込んだのでしょっ」

掴みかからんばかりではなく、実際に掴みかかられ、思わず両手を降参のポーズのように顔の横に上げる。

一体どうしたっていうんだ。おおよそ姫らしくも無い。

寧ろこんなに感情をむき出しの姫なんて、初めてだ。

「何もおかしいことは申し上げておりません。ただ、神官長様に戴冠式にご臨席頂きたいというこちらの希望を申し伝えただけです」

事実をありのままに、内容に若干の省略はあるものの伝えたのだが、姫のお怒りは解けない。

「それだけですか」

「ええ。それだけです。神官長様のお体の具合も芳しくないように

お見受け致しましたし、王都での静養をなさればとご提案致しましたが、それに何か問題がおりでしょうか」

「ありですわ。大ありですわっ。あなたがどんな言い方をしたかは存じ上げませんけれど、どうしてわたくしが巫女に『王都に帰りたいがつている』と思われなくてはならないのか。そんなこと微塵も思っておりませんのに」

ぶいっと横を向いて、姫は奥殿の方に目を向ける。

その瞳が怒りから悲しみに瞬時にして変わってしまったようだ。

「……わたくし、水竜様に呆れられてしまったかしら」

涙声で涙目で、心の底から不安を感じているのが良くわかる。

指先から力が抜けていき、姫の両手はだらんと人形のように垂れ下がる。

しばらくすると膝からも力が抜けたのか、俺の座っているソファの肘掛にもたれるように、ぺたんと床に座り込んでしまう。

何故突然そのような結論が出たのかわからないが、姫は心から絶望しているかのようにも見え、拒絶される事を恐れた子供の横顔のようにも見える。

「わたくしはただ、水竜様のお力になりたいだけですのに。巫女にはそれがわからないのね。だから水竜様にきちんとしたわたくしの本当の気持ちも伝わらないのですわ」

落ち込んでしまった姫に掛ける言葉が見つからない。

口先だけの「そんなことないですよ」なんて言葉を姫が望んでいくわけないだろうし。

以前には見せなかった激しい感情にもどう対処したらいいのかわからない。

俺が出来る事といったら、姫の前にしゃがみこむ事くらいだ。そして詭弁を吐くことだけ。

「そのように絶望されては、水竜様がご心配になられるのでは」
力無く俯いてしまった姫に、そっと声を掛ける。

震える肩。もしかしたら泣いているのだろうか。俺が言った何か

が巫女であるササの怒りを誘い、結果として姫を傷つけてしまったのだらうか。

今まで姫の泣いたところなんて見た事も無い。こんな形ばかりの言葉が、姫の心の慰めになるのだらうか。

「わたくしは、わたくしの出来る事を、精一杯……それなのに、それなのに」

予想に反して姫は泣いてはおらず、怒りに打ち震えていた。

真っ赤に見開いた目。わなわなと震える口元。般若の如き形相といつでも過言ではないかもしれない。

あまりの変貌ぶりに、ただ姫を見つめることしか出来ない。

ぎゅっと握り締められた拳もふるふると震えている。

人はそこまでの怒りを感じることが出来るのだらうかとさえ思うほど、元々心臓の弱い姫がこのまま憤死してしまうのではないかと心配になるほど、姫は怒りを全身で表している。

「許せませんわ。わたくしを侮ることも。見くびる事も。わたくしは神殿の為を思い、水竜様の為にと心を籠めてお仕えしておりますのに」

ぎりりと歯を食いしばる姫が鋭い視線を俺に向ける。

「殿下」

「はい」

「わたくしは誰が何と言おうとも神殿を出ません。わたくしだけがこの神殿を束ねることを水竜様に委ねられた神官長なのですからお忘れにならないで」

憎しみさえ感じるような目線で俺をむき出しにして怒り、唾を飛ばしながら言いたいことだけ言うと、姫は立ち上がって壁際の神官に声を掛ける。

「祭宮殿下がお帰りよ。ご案内を」

屈んだまま見上げた姫の横顔は、美しい姫ゆえに余計に凄みを感じずにはいられないものだった。

はあつと目の前に座った娘が溜息を吐き出す。

話の腰は折らずにきりのいいところまで聞いたところで、しらつとした目を俺に向ける。

「お父様。何でお二人が怒ったのか、未だにわかっていらっしやらないでしょ」

呆れ顔で娘が眠る彼女へと目を向ける。

「お母様可哀想。なんでこんなお父様が良かったのかしら。それとも男なんてみんなこんなものなのかしら？　ねえ、小鳥」

小鳥と呼ばれたのは、やたらと声が小さい娘が巫女だった時の御付神官。小鳥の囁きのように小さな声というのがその由来らしい。

「あの、僕にはちよつとよくわかりません」

消え去りそうな声で恥ずかしそうに俯きながら小鳥が答えるのを聞き、娘は深く溜息を吐き出す。

冷ややかな視線を俺に向け、じーっと俺の目を覗き込む。

「お父様が感じていた通り、もしもお母様がその時点でお父様に好意を抱いていたのだしたら、ものすごくショックを受けたに違いないと思うの。だって、もし私だったら好きな人が他の女の人のこととで右往左往しているところなんて見たくないもの」

「そういう風に受け止めるものか」

「そうよ」

ふんつと鼻を膨らませて胸を張って言い切る娘に、今度はこちらが溜息を溢す。

昔話をしていたせいか当時の気持ちに胸に蘇り、あの時に感じていたモヤモヤとした言いようのない淀んだ気持ちと使命感を思い出す。

「男つてのは、恋愛ばかり考えているものではないんだよ。残念だけどね、あの時は彼女がどのように感じたかなんて考えようと思わなかったね」

「ひどっ。お父様って冷たいのね」

「冷たい？　そうかな？　そうじゃないよ。あの時は祭宮として、何が神殿にとつて最善かを考えてそれに則って行動していた。つまり、祭宮としては姫に休養をとというのが神殿にも王家にも最善の策だと思って動いていた。ただそれだけに過ぎないよ」

そう。あの時は俺は神殿を守りたかった。姫を守りたかった。王宮のゴタゴタに巻き込まずに、どうやって神殿の神聖化を保つか、それだけを念頭において行動していた。

王宮に戻った後、何故姫を戴冠式に出席させないのだと、どこから話を聞きつけた次王である兄貴に詰られたが、事が露見しないのだからかえってこの方が良かったのかもしれないと心密かに思っていたほどだ。

俺が罵倒されるだけで済むのならば、それでいいじゃないか。そう、思っていた。

「祭宮は外部から神殿を守り、王家と神殿を繋ぐ者。そこに恋だの愛だのなんてものを持ち込む必要があるかな」

「……それは理想論でしか過ぎないと思うの、お父様」

他にも沢山言いたいことを抱えているであろう娘に微笑み掛ける。「いつか、お前にもわかる時がくるよ。恋だけでも、仕事熱心なだけでも立ち行かなくなる事があることがね」

「意味深ね。っていうことはお父様は知っていたの？　お母様がこの時に傷ついていた事」

「さあ、どうだろうね。ただ一つ言えることは、掛け違えたボタンを戻す事は難しいってことだ。人と人の間ではね」

あの日、もしも彼女を傷つけたことに気が付いていたら、何かが変わっただろうか。今なお続く後悔の日々は来なかったのだろうか。後になって分析してみればわかることだが、多分俺は彼女に恋をしていた事は間違いない。

だけれどそれを重要項目だとは思ってはいなかった。その事はずっと後になってから考えればいい問題だとしか捉えていなかった。だから、傷つけたなんて微塵も思っていなかった。後に彼女から

聞かなくては。

その時の俺にとって最重要項目は、どうやって神殿を外部から守るか。神殿に付け入る隙を与えないかという事だった。

兄貴の姫を正妃に欲しいという言葉も、頭のどこかに引っかかっていた。もしかしたら兄貴の勢力が神殿内に手を伸ばして、姫の異変に気付いてしまうかもしれないという風に焦っていた。

俺は俺の手の中にある「祭宮」に付随する全てを守りたくて躍起になっていた。巫女である彼女も、姫も、水竜も、神殿も。そして、俺自身も。

それが俺の弱さであるとは、全く気が付かずに。

王宮は、いや国中が戴冠式でお祭りムードだ。

戴冠式用にと誂えた真新しい正装に袖を通し、着丈や袖丈の最終調整を仕立て屋たちが行っている。

冷めた瞳で外を眺めていると、どこかで花火を上げているのが見える。恐らく戴冠式で上げる花火の練習か何かだろう。

パンパンという乾いた音がしたかと思うと、雲ひとつない青空に白い火花が散っていく。

戴冠式か世継ぎである「カイ」が誕生した時くらいにしか上げられない花火だ。大衆は皆、楽しみにしているだろう。

部屋の中の女官や官吏も顔を上げて、窓の外を見つめる。仕立て屋たちの手も止まる。

どこか皆、浮ついた表情で空を見上げる。

それなのに、俺の心は一向に晴れ渡らない。

この春の澄んだ空のように、雲ひとつない晴れ晴れとしたものになればいいのに。

相変わらず神殿の状況は変わらない。

神官長は薬に頼りきったまま、巫女と神官長は疎遠のまま。神官たちの間の亀裂も深いようだ。

俺の知らぬところで何やら事件があったようで、以前よりも派閥間の対立が激しくなっていると報告を受けている。

何を馬鹿馬鹿しい事をやっているのだから、あの二人は。

婚約者である神官長と、村娘である巫女。立場だとか生育環境だとか、それ以前に性格的なところで合わないのかもしれないが、何とかならないのか本当に。

二人の関係が改善されれば、神官長の薬の量も減ってくるのではないだろうか。

そもそも神官長が少し大人になって巫女を引き立ててやれば、神

官たちだつて巫女を侮るような事もないだろうに。全く。

それが間接的に薬を減らすような結果になるという事に気付いてくれればいいのだが。

どういう薬をどのようなルートで神殿が手に入れて神官長に処方しているのか、それをギーとルデアの二人にそれとなく探らせている。

未だ軍に席を置くギーは軍医などにも顔が利くから、薬の入手ルートをあたる事が出来る。

ルデアはその知識をもつてすれば、その薬がどの辺りで生産されているものであるのか。合法なのか非合法であるのか、場合によっては裏に誰がいるのかさえ掴んでくるだろう。

友であり優秀な部下でもある二人に任せておけば、薬の問題については説明される日も近いだろう。

王宮内は戴冠式を迎えるにあたって、表面上の対立は収まっているようだ。

もうどうにもならないということが大臣や官吏たちにもわかってきたのだろう。

王の裁決は臣下の者があれこれ言おうとも、一度決まった事は揺るがない。今まで何をバタバタとしていたのだろうと思うくらい、戴冠式に向け、王宮は一枚岩になっている。

二つの問題は、一見すると片付いたように思える。憂えることは何も無い。

それなのにどうしてだろう。俺だけはお祭り気分とは程遠い。

言葉に出来ない不安感のような不快感。

頭の中に響きわたるのは「そこで運命にあうでしょう」ということ神託。

一体何を求められているのだ。運命とは何なんだ。

俺の運命とやらが巫女であるササならば、戴冠式と繋がるものなど何もない。

神殿とは自主独立を基とした宗教組織。王権などとは対極にある

場所。その中において最も聖なる存在である巫女。

繋がる系はどこにも見えないのに、運命とやらが俺に何かを求めている。

漠然と感じるこの感覚が正しいのかどうかはわからないが、何かが起こるのであるうと感じている。

突然全ての権力闘争がなりを顰めたのがおかしい。

この静けさは、何かの始まりのようにしか思えない。

「青き衣。よく似合っておる」

戴冠式の日、今日をもつて引退する父王に声を掛けられる。

「ありがとうございます、陛下」

静かに頭を下げる俺のことを、目を細めて見つめる顔は王のそれではなく、父のものだ。

式典を前に、直系のみが入ることを許された控え室の中、兄上は軍の大將軍に相応しいだけの勲章を付けた軍服に身を包んでいる。

父もまた沢山の勲章を身に付け、普段はあまり被ることもない王冠を頭に乘せて王の正装に身を包んでいる。

その中で俺だけがやけに軽装だ。

青い衣、青い石。それが俺を飾る全て。華美な装飾は一切無く、

巫女の正装にどことなく似た雰囲気を持つ古い民族衣装を基にしたゆったりとした衣。

血の穢れを拒む聖なる存在である水竜に仕える者の代表である俺は、一切の刃物は手に持たない。故に飾りとして帯剣する事も無い。

また故事においては「青」は死者や別世界を表す色として忌避されてきた。現代においても、「青」は好まれて使う色ではない。

王太子で次期国王である兄貴が、大地の恵みを表す「緑」を。

全軍の指揮権を持つ兄上が、血の色を表す「赤」を。

王である父は、清廉潔白さと公平さを表す「白」を身に纏っている。

それに対して俺は、縹と呼ばれる忌むべき存在を表す「青」だ。

今更それに対して深く考えたりもしないが、こう並ぶとなかなか嫌な気分にもなる。

疎まれていたわけでは無いだろうし、迷信深い年寄り以外は「青」をむやみやたらに忌避したりはしていないが、無駄に増えた知識が俺の立ち位置を再確認させてくれる。

「青色の衣つて、綺麗ですよね。空や川や、見たことはないですけど海の色をしていて」

そうササは笑っていた。あれは確か巫女になってからだっと思った。

神殿の中は青だらけ。その中でも一際鮮やかな「蒼」を身につけることを許された彼女には、青は誇らしい色でもあるのかもしれない。

抜けるような青空を表す俺の青と、こんこんと沸き出でる泉の深さを表す彼女の青。

似ているようで似ていない二色の衣を比べて、そんな風に笑っていた。

記憶の中の笑顔が言う。青でいいのだと。

今はもう求めていない、他色の衣。それなのに、どうしてこんなにも心が曇るんだ。父の褒め言葉も素直に受け取れないほどに。

「祭宮」

静かな兄上の呼びかけに応えるように首の向きを変える。

同じように「緑」から遠ざけられたというのに、一際目を引く「赤」を身につけた兄は穏やかに笑っている。

「緊張しているのか」

「いいえ。……いや、もしかしたらしているかもしれませんが」

苦笑を浮かべると、兄上がくすりと笑いを漏らす。

兄上は兄の顔をして笑う。將軍の風格は漂わせているものの、どこまでも弟に甘い兄の顔だ。そんな兄上を父王は目を細めて見つめている。

「お前でも緊張する事なんかあるんだね。豪胆な、いや違うな。怖

いもの知らずの三男坊の癖に」

「そんな事はありませんよ。人並みに緊張したりもしますし、そこまで考えなしではありません」

兄の言葉に、ははつと声を出して笑ったのは父王だ。

「一番とんでもない事をしでかすのは、いつだってウィズラールだったな。ジリアンがウィズラールを甘やかすから」

「甘やかされてませんよ。兄上は俺にはものすごく厳しいですよ」
にこにこ笑ったまま、ポンつと父王が俺の肩を叩くが、それ以上は何も言わなかった。ただただ微笑んでいるだけで。

兄上もまた一度肩を竦めた後は、口を閉ざしてしまった。

二人とも何かを心の中に抱えているはずなのに、子供の頃にはもつと二人の心が近かったはずなのに、今の俺には何も見えない。

見えないんじゃないかと、見ようとしていないんだよ。きっと兄上ならそう言うのだろう。

けれど、衣の色が一人一人変わっていくたび、父上も兄上も兄貴も、どんどん遠ざかっていったような気がするんだ。

戴冠式が始まる合図である大砲が打ち鳴らされる時まで、二人ともそれぞれ物思いに耽っていて部屋の中を沈黙が支配していた。

式が始まるというので控え室を出る為に腰を上げると、父王が俺たちを振り返る。

「ティティズに力を貸してやってくれ」

面と向かって言われたことがなかった言葉に息を呑む俺とは対照的に、兄上は軍隊式の臣下の礼を取る。

「畏まりました、陛下。我が忠誠は永遠に陛下のものでございます」
どこか芝居かった兄上を父王は鼻で笑い、衣を翻して部屋の外に出る。

王の姿は何度も見ていたのに、何故かこの瞬間の父の背中が、最も王らしく見えたように思う。

王としての責務を終える最後の瞬間こそが、最も王らしいというものおかしな話だが。

残された兄と俺は、肩を並べて回廊を進んでいく。

赤と青。

対照的な二色の衣。

軽快で動きやすく作られた赤い軍人の衣。ゆったりとして幾重にも衣を重ねて床すれすれに、今にも引きずりそうなほどの機能性は全く考えられていない祭宮の衣。

肩を並べて歩いているのに、全く違う世界に生きているかのようだ。

初めてこの衣を手にした時の絶望感。

世界から見放されたかのような、拒絶されているかのような、孤独と怒り。あれは一体どこへ消えたのだろう。どうやって昇華したのだろう。

兄上のようなあたりたかった。兄上のような軍人になりたかった。

赤い衣が、幼かった頃の夢を思い出させる。

兄の背中だけを追い続けていた俺だから、緑色の衣にも白き衣にも手が届かなかったのだろうか。

俺に相応しいのは真に相応しいのは青なのだろうか。

いや、そうじゃないな。

あの深い青と並んでも恥ずかしくないよう、俺は俺で前に進んでいかなくてはならない。政治にも軍事にも口を挟まない。祭事を執り行いながらも王家の最後の切り札になれるように。

青空の中、緑の衣が風に揺れる。王冠が光を反射して輝いている。

民は大河の向こう岸で歓迎の歓声を上げ続けている。

王になり誇らしげに手を振る兄貴の横顔を見つめ、兄貴を挟んで反対側に立つ兄上に視線を移す。

兄上は軍人として、王家の者として胸を張って民に微笑みかけている。

慈愛に満ちた表情に見えるそれが、兄貴には気に入らなかったようだ。それを知るのもう少し先のことになる。

新しい御世はどのようなものになるのか。

期待に胸を膨らませていたのは、民だけではなく官僚や大臣たちも同じなのだろう。

浮ついた空気がそこかしこから流れてくる。

今だけなのかもしれないが、仲の悪いことで有名な法務財務外務の三大臣ですら笑い合っている。

新しい御世は動き出したんだ。

俺を含む王宮で活動をする全ての人間の心中など置き去りにして遠く、川向こうを眺める。それから川の上流へと目を向ける。

そしてこの国のもう一人、いやもう一匹の支配者に思いを馳せる。お前には見えているのか。この国の未来。この国の運命。そして俺の運命。

ふわりと風が衣を揺らしていく。

夜の闇が迫りつつある真っ赤な空には白い光が大輪の花を咲かせる。

支配者の顔をして何一つ持たない俺が、王である兄貴と將軍である兄上と肩を並べて群集に手を振ったり笑みを振りまいたりしている。

これでいいのだろうか。これが俺の運命なのだろうか。

何も持たず、何もせず、さも権力者のような顔をして兄たちと肩を並べて鎮座していることが。

きつとギーヤルデアに心中を吐露すれば「仕事はたっぷりありますよ」と嫌味の一つも言われる事だろう。

兄貴にとって一番輝かしいこの瞬間、俺は俺の立ち位置について考えざるを得なかった。

俺には何が求められているのだ。

国にも、民にも、水竜にも。

俺を動かす運命ってヤツは、一体何なんだ。このままここで燻っていればいいのだろうか。

目の前の熱狂的な群集とは違い、俺の心は冷める一方だった。

わからない。何も見えない。何を求められているのかわからない。けれど民は新王とそれを取り巻く環境に歓迎を表している。

やれる限りの頃をやるしかないのだろうけれど、それが皆目見当がつかないというのはいかなものか。

俺って結構無能だな。うん。

溜息を押し殺し笑顔を貼り付けたまま、民への新王顔見世を終えて王宮に入る。

この後晩餐会があるのだが、この格好ではどうにも動きにくい。これでダンスを一曲など到底無理だ。

だが全員が正装で列席するのだから、俺だけが軽装で出席するというわけにもいくまい。

まあこれでお嬢様方の「踊ってくださいませんか」攻撃をかわす理由が出来たと思えばいいか。

そんな事を暢気に考えつつ、護衛担当でありつつ名家の子息であるギーと肩を並べて回廊を進んでいく。

これといった会話もせず黙々と前を歩くギーの背を見つつ歩き続けると、ふいにギーが足を止める。

「どうした」

感情を排した声で問いかけると、ギーが眉間に皺を寄せつつ振り返り、たった今通り過ぎた曲がり角を指差す。

無言の主張に細い角のほうに目を向けると、呼び止められた風なスージがルデアと立ち話をしている。

ルデアは生家が若干格が下がるので、ルデアの父以外は正式な招待状は届いておらず、今日の戴冠式には出席していない。晩餐会も正餐の形式で行われるので、更に列席者は絞られている。そこにルデアの席はない。今日は一日休みを取っているはずだ。

それなのに何故ここに。

祭宮の政務用の塔からも離れているし、あの先にあるのは議会の会議場か？ そのようなところに今日何故ルデアが行く必要がある。腕組みをして、ルデアとスージからは見えないように壁に寄りか

かり考え込んでみると、ギーがゆっくりと首を横に振る。

とんとんとんと手にした懐中時計を指差すので、時間があまり無い事が伝わってくる。

今考えても仕方ないな。

ふうつと一つ息を吐いて、再び玉座の据えられた王の間と呼ばれる部屋を目指す。

正式な行事や外国からの使者を招く時などにしか使われない部屋で、通路を挟んで向かいには社交場も兼ねた広い部屋がある。

長く気の張る時間が待っているので、ここでルデアのことに頭を使う余裕は無い。

もしかしたら薬関係で何かを掴んだのかもしれないな。それとも兄貴が神殿内に手を伸ばしているような気配があり、スージに確認でもあったのか。

ルデアもスージもかなりの情報通だ。何か互いの情報を確認しなくてはならないような事が発生したのかもしれない。だとすれば、後日報告が上がってくるだろう。

そのように結論付け、王の間へと進んでいく。青の衣を翻しながら。

「祭宮様」

談笑していた集団から声を掛けられる。

誰かと思ったらライだった。周囲にはライと同じ法務大臣一派の連中がニコニコと笑っている。

法務大臣一派は表立っては誰を支援するとは表明していなかったが、兄上に対しての支援はかなりしていると聞く。

「本日はおめでとうございます」

「ああ、ありがとう」

王になった兄貴への賛辞を弟として受け止める。

ライはまだ春だというのに暑そうに汗を拭きながらニコニコと笑みを浮かべる。

「今日の良き日が新王陛下の御世において長く続くと良いですね」

「そうだな。そうなる事を祈っているよ」

再び揉め事など王宮内で起こされても面倒だ。新王の御世になつたばかりなのに王宮内で分裂したりされては、治世にも影響が出る。それは王族に名を連ねる者として、あまり好ましくない事だと認識している。

子供ではないので兄貴がいけ好かない野郎だとしても、それを表立って表明したり王政の足手まといになるような事をするつもりはない。

王になつたのならば、民にとって国にとって最もよい政治を行ふべきであると思つし、それを臣下の者としては手助けするのが当たり前の事だ。

しかし俺が余計な口出しをすることでも無い。

兄を守り立てて欲しいなどということは俺が言つべき言葉ではなく、それは先王である父のみが言える言葉だ。

「皆は晩餐には出席しないのか」

「いえ、我々も出席致します。本日の素晴らしい戴冠式について雑談を交わしておりました。遅くなるといけませんので、どうぞお先に」

全員做つたかのように頭を下げるので、その横を擦り抜けていく。ライの横を通り抜ける時「気をつけろ」と囁くような声が耳に届く。

どういう意味があるのか聞くこともなく、何事も無かつたかのように通り抜ける。

ライの言葉は、恐らくその場にいた連中には何の事かわかっているだろうし、俺に対して言つた言葉も聞こえているだろう。

法務大臣一派が、どうして俺に警告を？

晴れの日だというのに、水面下では何かが動き出しているようで、暢気に酒を飲んではいられないそうだ。

「ギー」

前を歩くギーに声を掛けるが振り返らない。

「今晚残業」

「畏まりました」

歩いたまま言葉を交わす。

次第に聞こえてくる宴を待つ人々の声。浮ついたその声だけが、
今日がめでたい日なのだと言に教えてくれているようだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1300s/>

王子様の恋

2011年9月17日22時18分発行